

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第33冊

# 鹿田遺跡 11

— 第24次調査 —

(医歯薬融合棟新営に伴う発掘調査)

2018年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター





1. 牛の絵馬 (井戸1 : W1)



2. 猿駒曳の絵馬 (井戸1 : W2)





## 序

発掘調査は、時として思いもかけない感動を与えてくれます。鹿田遺跡第24次調査でも、そうした瞬間に遭遇することとなりました。

同遺跡は、1983年度から30数年にわたって発掘調査を重ねてきた遺跡です。その中で、古代～中世の集落は、藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」との関係から、特に注目されています。本報告の調査地点は、岡大キャンパスに広がる鹿田遺跡の中では西端にあたり、集落の端と評価される場所でした。そうした場所にもかかわらず、奈良時代に遡る立派な井戸が見つかりました。その時期は、まさに、鹿田遺跡における古代集落の始まりを告げるものでした。さらに驚くことに、その井戸からは、現在の絵馬と同じ形状の板が2枚重なって出土したのです。当初、その絵柄に気づかず取り上げた後、ウマとウシ、そしてサルが浮かび上がるとともに、大きな感動をよぶこととなりました。

それだけではありません。古墳時代の調査においても、阿波地域から持ち込まれた大型の壺が棺として埋められていました。なぜ、こんなところに、という疑問とともに、同遺跡の重要性を改めて感じたところです。その他にも、井戸の上屋を考えさせられる痕跡など、これまでにない多くの情報が得られた調査でした。

発掘調査は、絶えず新たな情報を提供してくれます。それを見逃さず、目をこらしそれに応えること、そして、それを広く伝えることが私たちの責務です。幸いにして、絵馬はレプリカ作成を経て、かつての姿を将来にとどめることができました。本報告書と合わせ、より多くの方々に、その情報を発信していく所存です。

こうした発掘調査の成果を報告書として、ここに刊行することができましたが、その背景には、多くの方々のご尽力があったことはいまでもありません。最後になりましたが、関係各位および関係各機関に対して厚く御礼申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長(理事) 菅 誠 治  
副センター長 山 本 悦 世



# 目 次

<b>第1章 歴史的・地理的環境</b> ……………(南健太郎)	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡……………	1
第2節 鹿田遺跡の概要……………	3
a. 構内座標……………	3
b. 既往の調査成果……………	5
<b>第2章 調査の経過と概要</b> ……………(南)	9
第1節 調査に至る経緯と経過……………	9
a. 調査に至る経緯……………	9
b. 調査と報告書の体制……………	9
c. 調査の経過……………	10
第2節 本調査の概要……………	10
<b>第3章 調査の記録</b> ……………	12
第1節 調査地点の位置と層序・地形……………(南)	12
a. 調査地点の位置……………	12
b. 層序……………	12
c. 地形……………	16
第2節 弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物……………(南)	17
a. 溝……………	18
b. 土器棺……………	18
c. 土器溜まり……………	22
d. 焼土集中……………	22
第3節 奈良時代の遺構・遺物……………(南)	25
a. 井戸……………	25
b. 土坑……………	31
c. 溝……………	31
第4節 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物……………(南)	32
a. 井戸……………	33
b. 土坑……………	44
c. 溝・土手状遺構……………	46
d. 畦畔……………	53
e. ビット群……………	53
第5節 近世・近代の遺構・遺物……………(野崎貴博)	53
1. 近世……………	54
a. 土坑……………	54
b. 溝……………	64
c. 土手状遺構……………	66
d. 畦畔……………	66
2. 近代……………	67
a. 畝状遺構……………	67

第6節 遺構に伴わない遺物	(南)	67
<b>第4章 自然科学的分析</b>		70
第1節 鹿田遺跡第24次調査出土木製品類の樹種	(能城修一)	70
第2節 鹿田遺跡第24次調査出土動物遺存体	(江川達也)	76
第3節 鹿田遺跡第24次調査出土土器の胎土分析	(白石 純・南)	82
第4節 鹿田遺跡第24次調査出土種子	(南・沖 陽子)	83
第5節 岡山大学鹿田遺跡出土木製品の樹種調査結果	(株吉田生物研究所)	87
<b>第5章 結語</b>	(南)	90
<b>遺構一覧表</b>		91
<b>遺物観察表</b>		93

## 挿図目次

<b>第1章</b>					
図1 周辺遺跡分布図	2	図22 奈良時代の遺構配置		25	
図2 発掘調査地点と構内座標	4	図23 井戸1平・断面		26	
<b>第2章</b>		図24 井戸1出土土器		27	
図3 作業風景他	10	図25 井戸1出土木製品①(絵馬1:牛)		28	
図4 遺構配置図	11	図26 井戸1出土木製品②(絵馬2:猿駒曳)		29	
<b>第3章</b>		図27 井戸1出土木製品③		29	
図5 調査地点の位置	12	図28 井戸1出土木製品④		30	
図6 調査区断面(北壁・東壁)	13	図29 土坑1平・断面		31	
図7 調査区断面(南壁・西壁)	14	図30 土坑1出土遺物		32	
図8 弥生時代～古墳時代前期の遺構配置図	17	図31 溝3断面		32	
図9 溝1断面	18	図32 平安時代～鎌倉時代の遺構配置		33	
図10 溝2断面	18	図33 井戸2平・断面		34	
図11 土器棺1・2平・断面	19	図34 井戸2出土土器		35	
図12 土器棺1出土遺物	20	図35 井戸2出土木製品		35	
図13 土器棺2出土遺物	21	図36 井戸3平・断面		36	
図14 土器棺3平・断面	21	図37 井戸3出土土器・土製品・木製品		37	
図15 土器棺3出土遺物	21	図38 井戸3出土木製品②		38	
図16 土器棺4平・断面	22	図39 井戸3出土木製品③		39	
図17 土器棺4出土遺物	22	図40 井戸3出土木製品④		40	
図18 土器溜まり遺物出土状況	22	図41 井戸4平・断面		41	
図19 土器溜まり出土遺物	23	図42 井戸4出土遺物		41	
図20 焼土集中1平・断面	24	図43 井戸5平・断面		42	
図21 焼土集中2平・断面	24	図44 井戸5出土遺物		43	
		図45 井戸6平・断面		44	

図46	井戸6出土遺物	44	図69	溝11断面	64
図47	土坑2平・断面	45	図70	溝12断面	65
図48	土坑2出土遺物	45	図71	溝13平・断面	65
図49	土坑3平・断面	46	図72	土手状遺構種状遺構部分断面	66
図50	溝4・5断面	47	図73	畦畔1水口平・断面	66
図51	溝4・5出土遺物	48	図74	畝状遺構断面	67
図52	土手状遺構断面	49	図75	遺構に伴わない遺物の出土位置	68
図53	溝6断面	50	図76	遺構に伴わない遺物①	68
図54	溝7・8断面	50	図77	遺構に伴わない遺物②	69
図55	溝7・8出土遺物	51	図78	鹿田遺跡第24次調査出土 木製品類の顕微鏡写真①	72
図56	溝9遺物出土状況・断面	52	図79	鹿田遺跡第24次調査出土 木製品類の顕微鏡写真②	73
図57	溝9出土遺物	52	図80	動物依存体①(ウマ)	77
図58	畦畔1断面	53	図81	動物依存体②(ウシ・ウサギ属)	78
図59	近世～近代の遺構配置	54	図82	ウマ(下顎骨R)	78
図60	近世の土坑配置	54	図83	調査区の区割り	78
図61	近世の土坑A1類①	56	図84	鹿田遺跡出土鉢の産地推定	82
図62	近世の土坑A1類②	57	図85	出土種子①	85
図63	近世の土坑A2類	58	図86	出土種子②	86
図64	近世の土坑A2類、A3類	59	図87	木製品類の顕微鏡写真①	88
図65	近世の土坑B1類	60	図88	木製品類の顕微鏡写真②	89
図66	近世の土坑B2類	61			
図67	近世の土坑B2類、その他	62			
図68	溝10断面	64			

## 表 目 次

<b>第3章</b>		表8	動物依存体属性表②	79
表1	近世の土坑属性表	表9	動物依存体属性表③	80
表2	近世の土坑平面・断面相関表	表10	動物依存体属性表④	81
<b>第4章</b>		表11	鹿田遺跡第24次調査出土 土器の胎土分析試料一覧表	82
表3	鹿田遺跡第24次調査出土木製品類の樹種	表12	検出種子一覧①	83
表4	樹種一覧①	表13	検出種子一覧②	84
表5	樹種一覧②	表14	岡山県鹿田遺跡出土木製品同定表	88
表6	鹿田遺跡第24次調査出土動物依存体種名表			
表7	動物依存体属性表①			

## 図 版 目 次

巻頭図版	牛の絵馬・狼駒曳の絵馬
図版1	古墳時代前期の土器棺
図版2	古墳時代前期の土器棺

図版3	古墳時代前期の土器棺
図版4	弥生時代の土器溜まり・焼土集中、 古墳時代前期の土器棺

図版5	奈良時代後半の井戸	図版22	近世遺構全景
図版6	奈良時代後半の井戸	図版23	近世の土坑・溝・土手状遺構
図版7	奈良時代後半の井戸・土坑	図版24	近世の溝・土手状遺構・畦畔、近代の畝状遺構
図版8	平安時代～鎌倉時代遺構全景	図版25	古墳時代前期の土器棺出土遺物
図版9	平安時代の井戸	図版26	弥生時代後期の土器溜まり、 古墳時代前期の土器棺出土遺物
図版10	平安時代の井戸	図版27	奈良時代後半の井戸・土坑、 平安時代の井戸出土遺物
図版11	平安時代～鎌倉時代の井戸	図版28	平安時代～鎌倉時代の井戸出土遺物
図版12	平安時代～鎌倉時代の井戸	図版29	平安時代～鎌倉時代の土坑・溝出土遺物
図版13	平安時代～鎌倉時代の井戸	図版30	鉄製品、銅製品
図版14	平安時代～鎌倉時代の井戸	図版31	奈良時代後半の絵馬
図版15	平安時代～鎌倉時代の井戸	図版32	奈良時代後半の絵馬
図版16	平安時代～鎌倉時代の土坑	図版33	奈良時代後半の井戸枠
図版17	鎌倉時代の溝・土手状遺構	図版34	奈良時代後半の井戸枠
図版18	鎌倉時代の溝	図版35	平安時代の井戸出土木製品
図版19	鎌倉時代の溝・土手状遺構	図版36	平安時代～鎌倉時代の井戸出土木製品
図版20	鎌倉時代の溝		
図版21	鎌倉時代の溝・畦畔		

## 例言

1. 本書は岡山大学理蔵文化財調査研究センターが、岡山大学医歯薬総合棟新館に伴って実施した鹿田遺跡第24次調査の発掘調査報告書である。調査地点は、岡山市北区鹿田町二丁目5番1号に所在する。  
発掘調査地点は鹿田地区構内座標AN～AR、57～62区に位置し、期間は2012年11月27日～2013年4月25日、調査面積は1,867㎡である。
2. 発掘調査は岡山大学理蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても同委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げます。
3. 本書作成にあたっては、以下の方々にご教示・ご協力いただきました。また、能城氏、江川氏、白石氏、神氏からは玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。  
木材の樹種同定：能城修一（明治大学黒曜石研究センター）、動物依存体同定：富岡直人・江川達也（岡山理科大学）、土器の胎土分析：白石純（岡山理科大学）、種子同定：沖隆子（岡山大学環境生命科学研究所）、石器石材同定：鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科）、鉄製品・銅製品のX線写真：丸山敏則（岡山大学大学院保健学科）
4. 調査時の遺構実測・写真撮影は、野崎貴博・南健太郎・端野晋平・岩崎志保・宮崎尚子・仲田昭平が行った。
5. 報告書作成にあたっての担当は以下の通りである。  
<遺物>遺物の実測・浄写・観察表：野崎・南・西本尚美・大久保雅子  
遺物写真：野崎・南  
<遺構>浄写：野崎・南・端野・小野素子
6. 本書の執筆分担は目次に示した。
7. 編集は山本悦世センター長・清家章室長の指導のもとに、南が担当し、野崎の協力を得た。
8. 調査の概要は「岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2012」において一部報告しているが、本書をもって正式報告とする。
9. 本書に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

## 凡例

1. 本書で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標第V座標系（世界測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は通し番号とし、土製品にはC、石器にはS、木製品にはW、金属製品にはMをつけている。
3. 遺構・遺物に関するデータは一覧表にまとめた。
4. 拓本は内外面を掲載する場合には、左側に外面、右側に内面を置く。片面の場合は外面を基本とした。観察表の表記基準は以下の通りである。①内外面の色調を表記する場合は、「内面/外面」の順に表示する。②胎土は、微砂：砂粒径0.5mm未満、細砂：同0.5～1mm未満、粗砂：同1～2mm未満、粗礫：同2mm以上を基準とする。③法量単位は「cm」である。復元値には（ ）を付した。
5. 図版の遺物番号は本文中の遺物番号に一致する。

## 第2章 調査の経過と概要

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### a. 調査に至る経緯

本調査は、岡山大学鹿田キャンパス内の医歯薬融合棟建設に伴う発掘調査である。

2011年に、鹿田キャンパスでは医歯薬融合棟の新管が計画された。予定地は西側以外の三方を基礎医学棟に囲まれた駐車場として利用されていた。周辺では弥生時代中期以降の遺構・遺物が確認されており、本地点にも各時期の集落が広がっていることが予想されたため、発掘調査を実施した。調査員は3名が担当することとした。

#### b. 調査と報告書の体制

調査主体	岡山大学	学 長	森田 潔
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	北尾 善信（～2012年12月） 門岡 裕一（2013年1月～）
調査研究員（調査主任・報告書作成）	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助教	南 健太郎
調査研究員（調査担当・報告書作成）	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助教	野崎 貴博
調査研究員（調査担当）	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	教授	山本 悦世
調査研究員（調査担当）	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助教	岩崎 志保
調査研究員（調査担当）	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助教	端野 晋平 （～2013年3月）

#### 運営委員会委員

【発掘調査：2012年度】		【報告書刊行：2017年度】	
センター長	北尾 善信 （～2012年12月）	センター長	菅 誠治
センター長	門岡 裕一 （2013年1月～）	埋蔵文化財調査研究センター教授・ 副センター長	山本 悦世 今津 勝紀
大学院社会文化科学研究科教授・ 副センター長	新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授	新納 泉
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義	大学院環境生命科学研究所教授	加藤 謙司
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫	大学院医歯薬学総合研究科教授	大橋 俊孝
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二	大学院自然科学研究科教授・ 調査研究専門委員	鈴木 茂之
大学院環境学研究所教授・ 調査研究専門員	沖 陽子	大学院社会文化科学研究科教授・ 調査研究室長	清家 章
埋蔵文化財調査研究センター教授・ 調査研究室長	山本 悦世	事務局施設企画部長	松山 忠生
事務局施設企画部長	秋山 明寛		

### c. 調査の経過

#### <造成土除去> (2012年10月11日～11月22日)

調査区内には包含層よりも深くまで達している支障物が調査区北東・北西・南東の角部、および西半中央にあり、これらについては発掘調査終了後に撤去し、遺構の有無を立会調査で確認することになった。南東角部では支障物に囲まれた範囲に包含層が残存していたが、湧水が著しかったため造成土除去期間中に先行して掘り下げをおこなった(10月26日～30日)。それ以外の部分では65ラインに包含層以下まで達する共同溝があったが、発掘調査前に撤去した。また旧建物の基礎などもあったが、近代層以下へ及んでいるものは少なかった。

#### <発掘調査> (2012年11月27日～2013年4月25日)

近世層の調査までは調査員3名が担当し、それ以下は遺構が多数検出されたため4～5名で対応した。

造成土除去の際に近代の畝状遺構と中世以降の土手状遺構・畦畔1がすでに確認されていたため、これらの調査から開始した。近世では土坑が多数検出され、これらの調査を2013年1月まで行った。中世では井戸、土坑、溝などが検出された。これらの調査を2013年3月まで行った。奈良時代では調査区北端のBE62区で井戸が検出された。北側端部がわずかに調査区外であったが、調査範囲を大きく超えるものではなかったことから、一部拡張して調査を行った。その結果、本井戸では奈良時代後半の絵馬が出土した。古墳時代前期以前では土器棺や溝が確認された。掘り下げは弥生時代後期の遺物を包含する<9層>までを完掘し、弥生時代中期後半の遺構が確認された位置とその周辺(BD65～BG67区)では<10層>まで掘削した。

なお2013年3月4日には6名の中国人研究者の現場見学があり、3月30日には現地説明会を行った(119名参加)。また調査終了後に確認された奈良時代後半の絵馬についての記者発表を2013年5月23日に行った。



北東端 | 作業風景



中国湖南省文物考古研究所からの視察 | 溝



現地説明会

図3 作業風景他

## 第2節 本調査の概要

本調査では弥生時代中期後半～古墳時代前期、奈良時代、平安時代～鎌倉時代、近世～近代の遺構・遺物が確認された。

#### 弥生時代中期後半～古墳時代前期

BE64～67区では東西方向に走る弥生時代中期後半の溝1が確認された。その北側では窪みに堆積した焼土が検出され、南側では弥生時代後期の土器がまとまって出土した(土器溜まり)。また古墳時代前期の遺構としては土器棺1～4が挙げられる。

#### 奈良時代後半

BE62～BG64区およびBE67区で井戸1、土坑1、溝3が確認された。井戸からは絵馬が2点出土した。絵馬には狼が馬を曳いている様子を描いた狼駒曳と牛が描かれていた。狼駒曳の絵馬は国内初出土である。また牛も国内最古のもので、体の細部まで観察できる貴重な発見となった。



### 平安時代～室町時代

井戸、土坑、溝、土手状遺構、畦畔、ピットが確認された。遺構の時期は13世紀前半以前と14世紀代に分けられる。前者に属する遺構には井戸（井戸6を除く）や土坑、溝がある。井戸や土坑の多くは60～63ライン間に位置する。井桁や木枠、曲物の残りが良く、井戸を埋め戻す際の祭祀的行為が明瞭なものもみられた。溝は南北方向に主軸をもつものが中心である（溝6～8）。後者の時期に属するのは溝、土手状遺構、畦畔である。溝および土手状遺構は62ライン以東で確認され、溝4はBG61区で直角に方向を変え、溝4は井戸2～4を切って掘削されている。溝5の西側には方向を同じくする土手状遺構が作られており、土地区画に関わる構造物と考えられる。なお土手状遺構の西側では多くのピットが確認された。また遺構に伴うものではないが、BH59区では銅鏡と小皿、青磁碗がまとめて出土した。銅鏡は鹿田遺跡で初めての出土である。

### 近世～近代

近世では土坑、溝、土手状遺構、畦畔が検出された。井戸などの居住に関わる遺構はなく、本調査区は耕作地として利用されていたと考えられる。土坑はおおむねBF～BHライン間を、東西方向に2列が並列しており、調査区西端やBG61区では切り合いが著しい。土坑は平面形や断面形によるグルーピングが可能で、枠（桶）が入れられているものも確認された。62・68ライン付近では前代に構築された土手状遺構、畦畔が踏襲されている。土手状遺構の東側では、これに沿う南北方向の溝10も確認された。

近代では畝が検出された。土手状遺構よりも東側でのみ確認されていることから、近代においても土手状遺構が土地利用の境として機能していたと考えられる。

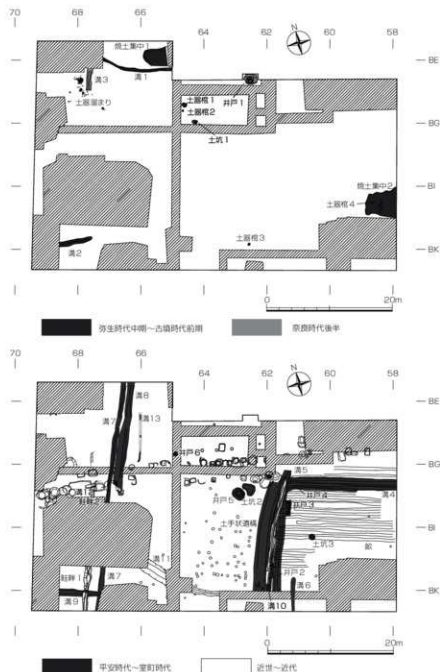


図4 遺構配置図（縮尺1/600）

## 第1章 歴史的・地理的環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は岡山市街地南部に所在する岡山大学鹿田キャンパス（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域と、その周辺に広がりをもつ縄文時代～近世の複合遺跡である。

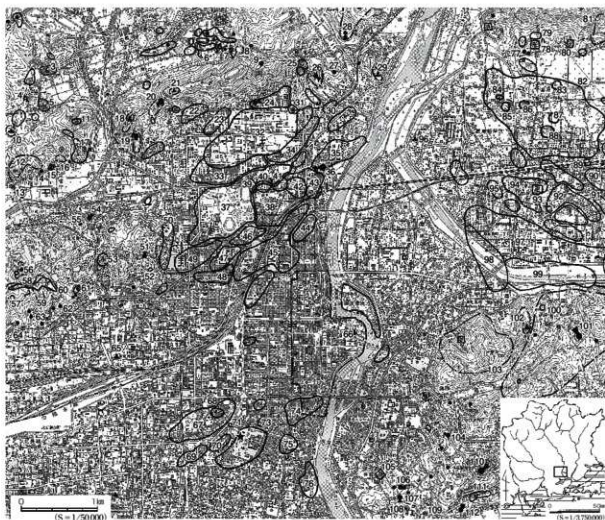
旭川は中国山地を間折しながら、狭い河谷を抜けて南流する。丘陵から平野へと遷る岡山市北区三野付近から流れは幾筋もの小河川となり、その間に自然堤防と後背湿地が点在する複雑な地形を形成している。本遺跡が位置する岡山平野は、旭川の堆積作用によって形成された沖積平野である。平野の周囲は半田山、龍ノ口山、操山など、標高150～250m前後の山塊によって囲われ、南は見島湾に面する。近世以降の大規模な干拓は平野を南へと拡大させ、現在では急速な市街地化も相俟って、平野の古地形を窺いしることは難しい。本遺跡は旭川の西岸約1km、見島湾からは北へ約7kmの位置にあるが、干拓以前には瀬戸内海とは至近の位置にあった。

本遺跡の周辺で確認されている人間活動の痕跡は旧石器時代までさかのぼる。現在のところ、その証はわずかで、操山山塊でナイフ形石器や細石器が採集されているのみである<sup>1)</sup>。最終氷期が終わり、気候が温暖化に転じると、氷河の溶融に伴う海進が始まる。海進のピークは縄文時代前期頃にあり、現在の岡山平野の広い範囲が水没したと考えられる。この時期に、半田山の裾部には朝寝鼻貝塚<sup>2)</sup>、そして中期中葉には津島岡大遺跡<sup>3)</sup>において遺構・遺物が確認される<sup>4)</sup>。続いて後期には津島岡大遺跡<sup>5)</sup>、百間川沢田遺跡<sup>6)</sup>などで住居址や貯蔵穴などの居住痕跡が初めて認められる。いずれも立地は半田山や操山の山裾部に近い微高地に限られている。そうした中で鹿田遺跡では中期前半～晩期の土器がわずかに確認されており<sup>7)</sup>、旭川河口付近に砂州状の高まりが点在していたことを窺わせる。

縄文時代の終わり頃、北部九州で受容された水稲農耕が列島各地へ伝えられるなか、瀬戸内地域では比較的に早い段階の水田遺構が確認されている。岡山平野の旭川西岸では弥生時代早期にさかのぼる可能性が指摘されている津島江道遺跡<sup>8)</sup>、弥生時代前期の津島岡大遺跡<sup>9)</sup>から津島遺跡<sup>10)</sup>一帯の遺跡群<sup>11)</sup>、旭川東岸では百間川遺跡群<sup>12)</sup>などがある。これらの調査成果から、前期にはかなり広範囲に水田が営まれていたことが明らかとなったが、現在までに集落が確認されているのは津島遺跡のみである。

旭川西岸域では中期を代表する南方遺跡群<sup>13)</sup>や松園遺跡<sup>14)</sup>・上伊福遺跡<sup>15)</sup>、後期になると、伊福定国前遺跡<sup>16)</sup>や天瀬遺跡<sup>17)</sup>などの集落遺跡を挙げることができる。鹿田遺跡<sup>18)</sup>では中期後半から集落が確認される。一方水田は、鹿田遺跡<sup>19)</sup>や大供中道遺跡<sup>20)</sup>で水田畦畔が検出されており、臨海性の集落でも、水稲農耕も含めた複合的な生産活動を行っていたことがわかってきた。

弥生時代末～古墳時代前期には、岡山平野を囲む山塊に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長墓系譜を読み取ることができる。旭川西岸では半田山山塊上に都月坂2号墳丘墓<sup>21)</sup>、都月坂1号墳<sup>22)</sup>、七つ坑古墳群<sup>23)</sup>が、旭川東岸では北側の龍ノ口山塊上に備前車塚古墳<sup>24)</sup>が、南側の操山山塊上に操山109号墳<sup>25)</sup>、網浜茶臼山古墳<sup>26)</sup>が築かれる。岡山平野における大型前方後円墳の築造は古墳時代前期後半から中期初頭に最盛期をむかえるが、中期の造墓活動は低調で縮小傾向にある。後期に入ると、周辺の山塊に横穴式石室を有する中小の円墳が多数築かれる。旭川西岸では平野西部の京山・矢坂山山塊に、東岸では龍ノ口山塊、操山山塊に築造される中小の横穴式石室墳が見られる。中には沢田大塚古墳のような大型の横穴式石室をもつものや、唐人塚古墳<sup>27)</sup>のような切石造りの石室を有する有力な古墳が認められる。古墳時代の集落の消長をみると、初頭の集落は弥生時代から継続するものが多く、本遺跡のほか、旭川西岸では津島遺跡<sup>28)</sup>、伊福定国前遺跡<sup>29)</sup>、旭川東岸では百間川遺跡群<sup>30)</sup>などがある。本遺跡では前期後半から中期にかけて断絶が見られ、その他にも規模を縮小する集落もみら



- |                        |                         |                         |                        |
|------------------------|-------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (弥生～近世)        | 31. 朝野鼻貝塚 (縄文前～後期)      | 60. 正野田古墳群 (古墳後期)       | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群      |
| 2. 富原大池奥山遺跡 (不明)       | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世)    | 61. 関西高枚山古墳群            | 89. 藤野遺跡 (弥生～古墳)       |
| 3. 荒神塚寺 (飛鳥～平安)        | 33. 津島新野遺跡 (弥生)         | 62. 若古墳 (古墳後期)          | 90. 乙之島遺跡 (弥生)         |
| 4. 上ノ成塚跡 (奈良)          | 34. 津島江田遺跡 (縄文～近世)      | 63. 乙之島古墳 (古墳後期)        | 91. 岡遺跡 (弥生)           |
| 5. 矢野塚塚寺 (奈良)          | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世)      | 64. 貝塚 (不明)             | 92. 赤田東遺跡・岡遺跡 (弥生～室町)  |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期)       | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期)       | 65. 高柳城跡 (室町?)          | 93. 幡多塚寺 (飛鳥～平安)       |
| 7. 藤跡池古墳群 (古墳後期)       | 37. 津市遺跡 (弥生～近世)        | 66. 岡山城跡 (室町～近世)        | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町)      |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期)        | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世)    | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世)      | 95. 船尾山遺跡 (弥生～室町)      |
| 9. 戸ノ上山古墳 (古墳中期?)      | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町)      | 68. 大供東遺跡 (弥生～室町?)      | 96. 中田城跡 (室町)          |
| 10. 種久城 (室町)           | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町)      | 69. 鹿田本町遺跡 (奈良)         | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世)     |
| 11. 坊上山遺跡 (古墳～室町)      | 41. 北方中沼遺跡 (弥生～室町)      | 70. 鹿田遺跡 (竊立岡山病院) 遺跡    | 98. 百間川原尾山遺跡           |
| 12. 中瀬津古墳群 (古墳後期)      | 42. 北方東沼遺跡 (弥生～近世)      | (平安～鎌倉)                 | (縄文中期～近世)              |
| 13. 貝塚 (不明)            | 43. 北方麓ノ内遺跡 (弥生～近世)     | 71. 敷布池 (別名: 大泉遺跡) (弥生) | 99. 百間川西尾山遺跡 (縄文中期～近世) |
| 14. 若百八幡堂古墳 (古墳)       | 44. 弘瀬遺跡 (弥生)           | 72. 大供中沼遺跡 (弥生～室町)      | 100. 藤山219号遺跡 (旧石塚)    |
| 15. 東瀬津貝塚 (不明)         | 45. 南方遺跡群 (弥生～近世)       | 73. 敷布池 (弥生期)           | 101. 倉山古墳 (古墳中期)       |
| 16. 東瀬津1号・2号墳 (古墳後期)   | 46. 松尾遺跡 (弥生～平安)        | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世)        | 102. 砂神寺城跡 (戦国)        |
| 17. 首邱 (白山神社) 首塚       | 47. 上伊藤遺跡 (弥生・古墳)       | 75. 新沼遺跡 (奈良～近世)        | 103. 藤山古墳群 (古墳後期)      |
| (鎌倉～室町?)               | 48. 上伊藤 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 76. 二日命遺跡 (弥生～近世)       | 104. 藤山03号墳 (古墳前期)     |
| 18. 高山城 (新+近世) 跡 (室町)  | 49. 南瀬津遺跡・伊藤定因宮遺跡       | 77. 曾入塚古墳 (古墳後期)        | 105. 瀬原塚寺 (飛鳥～平安)      |
| 19. 七ノ成墳丘・古墳群 (弥生～古墳)  | (弥生～近世)                 | 78. 貫田塚寺 (飛鳥～室町)        | 106. 瀬原茶臼山古墳 (古墳前期)    |
| 20. 都日加塚遺跡・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊藤西遺跡・尾封神社南遺跡      | 79. 貫田塚寺堂跡 (奈良)         | 107. 藤山09号墳 (古墳前期)     |
| 21. 平田山城 (戦国)          | (弥生～平安)                 | 80. 浄土寺 (奈良～室町)         | 108. 藤山202号遺跡 (平安～奈良)  |
| 22. 津島原居遺跡 (古墳～室町)     | 51. 津島古墳 (古墳前期)         | 81. 湯辺古墳群 (古墳前期)        | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?)       |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期)   | 52. 砂神寺遺跡 (弥生)          | 82. 瀬原岡付岡遺跡             | 110. 赤茶臼山古墳 (古墳前期)     |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町)      | 53. 南津寺 (奈良?) (室町)      | 83. 北ノ塚 (弥生～室町)         | 111. 赤茶臼山遺跡 (弥生～室町)    |
| 25. 津島東3丁目遺跡 (弥生・古墳)   | 54. 南瀬津古墳 (古墳前期)        | 84. 瀬原岡付跡 (奈良～平安)       | 112. 大塚山遺跡 (鎌倉～室町)     |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期)       | 55. 十二本塚古墳              | 85. 瀬原岡付塚遺跡 (南園長) 遺跡    |                        |
| 27. 不動堂古墳              | 56. 山崎城跡 (室町～江戸)        | (弥生～鎌倉)                 |                        |
| 28. 前古墳群 (古墳前期・後期)     | 57. 矢塚山西古墳群 (古墳後期)      | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安)      |                        |
| 29. 砂見山城跡 (戦国)         | 58. 矢塚山西古墳群 (弥生)        | 87. 八ヶ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) |                        |
| 30. 野田遺跡 (弥生期)         | 59. 鹿田山古墳群 (古墳後期)       |                         |                        |

図1 周辺遺跡分布図

れる。中期～後期には、旭川東岸で百間川原尾島遺跡<sup>20</sup>、旭川西岸で津島遺跡<sup>21</sup>、津島岡大遺跡<sup>22</sup>・伊福定国前遺跡<sup>23</sup>などで集落が確認される。

飛鳥・奈良時代には官衙や寺院などの拠点的な施設が造営され、領域の管理を目的とする条里制が施行されるが、これらから同時期の地方支配の一面をうかがうことができる。旭川東岸では飛鳥時代に創建され、平城宮式瓦が出土した賞田庵寺<sup>24</sup>のほか、幢多庵寺<sup>25</sup>、網浜庵寺など5カ寺が知られている。官衙とみられる遺跡や寺院の発掘調査では、特に備前国府に関連する官衙とみられるハガ遺跡<sup>26</sup>、総住建物や「市」の墨書がある土器を出土した百間川米田遺跡<sup>27</sup>などの成果がある。一方、旭川西岸では明確な寺院は確認されていない<sup>28</sup>が、本遺跡<sup>29</sup>で集落が確認されるほか、新道遺跡<sup>30</sup>で8世紀頃の火葬遺構を含む遺構が確認された。旭川河口周辺では網浜庵寺を含め、特殊な遺構・遺物の受容がみられ、後の鹿田庄の成立を考えるうえで注目される。

平安時代～室町時代には、岡山平野の南半部においては鹿田庄をはじめとするいくつかの庄園が成立したことが知られる。鹿田荘は藤原摂関家殿下渡領の一つとして藤原氏長者が代々領してきた庄園である。その所在については歴史地理学研究の成果から岡山市北区鹿田町周辺が有力な比定地とされてきた。本遺跡に加え、周辺の新道遺跡<sup>31</sup>、大供本町遺跡<sup>32</sup>での調査事例が増し、当該期の資料が蓄積されてきている。旭川河口西岸の二日市遺跡<sup>33</sup>でも、井戸や柱穴が確認されている。このように考古学的に鹿田庄の領域や内容を明らかにするための資料的基盤が整いつつある。一方、旭川東岸では百間川遺跡群において当該期の集落遺跡が知られており、大形の橋や区画された屋敷地などの調査が進んできている。また近年、鹿田遺跡（県立岡山病院）<sup>34</sup>の調査成果から、14世紀初頭頃に広範囲に及ぶ火災があったらしいことがわかり、その後集落の再編が行われた可能性が指摘されている。さらに鹿田遺跡第20次調査地点<sup>35</sup>では区画溝で囲まれた戦国期の屋敷地が確認されており、大供本町遺跡<sup>36</sup>でも同時期の屋敷地の並びが確認されている。この時期の集落についても具体的な様相が明らかになりつつある。

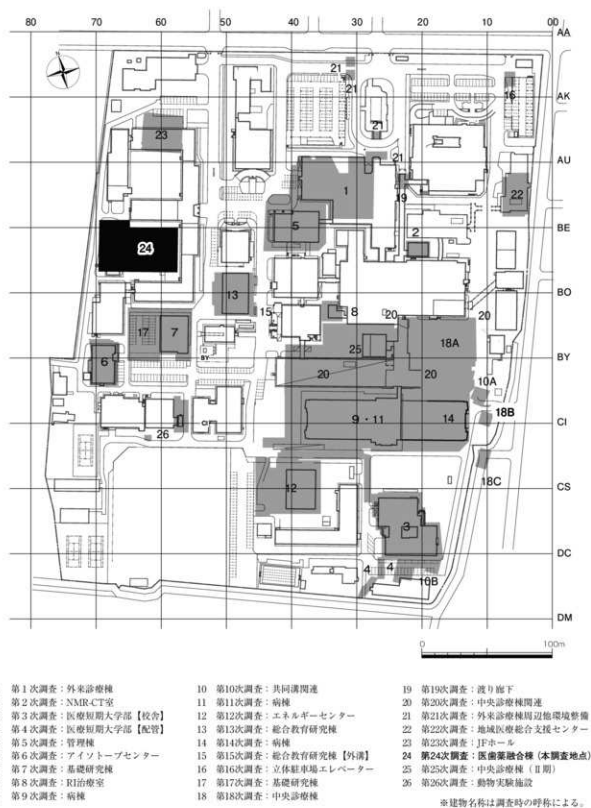
江戸時代以降、岡山城や城下町の整備が進められた。新道遺跡<sup>37</sup>では、遺構・遺物の内容から絵図に記載された城下町の南端部にあたる屋敷地であることが判明した。南方遺跡（裁判所地点）<sup>38</sup>で検出された遺構も絵図との対照により近世後期の武家屋敷であることが明らかになるなど、城下町の姿を示す調査成果が蓄積されている。城下町の整備とともに旭川の治水と城下町の防衛にちなう堀や用水の開削がなされ、江戸時代前期には城下町の西縁を南流する西川が整備される。西川は防衛・生活用水の供給・下流域の灌漑・水運などの機能を有しており、西川から分岐し、鹿田地区東辺を南流する枝川もそうした機能にちなうものであったと考えられる。本遺跡では枝川周辺に位置する第18次調査B地点<sup>39</sup>で、船着き場など水運に関わる遺構が検出されている。平野のより南部では大規模な干拓が進められ、海岸線は大きく南に後退した。そうしたなか、城下町外縁にあたる鹿田遺跡周辺では農村景観へと変化がみられる。

## 第2節 鹿田遺跡の概要

### a. 構内座標

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内に所在する鹿田遺跡の調査にあたり、周辺の市街地街区および構内の建物主軸に合致させた局地座標として、鹿田地区構内座標を設定している（図2）。鹿田遺跡の調査における位置関係の記録は、すべてこの構内座標系に基づくものである。

1983年から2002年度までの構内座標は、国土座標第V座標系（日本測地系）の（ $X = -149,800\text{m}$ ,  $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、同座標軸の北を東へ15度回転させた座標軸を基軸とする局地座標であった。2002年4月1日の改正測量法施行にともない、本センターでも2003年度以降に刊行する報告書からは世界測地系を採用することとしたが、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系



※AA001は、日本測地系によるX=-149,800,000.00m、Y=-37,400,000.00mの交点を原点として設定したものである。  
2003年から世界測地系による座標に移行したため、現在の表記となっている。

図2 発掘調査地点と構内座標（S=1/3000）

へと変換することとした<sup>20</sup>。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えることとしたのである。結果、構内座標原点の座標は(X = -149,456.3718m、Y = -37,646,7700m)と変換された。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は平行とはならない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北ではない。

構内座標は、原点から5m間隔で座標軸に平行するグリッドラインを設定して細分する。ライン名については、東西ラインでは2文字のアルファベットの組み合わせ、南北ラインは2桁のアラビア数字で表記している。すなわち、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとにAB、AC、…、AZ、BA、BB、…、BZとし、原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとに01、02、…、79、80とする。これらのラインの交差によって形成される5m四方の区画は、その北東角で交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区、…、と呼称する。

## b. 既往の調査成果

鹿田遺跡の範囲は「岡山県遺跡地図(第6冊、岡山地域)」<sup>21</sup>によれば、岡山大学鹿田キャンパスを中心に県立病院地点(岡山県古代古備文化財センターによる調査:図1-70)<sup>22</sup>、NTTドコモ中国ビル地点(岡山市教育委員会による調査)<sup>23</sup>を含む。本センターでは岡山大学鹿田キャンパスにおいて2016年度までに26回の発掘調査を終了している。

本遺跡で人々の本格的な営みが確認されるのは弥生時代中期後半からである。当該期は第1次調査地点<sup>24</sup>を中心とした微高地で居住域が確認されている。後期には第2次<sup>25</sup>・第5次調査地点<sup>26</sup>にも居住域が広がり、第18次<sup>27</sup>・第22次調査地点<sup>28</sup>でも遺構が確認されている。このころは中期以来の微高地を中心として、居住域が東西に広がるように展開する。さらに古墳時代前期前半には、第7次調査地点<sup>29</sup>・第17次調査地点<sup>30</sup>の微高地でも住居跡などが確認されるようになる。これらの居住域が展開する微高地間には低位部が入り込んでおり、第13次調査地点<sup>31</sup>では大規模な土器溜まりが形成されている。一方、耕作域としては第25次調査地点<sup>32</sup>で弥生時代中期後半にさかのぼる可能性のある水田畦畔が検出されており、後期には第9・11次<sup>33</sup>・第14次<sup>34</sup>・第26次調査B地点<sup>35</sup>(CD-CMライン間:図2-9・11・14・26)でも水田の広がりが確認されている。また26次調査A地点<sup>36</sup>では畝の可能性のある遺構もみられる。

その後、集落は中断期を迎え、古墳時代末～飛鳥時代に再び第1次調査地点周辺<sup>37</sup>に小規模な集落が姿を現す。第23次調査では当該期の須恵器に岡山県寒風窯跡群から供給されているものがあることが明らかとなった<sup>38</sup>。住居跡や土坑、土器溜りが確認されているが、その後の時代への継続性は弱い。

次に集落域のひろがりが見られるのは奈良時代後半から平安時代前半を中心とする時期である。鹿田遺跡一帯は古くから藤原摂関家の殿下領群の一つである鹿田庄の比定地とされてきた。当該期の遺構・遺物はそれを示唆するものと考えられる。鹿田庄の成立時期は不明だが、現在知られている史料<sup>39</sup>からは、少なくとも平安時代のはじめには藤原氏の支配下にあったとみられる。第24次調査地点では8世紀後半の井戸から猿が馬を曳くモチーフ(猿駒曳)と牛が描かれた絵馬が出土しており注目され(本書)、平安時代前半には第1次地点周辺<sup>40</sup>で掘立柱建物群、井戸、溝等の遺構・遺物が確認されている。後者では大型の井戸の周囲に大小の掘立柱建物群が軸を揃えて立ち並ぶ状況が復元されることや、墨書土器、円面硯<sup>41</sup>、踏脚硯<sup>42</sup>、木簡などの文字資料を中心とした特殊遺物が周辺を含めて出土していることが特に注意される。第1次調査地点の北側で行われた第21次調査<sup>43</sup>では当該期の河道が確認され、陽物形木製品が出土したことから、その位置が北側の敷地境界となっていたと考えられる。一方、南端については第3・4次調査地点<sup>44</sup>(DCライン付近:図2-3・4)で東西方向に流れる大規模な河道および橋脚や杭が確認されていることが注目される。橋脚を構成する柱は径約30cmを測り、その配列から架け替

えも想定される。このことは恒久的な橋の架橋を目指したものと評価され、架橋地点は通行量の多い要所であったものと思われる。

平安時代後半、10世紀代～11世紀前半には遺構は少なくなるが、本遺跡の西側に位置する県立病院地点では該期の遺構密度が高まり、集落が移動した可能性が指摘されている<sup>30</sup>。12世紀には構内のほぼ全域で周囲を溝によって区画する屋敷地が出現する。こうした区画の方向は、正方位からおよそ15度傾く現在の地割にはほぼ一致しており、古くから鹿田庄の位置を考える際に注目されるものである。13世紀～14世紀代には第6次<sup>31</sup>・7次<sup>32</sup>・9・11次<sup>33</sup>・14次<sup>34</sup>・20次<sup>35</sup>調査地点等で区画溝の大型化が見られ、屋敷地の再編が窺われる。そのほか、第7次調査地点出土の猿形木製品<sup>36</sup>や、第18次調査B地点<sup>37</sup>出土の猿形木製品といった特殊な遺物や絵図資料<sup>38</sup>の存在から、平安時代末～鎌倉時代に本遺跡一帯に人や物資が集中する賑わいのある集落状況が想定される。

戦国時代には第18・20次調査B地点<sup>39</sup>（BT～BDライン間）において濠に囲まれた屋敷地が確認されている。周辺が農村へと変化していくなかで屋敷地内の井戸から猿形水滴が出土しており、当該期の遺跡の性格を考えるうえで注目される。その後、江戸時代に入ると、本遺跡でも野壺や畦畔が認められる。岡山城下町の整備が進められる一方で、その南西に位置する本遺跡一帯は農村として整備される。そうした中、近年の調査では、第18次・20次調査地点<sup>40</sup>において近世後半の居住域の様相が、第18次調査B地点では、入り江状遺構が確認されており、該期の集落の状況が明らかになりつつある。

## 註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡久人他 1998「朝倉鼻具塚発掘調査概報」加計学術埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) 野崎資博編 2015「津島岡大遺跡21」岡山市構内遺跡発掘調査報告 第30冊
- (4) a 山本悦世編 1992「津島岡大遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊  
b 阿部方郎編 1994「津島岡大遺跡4」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊  
c 岩崎保志編 2005「津島岡大遺跡16」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊
- (5) a 二宮治夫編 1985「百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59  
b 平井 勝編 1993「百間川沢田遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (6) 吉留秀敏・山本悦世編 1988「鹿田遺跡1」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊
- (7) a 高畑知功 1988「津島江道遺跡」岡山県埋蔵文化財報告18  
b 草原孝典 1999「津島江道（岡北中）遺跡」岡山県埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度
- (8) 山本悦世編 2004「津島岡大遺跡14」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊
- (9) a 津島遺跡調査団 1969「昭和44年岡山県津島遺跡調査概報」  
b 岡山県教育委員会 1970「岡山県津島遺跡調査概報」  
c 島崎 東ほか 1999「津島遺跡1」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137  
d 平井 勝 2000「津島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151  
e 島崎 東ほか 2003「津島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173  
f 岡本泰典ほか 2004「津島遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (10) a 岡田 博編 1998「北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126  
b 高田基一郎編 2000「北方地蔵遺跡2 北方穀ノ内遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149  
c 柳瀬昭彦 1988「中溝遺跡」日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—日本考古学協会静岡大会実行委員会  
d 柳瀬昭彦 1988「南方茶田遺跡」日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (11) a 宇垣区野編 1999「百間川原尾島遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88  
b 平井 勝編 1995「百間川原尾島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (12) a 岡山市遺跡調査団 1971「南方遺跡発掘調査概報」  
b 岡山市遺跡調査団 1981「南方（国立病院）遺跡発掘調査概報」  
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981「南方遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
- (13) 内藤善史編 1996「絵園遺跡 南方遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (14) a 中野雅美 1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」岡山県埋蔵文化財報告14  
b 中野雅美・根本 修 1986「上伊福九坪遺跡」岡山県史 考古資料
- (15) a 杉山一雄編 1998「伊福定国前遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125

- b 金田善敬編 2005『伊福定国前道路2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188  
 c 亀山行雄編 2010『伊福定国前道路』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- 06 出宮徳尚 1986『天瀬道路』『岡山県史』考古資料  
 07 前掲註6文献  
 08 山本悦世編 2017『鹿田道路1回』岡山大学構内道路発掘調査報告 第32冊  
 09 河田健司 2000『大供中道道路発掘調査概報』  
 10 近藤義郎 1986『郡月坂二号弥生墳丘墓』『岡山県史』考古資料  
 11 近藤義郎 1986『郡月坂一号墳』『岡山県史』考古資料  
 12 七つ坑古墳群発掘調査団 1987『七つ坑古墳群』  
 13 近藤義郎 1986『備前草塚古墳』『岡山県史』考古資料  
 14 宇垣匡雅 1990『網浜茶臼山古墳・榎山109分墳の測量調査—古備の前期古墳Ⅲ—』『古代古備』第12集  
 福水伸哉・宇垣匡雅・古市秀治 2016『平井西山(榎山109号)古墳資料の研究』『古代古備』第27集  
 15 a 前掲註9文献  
 b 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』  
 16 伊藤 晃 1986『唐人塚古墳』『岡山県史』考古資料  
 17 前掲註9文献  
 18 前掲註9文献  
 19 a 江見正巳他 1980『旭川放水路(百間川)改修事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39  
 b 正岡隆夫編 1984『百間川原尾島道路2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56  
 c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島道路5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106  
 d 高田基一郎編 2008『百間川原尾島道路7 百間川二の尻手道路』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215  
 20 前掲註9 b、c、d 文献  
 21 前掲註9文献  
 22 山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大道路』11  
 23 前掲註9文献  
 24 高橋伸二 2005『史跡貫田庵寺跡』  
 25 出宮徳尚他 1975『種多庵寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団  
 草原孝典 2015『種多庵寺』  
 26 草原孝典 2004『ハガ道路』  
 27 a 岡山県教育委員会 1981『百間川長谷道路 当麻道路1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46  
 b 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻道路2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52  
 c 岡山県古代古備文化財センター 1989『百間川禾田道路3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74  
 28 石井庵寺がその可能性を残す。  
 29 前掲註6文献  
 30 草原孝典 2002『新道道路』  
 31 前掲註9文献  
 32 岡山市教育委員会 2006『大供本町道路発掘調査現地説明会資料』  
 33 出宮徳尚 1985『岡山県二日市道路』『日本考古学年報』35  
 34 a 亀山行雄他 2007『鹿田道路』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告207  
 b 河合 忠他 2007『鹿田道路』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210  
 35 山本悦世他 2011『鹿田道路第20次発掘調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009  
 36 前掲註9文献  
 37 前掲註9文献  
 38 氏平昭則編 2012『南方道路』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告234  
 39 光本 順 2013『第18次調査B・C地点』『鹿田道路7』岡山大学構内道路調査報告 第28冊  
 40 光本 順 2004『日本源地系から世界源地系への移行に伴う構内座標の変更について』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』  
 41 古代古備文化財センター2003『改定 岡山県道路地図(第6分冊 岡山地区)』  
 42 前掲註9文献  
 43 神谷正義 2007『鹿田道路—ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査—』  
 44 前掲註6文献  
 45 前掲註6文献  
 46 松本武彦・山本悦世 1993『鹿田道路3』岡山大学構内道路発掘調査報告 第6冊  
 47 山本悦世他 2008『鹿田道路第18次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007



- 58 岩崎志保 2012「鹿田道跡第22次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- 59 山本悦貴 2007「鹿田道跡5」岡山大学構内道跡発掘報告 第23冊
- 60 光本順 2008「鹿田道跡第17次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2006』
- 61 光本順 2010「鹿田道跡6」岡山大学構内道跡発掘報告 第26冊
- 62 a 岩崎志保 2015「鹿田道跡第25次調査1.工区」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2013』  
 b 岩崎志保 2016「鹿田道跡第25次調査（2.工区）」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2014』
- 63 前掲注38文献
- 64 岩崎志保 2014「鹿田道跡8」岡山大学構内道跡発掘調査報告 第29冊
- 65 山口雄治 2016「鹿田道跡第26次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2014』
- 66 前掲注60文献
- 67 a 前掲注6文献  
 b 野崎貴博 2010「鹿田道跡第19次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2008』
- 68 南健太郎 2016「鹿田道跡9」岡山大学構内道跡発掘報告 第31冊
- 69 「鹿田」の初出は1817（弘仁4）年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」であてたとする記事、「鹿田庄」の初出は1900（昌泰3）年、鹿田庄の地子を興福寺長講会料にあてたとする記事にみられるもので、いずれも「興福寺縁起」による。  
 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道道跡』
- 70 前掲注6文献
- 71 前掲注6文献
- 72 前掲注67b文献
- 73 光本順 2012「鹿田道跡第21次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 74 山本悦貴 1990「鹿田道跡Ⅱ」岡山大学構内道跡発掘報告 第4冊
- 75 河合 忍 2007「総括」『鹿田道跡』岡山大学理蔵文化財調査報告210
- 76 山本悦貴 1997「鹿田道跡4」岡山大学構内道跡発掘報告 第11冊
- 77 前掲注38文献
- 78 前掲注38文献
- 79 前掲注84文献
- 80 a 前掲注89文献  
 b 岩崎志保 2012「鹿田道跡第20次調査C・D地点」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 81 前掲注38文献
- 82 岩崎志保 2013「鹿田道跡7」岡山大学構内道跡発掘報告 第28冊
- 83 荒野庄絵図 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道道跡』
- 84 前掲注85・87文献
- 85 前掲注85・80文献

## 第4章 自然科学的分析

### 第1節 鹿田遺跡第24次調査出土木製品類の樹種

能城 修一 (明治大学黒曜石研究センター)

#### 1. はじめに

岡山大学構内 (鹿田地区) 24次調査で出土した8世紀から鎌倉時代前半の木製品類120点の樹種を報告する。内訳は8世紀後半の井戸枠や齋串などが18点、平安時代末～鎌倉時代前半の井戸材や下駄が101点、近世の角材が1点である。

#### 2. 方法

樹種同定用のプレバート標本は、木製品類から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラール (抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物) で封入して作製した。プレバートには、OKUF-1593～1713の番号をふして標本番号とした。プレバート標本は森林総合研究所に保管されている。

#### 3. 結果

資料121点中には針葉樹5分類群と広葉樹4分類群が認められた (表4・5)。以下には木材解剖学的な記載を記し、顕微鏡写真を提示して、同定の根拠を示す。

##### 1. モミ属 *Abies* マツ科 (図78: 1a-1c (枝・幹材, OKUF-1599))

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞のみからなり、単壁孔が著しく、分野壁孔はやや小型のトウヒ型～スギ型で1分野に普通2個。

##### 2. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 (図78: 2c (枝・幹材, OKUF-1607))

垂直・水平樹脂道をともに持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個、放射仮道管の水平壁は著しい鋸歯状。

##### 3. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科

(図78: 3a-3c (枝・幹材, OKUF-1611))

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量はやや多い。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は水平に近く開く窓状で1分野に普通1個。

##### 4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科

(図78: 4a-4c (枝・幹材, OKUF-1606))

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は少ない。早材の後半から晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に普通2個。

##### 5. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don ヒノキ科 (図78: 5a-5c (枝・幹材, OKUF-1643))

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。早材の後半から晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は大型のスギ型で1分野に普通2個。

6. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 (図78: 6 a - 6 c (枝・幹材, OKUF-1708))

大型で丸い孤立道管が年輪の始めに数列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。

7. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 (図79: 7 a - 7 c (枝・幹材, OKUF-1609))

大型で丸い孤立道管が年輪の始めに2列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、小型の単列のものと同大型の複合状のものとなる。

8. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

(図79: 8 a - 8 c (枝・幹材, OKUF-1603))

やや小型で丸い孤立道管が放射方向の帯をなして配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で、小型の単列のものと同大型の複合状のものとなる。

9. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ科 (図79: 9 a - 9 c (枝・幹材, OKUF-1713))

小型でやや角張った孤立道管が均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30段ほどの階段状。放射組織は単列異性。

## 4. 考察

井戸の樹種は時代によって異なっていた(表3)。8世紀後半では、井戸枠にモミ属が、齋串と絵馬にはヒノキが使われていた。それに対し、平安時代末～鎌倉時代前半になると、井戸の構築材は部位によってこととなり、土居桁にはアカマツとコナラ属コナラ節、井戸枠側板にはスギ、井戸枠横棧にはモミ属とコウヤマキ、スギが、井戸枠隅柱にはモミ属が使われていた。

これまで近畿地方～中国地方で平安時代～鎌倉時代に井戸の主に井戸枠側板に使用された樹種をみると、ヒノキとスギ、モミ属が75%を占めており、それについてコウヤマキとツガ属、マツ属複雑管束亜属が利用されている(伊東・山田, 2012)。今回、岡山大学構内(鹿田地区)24次調査の井戸の樹種もこの傾向と同一であり、この地域における典型的な樹種選択が行われていたと考えられる。

## 引用文献

伊東隆夫・山田昌久編. 2012. 木の考古学: 出土木製品用材データベース. 449pp. 海書社. 大津.

表3 鹿田遺跡第24次調査出土木製品類の樹種

樹種名	8世紀後半										平安時代～鎌倉時代前半								近世	総計
	井戸枠	齋串	板	板材	棒状	絵馬	自然木	下駄	曲物 成板	曲物?	井戸				板材	板材	内材	内材		
											土居桁	枠側板	枠横棧	枠隅柱						
モミ属	6		1	3																19
アカマツ												2								2
コウヤマキ													1							1
ヒノキ		3				2		1	1						1		1			9
スギ							1		1			71	4			4	2	1		84
タリ																			1	1
コナラ属コナラ節											1									1
コナラ属アカガシ亜属				1			1													2
サカキ							1													1
総計	6	3	1	3	1	2	2	2	1	1	3	71	7	4	3	5	2	2	1	120

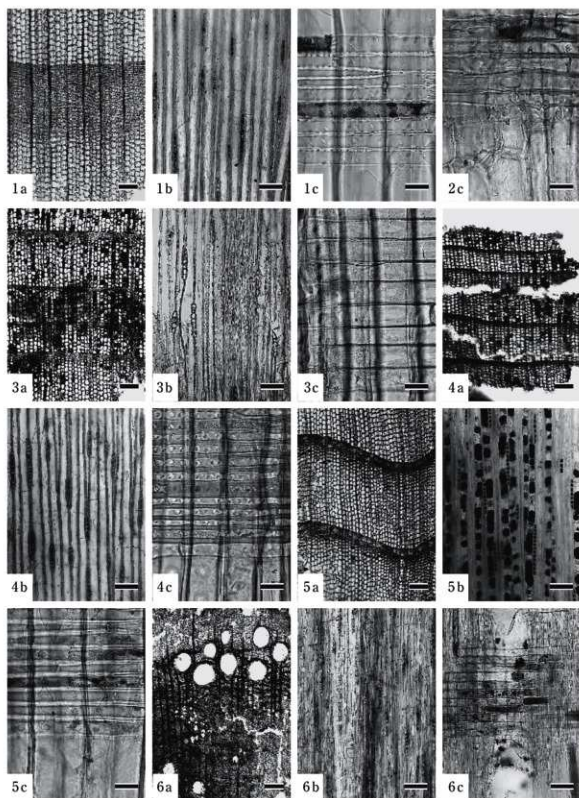


図78 鹿田遺跡第24次調査出土木製品類の顕微鏡写真①

1a-1c: モミ属 (枝・幹材, OKUF-1599), 2c: アカマフ (枝・幹材, OKUF-1607), 3a-3c: コウヤマキ (枝・幹材, OKUF-1611),  
 4a-4c: ヒノキ (枝・幹材, OKUF-1606), 5a-5c: スギ (枝・幹材, OKUF-1643), 6a-6c: クリ (枝・幹材, OKUF-1708).  
 a: 横断面 (スケール=200 $\mu$ m), b: 接線断面 (スケール=100 $\mu$ m), c: 放射断面 (スケール=25, 50 (6c)  $\mu$ m).

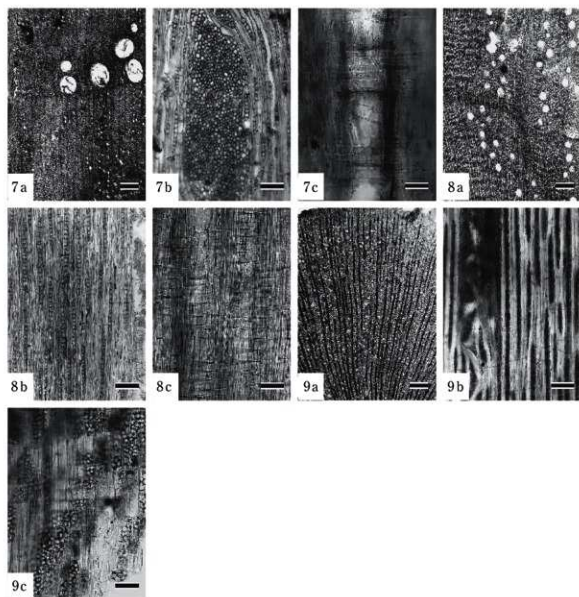


図79 鹿田遺跡第24次調査出土木製品類の顕微鏡写真②

7a-7c：コナラ属コナラ節（枝・幹材，OKUF-1609），8a-8c：コナラ属アカガシ亜属（枝・幹材，OKUF-1603），  
 9a-9c：サカキ（枝・幹材，OKUF-1713）。

a：横断面（スケール=200 $\mu$ m），b：接線断面（スケール=100 $\mu$ m），c：放射断面（スケール=50 $\mu$ m）。

表4 樹種一覧①

標本	No	樹種名	SR	製品名	本取り	遺精	本文中掲載番号	時代	
OKUF-	1503	モミ属	S	井戸枠(桐り貫き)	板目		図28-W7-1	8c 後半	
OKUF-	1504	モミ属	S	井戸枠(桐り貫き)	板目		図28-W6-1		
OKUF-	1505	モミ属	S	井戸枠(桐り貫き)	板目		図28-W6-2		
OKUF-	1506	モミ属	S	井戸枠(桐り貫き)	板目		図28-W6-3		
OKUF-	1507	モミ属	S	井戸枠(桐り貫き)	板目		図28-W7-2		
OKUF-	1508	モミ属	S	井戸枠(桐り貫き)	板目		図28-W7-3		
OKUF-	1509	モミ属	S	板材	板目	井戸1	-		
OKUF-	1600	モミ属	S	板材	板目		図28-W8		
OKUF-	1601	モミ属	S	枕	板目材を分類して成形		図28-W9		
OKUF-	1602	モミ属	S	板材	板目		-		
OKUF-	1603	コナラ属アカガシ亜属	S	棒状(加工わず少)	丸木		-		
OKUF-	1604	ヒノキ	S	総馬	板目		図25-W1		
OKUF-	1605	ヒノキ	S	総馬	板目		図26-W2		
OKUF-	1606	ヒノキ	S	曲物成板(3片接合)	板目	井戸6	図16-W27		13c 後半-末
OKUF-	1607	アカマツ	S	井戸上居桁	丸木		図35-W11		
OKUF-	1608	アカマツ	S	井戸上居桁	丸木	井戸2	図33-W10	11c 初期	
OKUF-	1609	コナラ属コナラ属	S	井戸上居桁	丸木		-		
OKUF-	1610	ヒノキ	S	角材	板目	井戸4	-	13c 後半	
OKUF-	1611	コウヤマキ	S	井戸枠横棧	板目		図40-W18	12c 末-13c 初期	
OKUF-	1612	スギ	S	井戸枠横棧	板目		図40-W19		
OKUF-	1613	スギ	S	井戸枠横棧	板目		図40-W20		
OKUF-	1614	スギ	S	井戸枠横棧	板目		図40-W21		
OKUF-	1615	スギ	S	井戸枠横棧	板目		図40-W22		
OKUF-	1616	モミ属	S	井戸枠横棧	丸木		図40-W23		
OKUF-	1617	モミ属	S	井戸枠横棧	丸木		図40-W24		
OKUF-	1618	モミ属	S	井戸枠横柱	丸木		図39-W15		
OKUF-	1619	モミ属	S	井戸枠横柱先端部?	丸木		図39-W15		
OKUF-	1620	モミ属	S	井戸枠横柱	丸木		図39-W16		
OKUF-	1621	モミ属	S	井戸枠横柱	丸木		図39-W17		
OKUF-	1622	モミ属	S	井戸枠横柱	丸木		図39-W14		
OKUF-	1623	モミ属	S	井戸枠横柱先端部?	丸木		図39-W16		
OKUF-	1624	モミ属	S	井戸枠横柱先端部?	丸木		-		
OKUF-	1625	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1626	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1627	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1628	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1629	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1630	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1631	スギ	S	井戸枠横板	板目	井戸3	-		
OKUF-	1632	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1633	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1634	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1635	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1636	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1637	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1638	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1639	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1640	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1641	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1642	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1643	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1644	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1645	スギ	S	井戸枠横板	板目		図版06の板2		
OKUF-	1646	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1647	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1648	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1649	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1650	スギ	S	井戸枠横板	板目		図36の板1		
OKUF-	1651	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		
OKUF-	1652	スギ	S	井戸枠横板	板目		-		

表5 樹種一覧②

標本	No	樹種名	SR	製品名	本取り	遺構	本文中掲載番号	時代
OKUF-	1653	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1654	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1655	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1656	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1657	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1658	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1659	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1660	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1661	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1662	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1663	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1664	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1665	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1666	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1667	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1668	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1669	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1670	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1671	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1672	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1673	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1674	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1675	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1676	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1677	スギ	S	井戸枠側板	板目	井戸3	--	12c 末~13c 初葉
OKUF-	1678	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1679	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1680	スギ	S	曲物片?	板目		--	
OKUF-	1681	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1682	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1683	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1684	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1685	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1686	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1687	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1688	スギ	S		板目		--	
OKUF-	1689	スギ	S		板目		--	
OKUF-	1690	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1691	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1692	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1693	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1694	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1695	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1696	スギ	S	井戸枠側板	板目		--	
OKUF-	1697	スギ	S	板材	板目		--	
OKUF-	1698	スギ	S	角材	測材		--	
OKUF-	1699	スギ	S	板材	板目		--	
OKUF-	1700			樹皮 杖			--	
OKUF-	1701	スギ	S	板材 (元は同一の可能性もあり)	板目		--	
OKUF-	1702	スギ	S	板材 (元は同一の可能性もあり)	板目		--	
OKUF-	1703	スギ	S	板材	板目		--	
OKUF-	1704	スギ	S	板材	板目	井戸5	--	12c 中葉
OKUF-	1705	ヒノキ	S	板材	板目		--	
OKUF-	1706	スギ	S	下駄	板目		図14-W25	
OKUF-	1707	ヒノキ	S	下駄	板目		図14-W26	
OKUF-	1708	タリ	S	角材	板目	土境4	--	近世
OKUF-	1709	ヒノキ	S	傘帯	板目	井戸1	図27-W5	8c 後半
OKUF-	1710	ヒノキ	S	傘帯	板目		図27-W4	
OKUF-	1711	ヒノキ	S	傘帯	板目		図27-W3	

## 第2節 鹿田遺跡第24次調査出土動物遺存体

江川 達也 (岡山理科大学)

本調査では、古代～近代以降に属する哺乳綱が出土した(表6～10)。以下に動物分類に従って出土資料の説明を行う。

### 1 ウマ目

ウマ *Equus caballus*

中世、近世以降の層からウマは41点出土した(No.18～20, 36～42, 47～49, 56, 57, 59, 65～67, 73, 76, 80～87, 90～100, 106, 107, 図80)。鹿田24次調査から出土した動物遺存体として残されている資料では最も数が多い種である。鹿田遺跡第9・11次調査においては中世前半・中世後半～近世初期の層より出土し(江川2017)、第14次調査においても近世の層より出土している(立石他2014)。

おそらく第2前臼歯～第4前臼歯が植立していると思われる下顎骨と第1後臼歯～第3後臼歯が植立した下顎骨が出土している。遊離歯では、上顎歯は、第1切歯2点、第3前臼歯2点(左側が2点出土し、ダブリがみられる)、第4前臼歯2点、第2後臼歯1点、第3後臼歯3点(左側が2点出土し、ダブリがみられる)、臼歯7点(左側が2点出土し、ダブリがみられる)、第2前臼歯1点、第4前臼歯もしくは第1後臼歯1点、第2後臼歯3点(左側が2点出土し、ダブリがみられる)、第3後臼歯1点)が出土している。歯種は特定できたものの上顎不明の遊離歯は、切歯2点、臼歯11点であった。上顎第3前臼歯2点、上顎第3後臼歯2点、下顎第2後臼歯2点にダブリがみられたため、最小個体数は2である。

### 2 ウシ目

ウシ *Bos taurus*

中世、近世以降の層からウシは11点出土した(No.1, 13, 21, 54, 70～72, 77, 78, 81, 89, 図82)。鹿田遺跡9・11次調査においては中世前半・中世後半～近世初期の層より出土し(江川2017)、第14次調査においても鎌倉時代、室町時代、近代の層より出土している(立石他2014)。

上顎骨1点、上顎臼歯1点、下顎骨1点、下顎第3前臼歯1点、下顎第1後臼歯3点(左側が2点出土し、ダブリがみられる)、下顎第3後臼歯1点、下顎臼歯1点、臼歯1点上腕骨1点)が出土している。ダブリがみられた下顎第1後臼歯より最少個体数は2である。

### 3 ウサギ目

ウサギ属 *Lepus* sp. indet.

東2区からウサギ属は11点出土した(No.23～31, 33, 34)。

尾椎1点、肋骨1点、寛骨2点、大腿骨3点(3点とも左側でダブリがみられる)、脛骨4点(左右の脛骨が2点ずつ出土し、ダブリがみられる)が出土している。ダブリがみられた大腿骨より最少個体数は3である。

### 4 その他

歯冠の形質から、ウシもしくはウマと推定される臼歯が3点出土した。

古代～近世以降の層から骨質から哺乳綱であることは推定したが、目の同定が困難である遺存体は40点出土し



た。そのうち、小型クラスと推定されたのは尾椎1点、椎体1点、大腿骨1点であった。中～大型クラスには36点推定され、部位同定ができた遺存体は、臼歯4点、歯2点、四肢骨2点、四肢骨の可能性ある骨5点、肋骨4点、上腕骨1点である。部分同定ができた遺存体は、骨幹部23点である。

## 謝辞

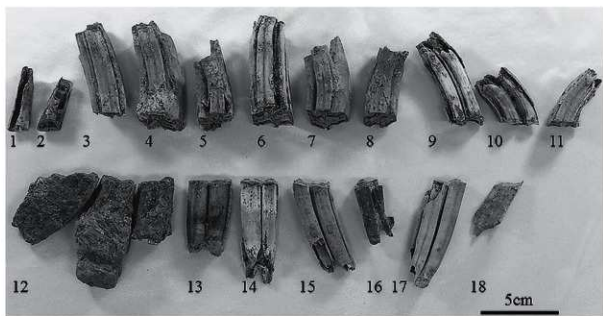
岡山理科大学生物地球学部富岡直人教授には、比較標本の提供と同定・御教示・御指導を頂いた。また、岡山理科大学生物地球学部院生の足立望さん、学部生の川田俊也君、塚本真行君、西内崇人君には同定作業を手伝って頂いた。記して感謝いたします。

## 引用文献

- 江川道也2017「9. 鹿田遺跡第9・11次調査出土動物遺存体」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第32冊 鹿田遺跡10」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp.213-216  
立石和也・富岡直人2014「3. 鹿田遺跡第14次調査出土動物遺存体」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第29冊 鹿田遺跡8」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：p.74

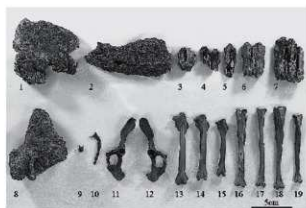
表6 鹿田遺跡第24次調査出土動物依存体種名表

大分類		小分類				分類名
門	上綱・綱	亜綱・亜区・目	科	亜科・属	種・亜種	
脊索動物門 CHORDATA	哺乳綱	目科属種不明				Mammalia order indet.
		ウマ目	ウマ科	ウマ属	ウマ	<i>Equus caballus</i>
		ウシ目	ウシ科	ウシ属	ウシ	<i>Bos taurus</i>
		ウサギ目	ウサギ科	ウサギ属		<i>Lepus sp. indet.</i>



1～11上顎骨（1第1切歯L、2第1切歯R、3・4第3前臼歯、5第4前臼歯L、6第4前臼歯R、7第1後臼歯L、8第2後臼歯R、9・10第3後臼歯L、11第3後臼歯R）、12～18下顎骨（12下顎骨R（第1～3後臼歯）、13第2前臼歯L、14第4前臼歯もしくは第1後臼歯R、15・16第2後臼歯L、17第2後臼歯R、18第3後臼歯L）

図80 動物依存体①（ウマ）

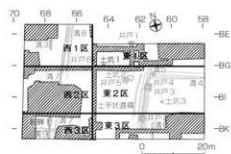


1～8ウシ（1上顎骨L、2下顎骨L、3下顎第3前臼歯R、4・5下顎第1後臼歯L、6下顎第2後臼歯L、7下顎第3後臼歯L、8上腕骨R）、9～19ウサギ属（9尾椎、10第5肋骨L、11寛骨L、12寛骨R、13～15大腿骨L、16・17脛骨L、18・19脛骨R）

図B1 動物依存体②（ウシ・ウサギ属）



図B2 ウマ（下顎骨R）



図B3 調査区の区割り（縮尺1/1200）

表7 動物依存体属性表①

No.	遺構	層位	時期	大分類	小分類	部位	L R	部分	成長度	歯根	風化	色調	計測値 (mm)	国 番号	備考	出土 地点
1	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	ウシ	F顎骨	L	下顎体、臼歯部破片	不明	不明	Viv	ブラウン	-	81-2		西1区
2	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	不明	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
3	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨?	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西2区
4	溝4	5・4層	14c期	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨?	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
5	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	不明	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
6	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
7	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨?	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
8	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
9	包含層	6層	古代	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
10	包含層	5層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨?	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
11	包含層	5層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
12	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
13	溝7	-	13c前半	哺乳綱	ウシ	上顎骨	L	M3 (M17)、臼歯部	全面磨	不明	Viv	ブラウン	MEL: (29.28)、 M30: 20.30	81-1		西2区
14	包含層	-	不明	哺乳綱	ウシ?	上腕骨	R	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
15	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	管幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区

表8 動物依存体属性表②

No.	遺構	層位	時期	大分類	小分類	部位	LR M	部分	成長度	破損	風化	色調	計測値 (mm)	図 番号	備考	出土 地点
16	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
17	包含層	5層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
18	包含層	-	不明	哺乳綱	ウマ	下顎骨	R	M1, M2, M3, 臼歯部	小窩独立～小 窩連結	不明	Viv	ブラウン	MIL: 2405, MIB: 1370 MEL: 2424, M2B: (1256) MIL: 2188, M2B: 1205	80-12		西1区
19	包含層	5 c層	中世	哺乳綱	ウマ	上顎第2 後臼歯	L	歯冠部	全面磨	なし	Viv	ブラウン	-	80-13		東2区
20	包含層	-	不明	哺乳綱	ウマ	上顎第1 切歯	R	定形	小窩連結	なし	Viv	ブラウン	-	80-2	中心のエ ナメル質 が円錐状 におよぶか に残る	西1区
21	包含層	カタラン崩 層上	近代以降	哺乳綱	ウシ	上顎骨	R	海狗歯, 骨 幹部	d: f	なし	Viv	ブラウン	-	81-8		西1区
22	包含層	カタラン崩 層上	近代以降	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
23	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	脛骨	R	骨幹部	d, p: uf	なし	軽微	ブラウン	残存全長: 100.29	81-19	膝骨なし	東2区
24	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	脛骨	L	骨幹部	d: L, p: uf	なし	軽微	ブラウン	残存全長: 85.74	81-17	膝骨なし	東2区
25	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	脛骨	L	骨幹部	d: L, p: uf	なし	軽微	ブラウン	残存全長: 98.96	81-16	膝骨有し	東2区
26	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	脛骨	R	定形	d, p: f	なし	軽微	ブラウン	GL: 105.00	81-18		東2区
27	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	大腸骨	L	骨幹部	d, p: uf	なし	軽微	ブラウン	残存全長: 83.33	81-14		東2区
28	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	大腸骨	L	骨幹部	d, p: uf	なし	軽微	ブラウン	残存全長: 73.43	81-15		東2区
29	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	大腸骨	L	定形	d, p: f	dlaク イブ骨 幹部後 位	軽微	ブラウン	GL: 91.52, GLc: 86.86	81-13		東2区
30	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	歯骨	R	定形	f	なし	軽微	ブラウン	GL: (80.70)	81-12		東2区
31	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	歯骨	L	定形	f	dlaク イブ骨 幹部	軽微	ブラウン	GL: 80.69	81-11		東2区
32	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	目不明 (小型)	尾椎	M	椎体	uf	なし	軽微	ブラウン	-			東2区
33	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	第3肋骨	L	定形	f	なし	軽微	ブラウン	-	81-10		東2区
34	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	ウサギ属	尾椎	M	定形	a, p: f	なし	軽微	ブラウン	-	81-9		東2区
35	包含層	カタラン崩 層中	近代以降	哺乳綱	目不明 (小型)	椎骨	M	椎體	a or p: uf	なし	軽微	ブラウン	-			東2区
36	包含層	-	不明	哺乳綱	ウマ	上顎第3 後臼歯	R	歯冠部, 歯 根部	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	80-11		西1区
37	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウマ	上顎第2 後臼歯	R	歯冠部, 歯 根部	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	M2L: 2204, M2B: 2253	80-8		西1区
38	溝7	-	13 c 前手	哺乳綱	ウマ	上顎第4 前臼歯	R	歯冠部, 歯 根部	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	80-6		西1区
39	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウマ	上顎第1 後臼歯?	L	歯冠部, 歯 根部	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	80-7		西1区
40	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウマ	上顎第3 前臼歯	L	歯冠部, 歯 根部	小窩独立以上	不明	Viv	ブラウン	-	80-3		西1区
41	溝7	-	13 c 前手	哺乳綱	ウマ	上顎第3 前臼歯	L	歯冠部, 歯 根部	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	80-4		西1区
42	溝7・8	-	13 c 前手	哺乳綱	ウマ	上顎第4 前臼歯	L	歯冠部, 歯 根部	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	80-5		西1区
43	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
44	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区

表9 動物依存体属性表③

No.	産地	層位	時期	大分類	小分類	部位	LR M	部分	成長度	破損	風化	色調	計測値 (mm)	国 番号	備考	出土 地点
45	溝4	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
46	溝7	-	Ⅲc 前手	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
47	包含層	-	不明	哺乳綱	ウマ	下顎第2 後臼歯	L	歯冠部、歯 根部分	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-	80-16		東2区
48	溝7	-	中世	哺乳綱	ウマ	切歯上下 顎不明	?	歯冠部破片	エナメル質咬 耗開始以上	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区
49	溝7・8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 顎不明	?	歯冠部破片	歯根部分形成	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
50	溝7	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
51	溝4	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
52	溝7	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
53	溝7	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
54	溝9	-	近世	哺乳綱	ウシ	上顎臼歯	R	歯冠部破片	小窩独立～小 窩連結	不明	Viv	ブラウン	-			西2区
55	溝8	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西2区
56	溝7	-	中世	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	R	歯冠部破片	エナメル質咬 耗開始～小窩 独立	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
57	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウマ	上顎第3 後臼歯	L	歯冠部、歯 根部分	小窩独立～小 窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	80-10		西1区
58	包含層	カタラン磯 面遺跡中	近代以降	哺乳綱	ウシorウマ	臼歯上下 顎不明	?	歯冠部破片	小窩独立以上	不明	Viv	ブラウン	-			西2区
59	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	上顎第3 後臼歯	L	歯冠部一部 欠損	小窩独立	不明	Viv	ブラウン	-	80-9		西1区
60	溝8	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
61	溝9	-	近世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西2区
62	溝8	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
63	溝4	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
64	溝4	-	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
65	包含層	カタラン磯 面上	近代以降	哺乳綱	ウマ	切歯上下 顎不明	?	歯冠部破片	小窩独立以上	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
66	包含層	カタラン磯 面上	近代以降	哺乳綱	ウマ	上顎第1 切歯	L	歯冠部前位	エナメル質咬 耗開始以上	不明	Viv	ブラウン	-	80-1	咬耗の角 度から同 定	西1区
67	包含層	カタラン磯 面上	近代以降	哺乳綱	ウマ	下顎第2 前臼歯	L	歯冠部、歯 根部分	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-	80-13		西1区
68	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明	不明	?	不明	不明	不明	Viv	ブラウン	-			東2区
69	包含層	5層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	歯	?	歯冠部破片	小窩独立以上	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
70	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	ウシ	下顎第3 前臼歯	L	歯冠部	小窩独立	不明	Viv	ブラウン	-	81-3		西1区
71	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	ウシ	臼歯上下 顎不明	?	歯冠部破片	歯冠部破片 歯冠部破片 歯冠部破片	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
72	包含層	5・4層	中世	哺乳綱	ウシ	下顎第1 後臼歯	R	歯冠部、歯 根部分	小窩連結	不明	Viv	ブラウン	-	81-6		西1区
73	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 顎不明	?	歯冠部、歯 根部分	歯冠部、歯 根部分	なし	Viv	ブラウン	-			西1区
74	包含層	5層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨?	?	骨幹部	不明	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
75	包含層	南辺	不明	哺乳綱	目不明 (中～大型)	歯	?	歯冠部破片	歯冠部以上	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
76	包含層	南辺	不明	哺乳綱	ウマ	下顎第4 前臼歯or 第1後臼 歯	?	歯冠部、歯 根部分	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-	80-14		西1区

表10 動物依存体属性表④

No.	遺構	層位	時期	大分類	小分類	部位	L R	M	部分	成長度	破損	風化	色調	計測値 (mm)	図 番号	備考	出土 地点
77	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウシ	下顎第1 後臼歯	L		歯冠部	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-	81-5	A.No. 78, 81と同一 個体の可 能性有	西1区
78	包含層	5層	中世	哺乳綱	ウシ	下顎第3 後臼歯	L		歯冠部	小窩独立	なし?	Viv	ブラウン	-	81-7	A.No. 77, 81と同一 個体の可 能性有	西1区
79	包含層	5層	中世	哺乳綱	目不明(中 ~大型)	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	歯出した以上	不明	Viv	ブラウン	-			西1区
80	溝9	-	近世	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	R		歯冠部舌側	小窩独立以上	なし?	Viv	ブラウン	-			西2区
81	包含層	上面清掃中	不明	哺乳綱	ウシ	下顎第1 後臼歯	L		歯冠部	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-	81-4	A.No. 77, 78と同一 個体の可 能性有	西1区
82	溝7	-	中世	哺乳綱	ウマ	下顎第2 後臼歯	R		歯冠部、歯 齧部	小窩連結	なし	Viv	ブラウン	-	80-17		西1区 歯齧
83	溝7・8	-	中世	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	?		歯冠部	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
84	溝7・8	-	中世	哺乳綱	ウマ	下顎第3 後臼歯	L		歯冠部	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-	80-18		西1区 歯齧
85	溝7・8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部	歯出した以上	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
86	溝7・8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
87	溝7・8	-	中世	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	?		歯冠部	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
88	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中~大型)	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	歯出途次	なし	Viv	ブラウン	-			西1区
89	溝9	-	近世	哺乳綱	ウシ	下顎臼歯	?		歯冠部破片	小窩独立	なし?	Viv	ブラウン	-			西2区
90	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
91	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
92	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
93	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
94	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
95	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
96	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
97	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
98	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
99	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
100	溝8	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
101	包含層	3層除去後 清掃中	不明	哺乳綱	目不明 (小型)	大臼歯	?		骨幹部	d.P?	なし?	Viv	ブラウン	-			西2区
102	溝7	-	中世	哺乳綱	ウシ (中~大型)	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	歯出途次	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
103	包含層	5d層	中世	哺乳綱	ウシorウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	歯出した以上	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
104	包含層	5d層	中世	哺乳綱	ウシorウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	歯出した以上	なし?	Viv	ブラウン	-			西1区 歯齧
105	包含層	-	不明	哺乳綱	目不明 (中~大型)	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	歯出途次	なし	Viv	ブラウン	-			西1区
106	溝7	-	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯上下 部不明	?		歯冠部破片	小窩連結	なし	Viv	ブラウン	-			西2区
107	包含層	5d層	中世	哺乳綱	ウマ	下顎骨	R		P2?, P3?, P4?, 臼歯 部	小窩連結	なし	Viv	ブラウン	-	3		西1区

### 第3節 鹿田遺跡第24次調査出土土器の胎土分析

白石 純 (岡山理科大学)

南 健太郎 (岡山大学)

#### 1. 分析目的

この胎土分析では、鹿田遺跡24次調査の井戸2で出土した須恵器の鉢の産地推定を行った。比較した生産地は、備前、相生、東播系の中世窯跡資料である。

#### 2. 分析方法

胎土分析法には、蛍光X線分析法を用いた。

蛍光X線分析法は、胎土の成分(元素)量を測定し、その成分量から胎土の違いについて検討した。測定した成分(元素)は、 $\text{SiO}_2$ 、 $\text{TiO}_2$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、 $\text{MnO}$ 、 $\text{MgO}$ 、 $\text{CaO}$ 、 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{P}_2\text{O}_5$ の10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計(日立ハイテクサイエンス社製SEA5120A)を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約 $10^3$ の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

測定条件は、管球ターゲットRh、励起電圧は $50\text{kV} \cdot 15\text{kV} \cdot 7\text{kV}$ 、管電流は $4\mu\text{A} \sim 1000\mu\text{A}$ 、測定時間は300秒、雰囲気は真空中で測定した。

分析結果は、有意な差がみられる成分をとり、散布図を作成して比較した。

分析試料は、表11に示した井戸2出土の鉢1点である。

#### 3. 分析結果

##### 蛍光X線分析

図83の散布図( $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}-\text{K}_2\text{O}-\text{TiO}_2$ )は、鹿田遺跡24次調査で出土した鉢の産地推定をおこなった散布図である。この散布図より、鉢は中世須恵器の生産地である神出窯跡群(東播系)、相生窯跡群、備前窯跡群のどの産地にも入らなかった。したがって、今回比較した生産地からは供給されていないと推定される。

表11 鹿田遺跡第24次調査出土土器の胎土分析試料一覧表(%)

図No	出土遺構	器種	状態	$\text{SiO}_2$	$\text{TiO}_2$	$\text{Al}_2\text{O}_3$	$\text{Fe}_2\text{O}_3$	$\text{MnO}$	$\text{MgO}$	$\text{CaO}$	$\text{Na}_2\text{O}$	$\text{K}_2\text{O}$	$\text{P}_2\text{O}_5$
図34-54	井戸2	器鉢	口縁部~底部片	70.06	1.16	16.69	5.26	0.03	2.33	0.27	0.52	3.54	0.05

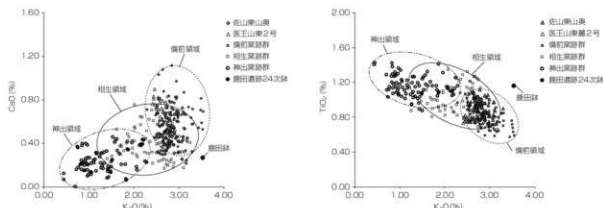


図84 鹿田遺跡出土鉢の産地推定

## 第4節 鹿田遺跡第24次調査出土種子

南 健太郎 (岡山大学)

沖 陽子 (岡山大学)

## 1. 分析資料と方法

古墳時代初頭の土器棺4内の堆積土、奈良時代後半・平安時代末の井戸の埋土(井戸1、3、5、6)を持ち帰り、フローテーション法(0.5mmメッシュ)により種子の抽出をおこなった。その後、選別をおこない、写真撮影と同定作業をおこなった。

なお各遺構の時期は、土器棺4が古墳時代初頭、井戸1が8世紀後半、井戸3が12世紀末～13世紀初頭、井戸5が12世紀中葉、井戸6が13世紀後半～末である。

## 2. 結果

各遺構からは様々な種類の種子が得られた(表12・13)。井戸についてみると、時期的な特徴をつかむことができる。アカネ科、イネ科、カタバミ科、カヤツリグサ科、キク科、ナス科、ナデシコ科、バラ科はすべての井戸で出土しており、集落周辺に継続してみられた植物群であることが想定される。アカネ科のヘクソカズラやヤエムグラは現存する一般的な雑草であり、井戸1の8世紀後半以前からも良く出土している。イネ科は現在も雑草として存在する種が同定されたが、井戸6で作物的な種が出土した。また、ナデシコ科もミドリハコベやノミノフスマは現存する雑草であるが、最も多くの種類が井戸5から出土した。また、ナス科はイヌホウズキがすべての井戸で認められているが、現在、外来種が多いホウズキ類の中で在来種として8世紀から存続していることが確認された。さらにバラ科のモモは12世紀中葉以降から出土している。

一方、ブナ科(コナラ)・ヤマゴボウ科(マルミノヤマゴボウ)は井戸1、ウリ科(スズメウリ・雑草メロン)・キンボウゲ科(ウマノアシガタ・キンボウゲ属)・マメ科(ハウチワマメ)・ミカン科(イヌザンショウ・キハダ)は井戸6でしか出土していない。ウリ科は井戸の埋め戻しの際の儀礼的行為で頻繁に用いられる植物であり、井戸6での足を一本欠いた三足鍋の廃棄とあわせて評価することができるかもしれない。また種子の構成差は各時期の集落景観の違いを反映している可能性がある。今後は花粉分析や樹種同定などの成果とともに、多角的な分析から集落像を明らかにしていきたい。

本分析における種子の同定は沖がおこない、それを基に南が資料をまとめた。文章は両者が協議し、南が執筆した。

表12 検出種子一覧①

科	種	土器棺4 棺内堆積土	井戸1 底面	井戸3		井戸5 土器(63)内	井戸6		写真 番号
				動物内蔵 (W12)	14層		3層 (溝東側)	3層	
アカネ科	アカサ				●		●	●	1
	アリネソウ					●		●	2
	カワアカサ	●	●				●	●	3
アカネ科	ヘクソカズラ		●	●		●		●	4
	ヤエムグラ		●	●		●		●	5
アカバナ科	ヒメアキバナ						●		6
	ミズキンバイ		●						7
アケビ科	アケビ					●			8
アサ科	カナムグラ							●	9

表13 検出種子一覧②

科	種	土層格4 植内堆積土	井戸1 底面	井戸3		井戸5 土層(63)内	井戸6		写真 番号	
				曲物内部 (W12)	14層		3層 (調査層)	3層		
イネ科	アキノエノコロガサ		●						10	
	アキメシシバ					●			11	
	アワ						●		12	
	キンエノコロ						●	●	13	
	コアブキンエノコロ						●		14	
	ライムギト						●	15		
ウコギ科	カタレミノ		●						16	
	タラノキ		●						17	
ウリ科	スズメウリ							●	18	
	蓬草メロン							●	19	
ウルシ科	ヤマウルシ			●					20	
エゴノキ科	エゴノキ							●	21	
オオハコ科	オオハコ						●		22	
カタバミ科	カタバミ			●				●	23	
	アゼチルコスギ				●				24	
キヤツリグサ科	イヌホタルイ							●	25	
	オニユギ					●			26	
	ゴウソ		●		●			●	27	
	サンカクイ		●			●		●	28	
	ホタルイ					●			29	
		イワニギナ(ジシバリ)					●	●		30
キタ科	タカサブロウ					●		●	31	
	ヒレアザミ		●	●					32	
	ヤブタバコ						●		33	
キンボウゲ科	ウマノアシガタ							●	34	
	キンボウゲ属							●	35	
カヌメ科	ヤブニッケイ							●	36	
クワ科	ホジノキ		●	●				●	37	
	ヤマダブ					●			38	
ケシ科	ケシ							●	39	
	ムラサキケマン			●					40	
サトウコソウ科	サトウコソウ						●	●	41	
サヤ豆科	アズキ類		●					●	42	
シツ科	ホネドネシト		●					●	43	
シツ科	ヒメジツ		●					●	44	
ジンチョウゲ科	ギンギ							●	45	
スイカズラ科	ニワトコ		●						46	
スベリヒユ科	スベリヒユ			●			●		47	
セリ科	セリ					●			●	48
	ヤマゼリ					●			●	49
	イヌタデ		●	●					●	50
	オオイヌタデ		●						●	51
	サナエタデ				●				●	52
タデ科	ブルソバ					●			53	
	ヌキボタデ					●			54	
	赤ツバウチボウカミ					●			55	
ツバウチ科	ツバウチ		●					●	56	
トウダイゴサ科	アホメギシツ		●	●		●			57	
	イソホウズキ		●	●		●		●	58	
	セシナリホウズキ		●	●		●		●	59	
ナス科	ホウズキ				●			●	60	
	ノミノナスマ			●		●			61	
	ミドリハコベ					●		●	62	
ナデシコ科	ミヤマハコベ		●			●			63	
	ワチガイソウ					●			64	
ニレ科	ケヤキ				●				65	
バラ科	ナワシロイチゴ				●			●	66	
	モモ						●		●	67
	ヤマザクラ		●		●				●	68
ヒノキ科	ヒノキ	●		●					69	
ヒユ科	イノコブチ		●						70	
	ヒチチイノコブチ							●	71	
ブドウ科	エビヅル							●	72	
	フキ		●						73	
ブナ科	コナラ		●						74	
ヤマメ科	ハウチワヤマメ							●	75	
	イヌアサショウ							●	76	
ミカン科	キハダ							●	77	
モチノキ科	クロガサモチ				●				78	
ヤマゴボウ科	マルミノヤマゴボウ		●						79	



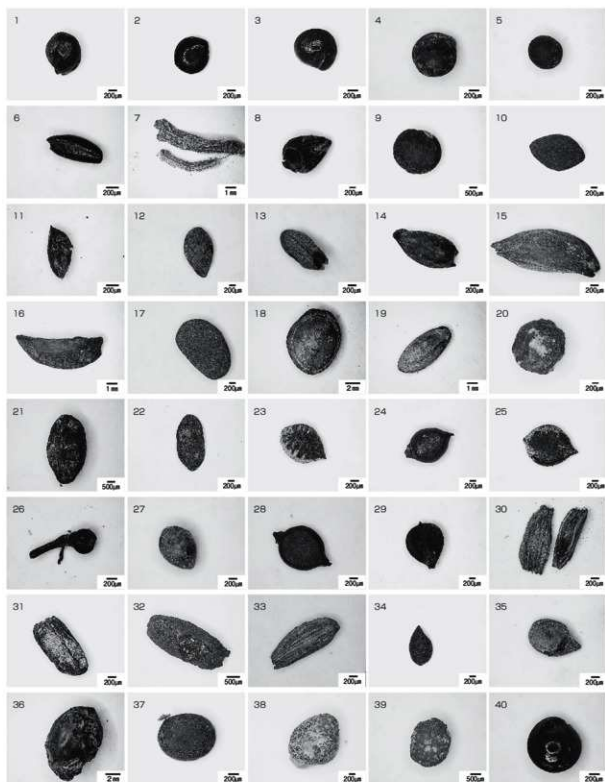


図85 出土種子①

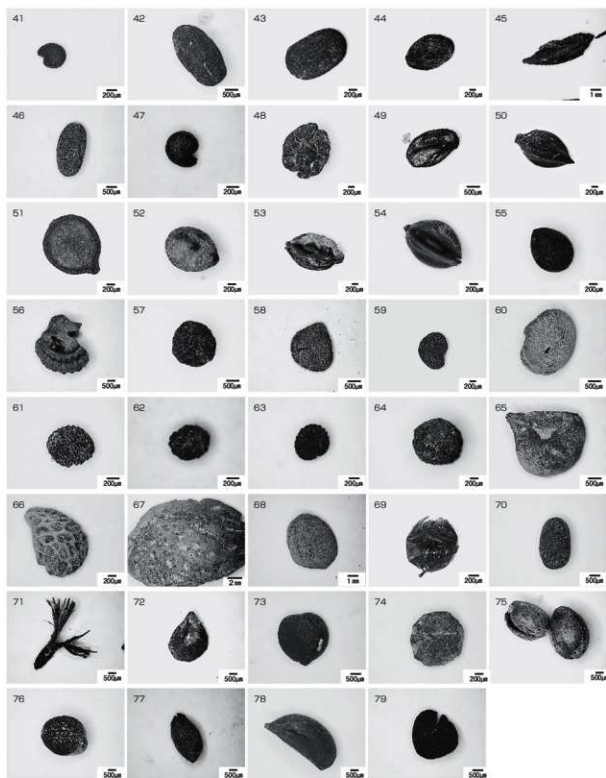


图86 出土種子②

## 第5節 岡山大学鹿田遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

### 1. 試料

資料は岡山大学鹿田遺跡から出土した容器2点である。

### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柀目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、樹皮1種）の表と顕微鏡写真を示し、いかに各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### 1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

（遺物No 2 D 写真No 2 D）

木口と板目は採取できなかった。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

#### 2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.)

（遺物No 1 A、1 B、2 A、2 B、2 C、2 F 写真No 1 A、1 B、2 A、2 B、2 C、2 F）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柀目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からやスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

#### 3) ヤマザクラorカバの樹皮

（遺物No 1 C、2 E 写真No 1 C、2 E）

横断面と接線断面は採取出来なかった。放射断面ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。しかし桜、樟の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

### 参考文献

- 林 昭三 1991「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所  
 島地 謙・伊藤隆夫 1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版  
 北村四郎・村田 源 1979「現職日本植物図鑑本編Ⅰ・Ⅱ」保育社  
 奈良国立文化財研究所 1985「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」  
 奈良国立文化財研究所 1993「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」

### 使用顕微鏡

Nikon DS-F11

表14 岡山県鹿田遺跡出土木製品同定表

No	品名	樹種
1	A 曲物 (本体)	ヒノキ科アスナロ属
	B * (籜)	ヒノキ科アスナロ属
	C * (縦じ皮)	ヤマザクラorカバの樹皮
2	A 曲物 (本体)	ヒノキ科アスナロ属
	B * (詰め板)	ヒノキ科アスナロ属
	C * (籜)	ヒノキ科アスナロ属
	D * (釘)	スギ科スギ属スギ
	E * (縦じ皮)	ヤマザクラorカバの樹皮
	F * (底板)	ヒノキ科アスナロ属

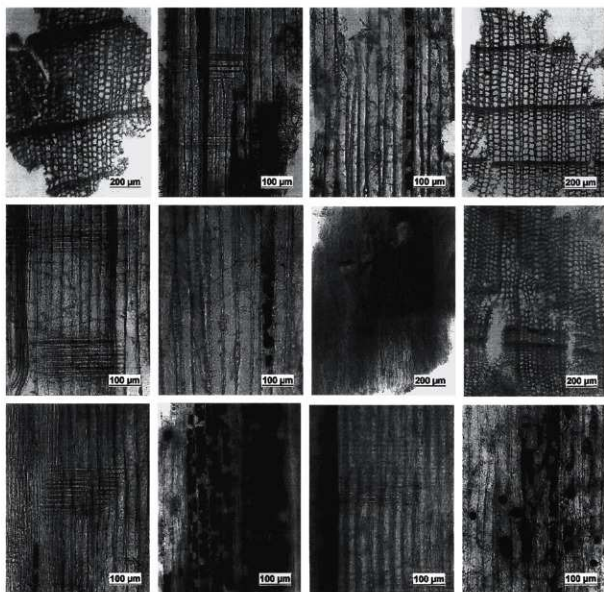


図87 木製品類の顕微鏡写真①

1~3: No-1A ヒノキ科アスナロ属、4~6: No-1B ヒノキ科アスナロ属、7: No-1C ヤマザクラorカバの樹皮  
 8~10: No-2A ヒノキ科アスナロ属、11・12: No-2B ヒノキ科アスナロ属

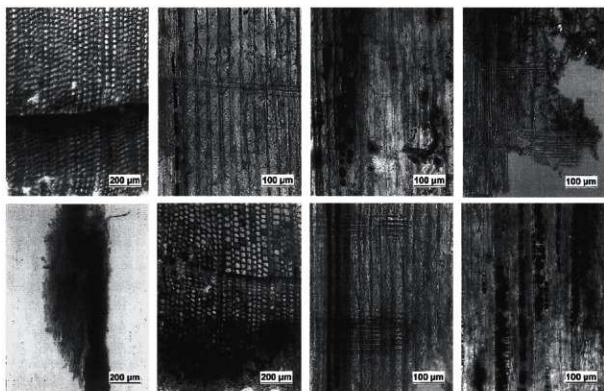


図88 木製品類の顕微鏡写真②

13～15: No-2B ヒノキ科アスナロ属, 16: No-2D スギ科スギ属スギ, 17: No-2E キマザクラorカバの樹皮  
18～20: No-2F ヒノキ科アスナロ属

## 第3章 調査の記録

### 第1節 調査地点の位置と層序・地形

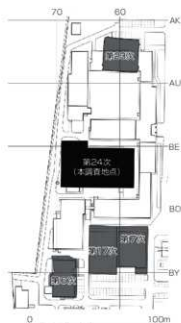


図5 調査地点の位置  
(縮尺1/3000)

#### a. 調査地点の位置

本調査地点は岡山大学鹿田キャンパスの西端、鹿田地区構内座標BD・BL58～69区に位置する(図5)。調査以前は駐車場として使用されていた。本地点の北・東・南は医学部基礎医学棟に囲まれており、その北側にはJホール(第23次調査地点)、南側には旧アイトープ総合センター(第6次調査地点)・基礎研究棟(第7次調査地点)・総合研究棟(第17次調査地点)が位置する。第23次調査ではAP～AQラインを境に南北で地形環境が大きく異なっており、古代以前は北側が河道、南側が微高地であったことが確認された。第7・17次調査では古墳時代初頭の居住域もみつかっている。その他には第6・7・17次調査地点で確認された中世の屋敷地を区画する大溝が目目される。このように周辺では弥生～古墳時代前期の集落構造や、中世の屋敷地の展開に関する調査成果が得られている。本調査地点は第23次調査地点と第6・7・17次調査地点の中間に位置し、鹿田キャンパス北西部における土地利用の動態を考える上で重要な位置を占める。

#### b. 層序

土層の堆積状況は調査区の南北で異なっている。北側では第23次調査区から続く微高地を形成する土層が確認されているが、南側へは広がりを見せない。

北側でしか確認されない土層があることに留意しながら報告する(図6・7)。

##### <1層> (造成土)

主に1921～22年(大正10～11年)の岡山医科大学建設時以降の造成土からなる。基礎を含む煉瓦作り建物の一部が残存している部分があった。

##### <2層> (造成土)

灰茶褐色粘質土で、多くの灰色粘質土ブロックが含まれる。3層上面で確認された畝(本章第6節参照)を覆っており、岡山医科大学建設時の盛土と考えられる。調査区北壁(断面N①)では上面の標高が1.79mで、厚さは0.12～0.28mである。

##### <3層> (近代)

暗灰色砂質土で、明治～大正期の耕作土と考えられる。調査区全体で確認されている。上面の標高は1.5～1.65mである。厚さは約0.1m前後だが、調査区西半では特に厚く堆積しており、0.3m以上のところもある。近世～近代の陶磁器や備前焼を主体に遺物が出土している。

##### <4層> (近世～近代)

暗灰色粘質土で、灰色粘質土ブロックを多く含む。近世～近代にかけての埋土で、調査全体では確認されない。第23次調査の南壁でも確認されており、「近世埋土」として報告している。上面の標高は1.49mで、最も厚いところで0.28mを測る。

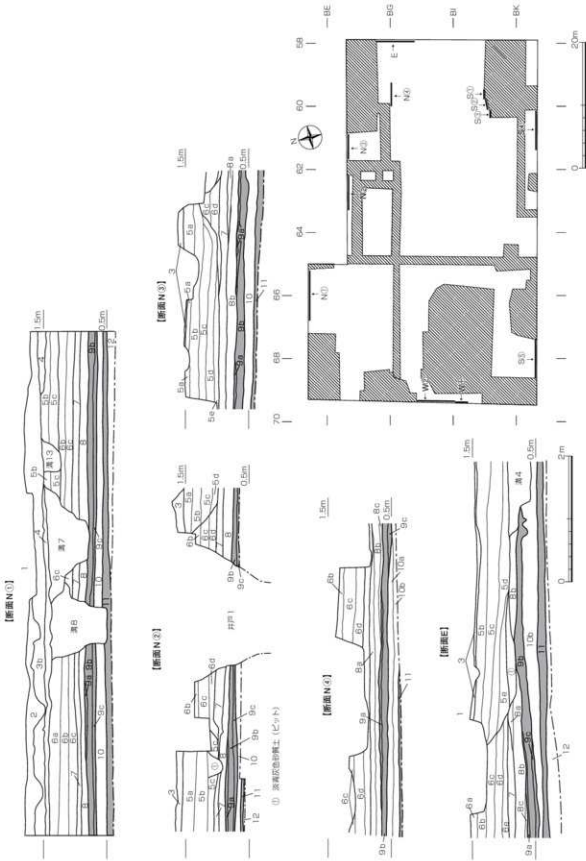


図6 調査区断面 (北壁・東壁) (縮尺1/60, 1/600)

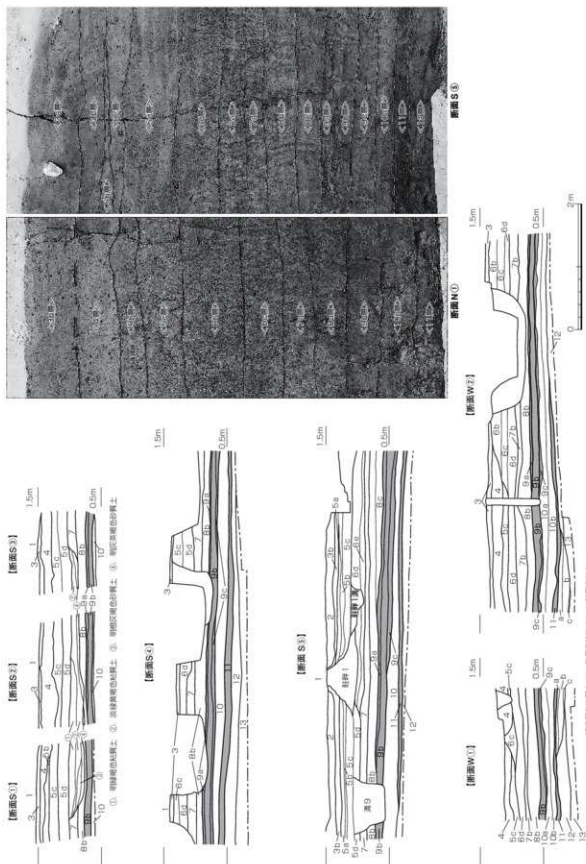


図7 調査区断面 (南壁・西壁) (縮尺1/60)



**<5層> (中世～近世)**

緑灰色粘質土が主体である。下方にいくにつれて砂質が強まり、色調は暗くなる傾向にある。含有される砂や粘土の種類・量などによって細分した。いずれも黄灰色砂質土のブロックを含むが、5a・5b層は非常に多く含み、5c層、5d層と下位になるにつれてその量が少なくなっていく。5a・5b層は灰色粘質土ブロックを含む。加えて5d層は、黄茶褐色砂質土およびマンガンの含有がみられ、砂質を帯びている。

本層は後述するように古代以前に形成された微高地である<6層>を削ったところに堆積したと考えられ、<6層>が良好に残存しているところでは確認されない。上面の標高は調査区東半では約1.5m、西半では約1.3mである。層の厚さは前者が0.5m、後者が0.2mである。この差は<3層>の堆積に影響されているものと考えられ、<3層>が厚いところでは、<5層>の堆積は薄いという傾向がある。

遺物の構成は、5a・5b層では近世のものが20%近く含まれているのに対して、5c層以下ではほとんど含まれていない。このことから5a・5b層の堆積は近世、5c～5e層は中世段階の堆積であったと考えられる。検出された遺物も前者が近世、後者が14世紀代以前のもので、包含層出土遺物の傾向と矛盾しない。

**<6層> (古墳時代前期後半～古代)**

灰褐色砂質土を主体とする。BGラインよりも北で確認される微高地を形成する土層である。調査区北東では特に堆積が厚く、直上が造成土(<1層>)となる。調査区西半の北壁では、<4層>直下に約0.1mの厚さで<5層>をはさんで本層が確認される。砂質やマンガンの含有状況から5つに細分した。6a層～6c層は東壁北半から北壁にかけて確認される。いずれも灰色粘質土をブロック状に含むが、径は6a層が0.5cm程度であるのに対し、6b・6c層は1～2cmと大きい。また6c層はマンガンの含有が顕著である。これに対し6d層・6e層は色調がやや暗い。6a層～6c層にみられた灰色粘質土の含有は顕著でないが、黄灰色の砂が含まれている。黄灰色砂は特に東壁北端付近で顕著にみられ、6d層では2cm程度のブロック状、6e層では暗褐色砂質土と混ざり合うようにして含まれている。また6e層は砂質であるが、やや粘性が認められる。上面の標高は約1.4～1.55mで、層厚は調査区北東角でもっとも厚く0.6mで、調査区北西部では0.43mを測る。

遺物は丹塗土師器を中心とした奈良時代後半の土器が多く出土しており、その他に古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器もあるが、極めて少量である。奈良時代後半に属する遺物の検出も本層であり、微高地の形成時期を示していると考えられる。

**<7層> (古墳時代前期前半)**

黄灰褐色砂質土で、砂の含有率によって二分できる。7a層は色調がやや淡く、灰色粘質土と黄灰色砂が含まれる。これに対して7b層は灰色粘質土の含有が少なく、7a層よりも砂質を帯びている。西壁では特に砂の含有が顕著である。上面の標高は1.0m前後であるが、調査区南西は0.66mと低い。後述するように調査区内には弥生時代以前に北東から南西に向かって流れる河道が存在したと考えられ、その影響によるものと考えられ、以下の層も同様の傾向がみられる。厚さは0.1～0.2mである。本層では遺物がほとんど出土していない。しかし古墳時代前期前半の土器の掘削面が本層であったと考えられるため、それまでに堆積したものと考えられる。

**<8層> (弥生時代後期)**

淡黄灰白色粘質土で、調査区全体で確認されている。灰褐色粘質土ブロックを多く含み、鉄分の沈着が顕著である。7層と同様に砂の含有状況により細分している。8b層は明黄色砂粒を多く含む。8c層は8a・8b層よりもやや粘性がある。西壁では特に砂の含有が顕著である。上面の標高は0.8～0.9mであるが、<7層>と同様に調査区南西では0.56mと低い。厚さは0.1～0.2mである。遺物は北西部で弥生時代後期中葉～末の土器が廃棄された状態で出土しており(土器溜まり)、本層の形成時期を示している。

**<9層> (弥生時代後期)**

暗灰褐色粘質土。植物の影響による腐植土層であると思われる。調査区全体で確認された。部分的に暗灰色粘

質土の含有率によって3層に分けられる。9 a・9 c層は本層の主体をなす9 b層の上下で確認されるもので、9 a層は黄灰色砂を含み、9 c層は灰色粘質土が多くを占める。9 b層は径5 cm以下の灰色粘質土ブロックを含んでいる。上面の標高は0.7~0.8mで、調査区南西部では0.44mである。厚さは9 a・9 c層の堆積状況によって異なり、0.14~0.23mを測る。遺物は弥生時代後期中葉の土器が少量出土している。

#### <10層> (弥生時代中期後半)

淡黄灰褐色粘質土。9層から多くの樹痕が入り込んでおり、その周囲では鉄分が多く含まれている。含有物はほとんどみられず、混じりの少ない土層である。上面の標高は<9層>が厚く堆積するところでは低い傾向があり、標高0.34~0.6mを測り、調査区南西が一番低く0.29mである。遺物は本層で検出された遺構が位置する調査区北西部で弥生時代中期後半の土器が出土している。

#### <11層> (弥生時代前期以前：以下の層も同様)

暗灰色粘質土。調査区全体で確認される。植物の腐植土層であると考えられる。本調査区では遺物が出土していないが、他調査区では弥生時代早期~前期の土器が出土しており、本層の形成時期を示している可能性がある。上面の標高は調査区北西部が高く0.5mを測り、下部の河道の影響を受けたところでは0.2~0.3mと低い。

#### <12層>

淡明緑灰色粘質土。11層から多数の樹痕が入り込み、その周囲に鉄分が多く確認される。上面の標高は高位部で0.5m前後、退位部で0.2m前後である。

#### <13層>

暗灰色粘質土。粘性の強さによって細分でき、上層は樹痕状のしみこみがみられる。調査区南西では標高-0.04mを測る。

### c. 地形

各層の堆積状況を見ると、本調査区では時期によって地形が大きく変わっていたことがわかる。ここでは古い時期からその推移をみてみよう。

本調査区では鹿田遺跡で人々の営みが開始される弥生時代中期後半よりも古い土層が確認されている(<11層>以下)。<11層>と<12層>はおおよそ同様な堆積状況を示しているもので、ここでは<11層>に着目する。<11層>は暗灰色粘質土層であり、植物の腐植が影響しているものと考えられる。このことはこの時期に植物が繁茂するような状態にあったことを示しており、地形が安定していたものと思われる。この時期に最も標高が高いのが調査区南東角部であり、上面の標高はここから北東・西に向かって低くなっていく。これに対し、62から66ライン付近の北壁は南東部ほどではないが、比較的高い状況を示している。調査区西壁ではBF-BGライン間で<11層>に覆われる河道上の落ち込みが確認されていることから、調査区を北東から南西方向に斜行するような旧河道が存在していたものと思われる。また調査区北西部もかなり標高が低いので調査区外北側から南西方向に走る別の河道が存在した可能性も考えられる。

このような地形は弥生時代後期にあたる<9層>の堆積段階に変化する。最も顕著なのは調査区北西部部である。この部分は<9層>が最も厚く堆積しており、62ライン付近までほとんど高低差のない状況へと推移している。調査区中央を横切る河道はまだ落ち込みを呈しているが、これより北側では居住などの人々の生活に利用可能な土地が形成されたと思われる。弥生時代中期後半の遺構・遺物がこの区画で確認されることも、このことを示唆している。調査区内では、弥生時代後期の遺物が部分的にまぎらって出土しているが、遺構は確認されていない。遺物は調査区北西部のゆるやかな斜面で出土していることから、微高地状の高まりが形成されていたと考えられる調査区外の北側から廃棄されたものと思われる。その後、<8層>が堆積するが、地形的にはそれ以前と大きく変わるものではない。調査区中央の旧河道部は標高が低い状態が継続するが、北壁の61ライン付近で

は<8層>の堆積が厚く、それまで最も高い土地であった調査区南東部と同程度の標高となる。

古墳時代前期の<7層>の堆積は調査区北西部で顕著である。西壁における砂の含有が目立つ点からは、河川からの砂の供給がより活発であったことを思わせる。調査区東壁北端でも砂の含有が目立つことも、このことを示唆している。

続いて古墳時代前期後半～古代の土層である<6層>だが、本層が確認されるのは調査区北半のBGライン以北に限られており、それ以外のところでは<7層>の直上に<5層>が堆積している。この状況を理解するには二通りの解釈ができる。一つは、<6層>の堆積が現状のような状態であったと考えるものである。もう一つは本来調査区全体に堆積していた<6層>が、<5層>堆積以前に土地改変がおこなわれて掘削されたと考えるものである。東壁の北半では<5層>と<6層>の境が明確であり、高低差が著しい。また東壁南半では<5層>の下面が一定しない状況が見られ、下面の標高が高い部分では<6層>が散発的に確認される。これらのことから<5層>堆積前に大幅な改変がおこなわれたことが想定され、<6層>の分布は土地改変の結果をあらわしているものと考えられる。<5層>形成期は本調査区の景観を大きく変えた時期であると評価でき、土地利用における画期と捉えられる。<5層>の堆積後全体が<3層>によって覆われるが、標高の低い部分は<4層>によって埋められている。東壁北端では<6層>直上で造成土が確認される。<3層>は近代の耕作土と考えられ、堆積は調査区全体に及んでいる。

## 第2節 弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物

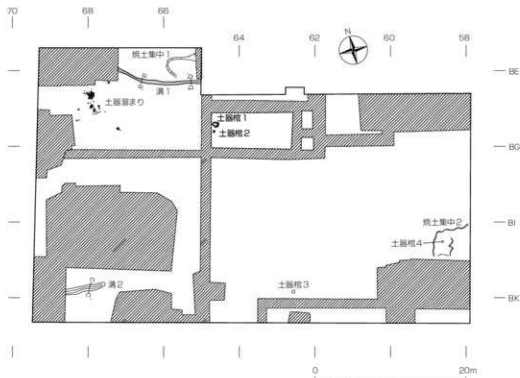


図8 弥生時代～古墳時代前期の遺構配置図（縮尺1/500）

本時期の遺構としては溝2条、土器棺4基、土器溜まり1ヶ所、焼土集中2ヶ所があげられる(図8)。検出面は弥生時代中期後半が<10層>、弥生時代後期が<8層>・<9層>、古墳時代前期が<7層>である。溝1は弥生時代中期後半のもので、BE65~67区にかけて検出された。この時期の遺構としては唯一のものであり、遺物は本溝およびその周辺で出土している。土器溜まりはBE67~BF68区で確認された。弥生時代後期後期中葉~末の土器が出土しているが、この時期の他の遺構は本調査区では確認されていない。土器溜まりの北~北東方向は微高地になっており、そちら側から廃棄されたものと考えられる。土器棺はBF64区(土器棺1・2)で2基、BJ62区で1基(土器棺3)、BE58区で1基(土器棺4)が確認された。いずれも古墳時代前期前半のものである。土器溜まりや土器棺4の周辺では焼土ブロックが8~9層に密に含まれる部分が確認されており、周囲の微高地上での被熱行為後に廃棄されたものと考えられる。

本調査区で確認された遺構は、弥生時代中期後半は微高地端部を画する溝、弥生時代後期は微高地側から廃棄された土器や焼土の集中、古墳時代前期前半は墓地、というように、その性格が異なっていることが特徴的である。これは各時期における微高地端部の利用状況を示していると考えられる。

### a. 溝

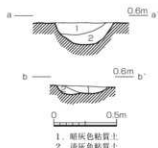


図9 溝1断面(縮尺1/30)



図10 溝2断面(縮尺1/30)

### 溝1(図9)

<10層>上面で検出した。BEラインのすぐ南側を東西方向に走るもので、67ライン付近からは西北方向へと向きを変えている。地形が北から南に向けて緩やかに傾斜する地形変換ラインに沿って掘削されたと考えられる。調査区内では約9.3mの長さが確認された。溝幅は最大で0.63mを測る。検出面の標高は約0.5~0.6mである。底面の標高は0.3~0.45mで、西側がやや低くなっている。

断面形は楕形である。埋土は二分で、1層は暗灰色粘質土で、植物の腐植の影響を示す<9層>に類似する。2層は淡灰色粘質土である。

遺物は土器の胴部片が4点出土しているのみで、固化できるものはなかった。弥生時代中期後半の遺物が含まれる<10層>からの掘り込みであるため、本溝も同様の時期であると考えられる。

### 溝2(図10)

BJ67~68区で確認された。検出面は<8層>で、標高は0.77mである。底面の標高は0.48mで、検出面からの深さは約0.2~0.3mである。西に向けてわずかに傾斜している。主軸は構内座標の東西軸の北東へややふれており、西端はBKラインから北へ2m、東端は同0.5mに位置する。幅は約1.0mである。

断面形は皿形である。埋土は3層に分けられるが、すべて黄灰褐色~灰色系の砂質土で類似している。出土遺物はない。

溝の埋没時期は明確にし難いが、検出面から弥生時代後期に属すると考えられる。

### b. 土器棺

#### 土器棺1(図11・12、図版1~3、25)

BF64区で検出された。65ライン付近にあった南北方向の共同溝を撤去した際に壁面で確認された。検出面は<7層>であるが、上部には<5層>が堆積しており、<5層>形成期に上部が削平されている。検出面の標高は最高所で1.01mを測る。

墓壇は西端が破壊されているが、上面は東西方向に主軸をもつ長軸0.91m（残存長）、短軸0.74mの隅丸方形を呈する。南西角は他よりも張り出している状況がみられる。南側は二段掘りで、テラス面が形成されており、平面形は上面と同様に南西角の張り出しが特徴的である。底面は楕円形で、長軸0.74m、短軸0.58mである。テラス面は埋土の変換点になっており、埋土の際にはこの段差が意識されていた可能性がある。

墓壇の埋土は5層に分けられる。墓壇底面と棺の間では灰黄色砂を含む明灰色砂質土である5層が確認される。5層上面は南側のテラス面に符合しており、棺設置前に墓壇底からテラス面までが埋められたと考えられる。その後、棺が据えられ、墓壇との間が充填される。この部分は4つに細分される。いずれも灰色・黄灰色砂を含むが、その含有量は異なっている。特に3層は砂が多く、最も砂質を呈する。これに対し、1層はやや粘性を帯びており、その他の層とはやや土質が異なっている。

棺は、完形の大型壺を使用した棺身と、壺2点を組み合わせた蓋で構成されている。棺身は口縁部を西に向けて、ほぼ水平に置かれている。棺身の口縁部には蓋となる壺が被せられる。壺は二点とも頸部より上が打ち欠かれており、さらに縦方向に半裁された状態であった。まず棺身の口縁部を覆うように蓋1（図15-3）が被せられる。

蓋1は頸部を南側に向けている。その外側をさらに蓋2（図15-2）で覆うが、胴部上半から頸部にかけてが南側（破片1）、底部から胴部下半（破片2）が西側に配される。破片1の頸部は破片2の方向に向いており、両者は異なる向きで配置されていることがわかる。このことから蓋2は破片が個別に用いられたものであると言える。蓋2の破片2は墓壇の底面側まで入り込んでいるため、棺身と蓋1が据えられる前に置かれた、もしくはこの位置に配された状態で据えられたものと思われる。

棺身に用いられた土器は特徴的な複合口縁を有する壺である。胎土には結晶片岩が含まれており、阿波東部から搬入されたものと考えられる。また蓋1と蓋2は底部形態や内・外面の調整が異なっており、頸部の立

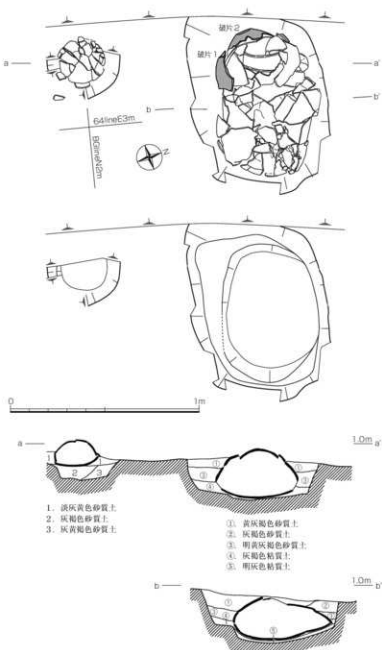


図11 土器棺 1・2平・断面（縮尺1/20）

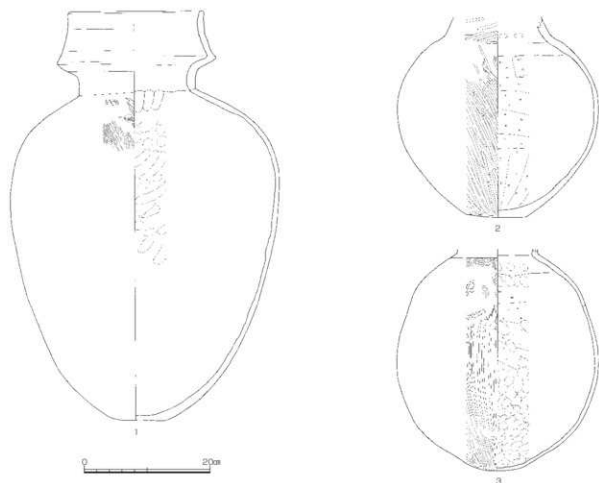


図12 土器棺1出土物 (縮尺1/6)

ち上がりにも違いがみられる。

本遺構の時期は、古墳時代前期前半に位置づけることができる。

#### 土器棺2 (図11・13、図版3・26)

BF64区で確認された。土坑状の掘りこみに口縁部を斜め下に向けた甕が納められており、後述の土器棺3と同様の状況であることから土器棺と判断した。土器棺1の南に位置し、墓壙上面間の距離は0.35mである。土器棺1と同様、支障物撤去時に確認された。墓壙の掘削面は北東部約1/4が残存しているのみであるが、棺に使用された土器は原位置を保っていた。検出面は<7層>で、最高所は標高0.95mである。棺の最高所は標高1.02mである。上部は<5層>による削平を受けていると考えられる。

墓壙の平面形は円形であると推測され、残存部が少ないため大きさは不明とせざるを得ないが、棺よりも若干大きめに掘り込まれている。断面形は逆台形を呈するが、南側は段状に掘り込まれている。

埋土は南側の段を境に2つに分けられる。1層は淡灰黄色砂質土である。灰白色砂を含むが、2層よりは量が少ない。2・3層は棺設置前に墓壙下部を埋めた土であり、上面は段にあわせているようである。

棺には甕が使用されている。底部に欠けが、擾乱によるものである可能性もある。墓壙内からの出土遺物はこの1点のみで、他には出土していない。土器は外面に平行方向のタタキ直がわずかにみられ、口縁部はくの字状を呈する。

古墳時代前期前半に位置づけられる。

**土器棺3** (図14・15、図版4・26)

BJ62区で確認された。<8層>掘削中に土器が出土し、その後精査して掘り込みを検出した。土器の標高は最も高いところで0.99m、検出面の標高は0.91mである。墓域内で確認された土器の口縁部(標高0.75m付近)を基に底部の位置を復元すると、その標高は約1.1mとなり、<7層>の堆積の中におさまる。このことから本来は<7層>から掘りこまれたと考えられる。

墓壇の平面形は円形で、棺よりわずかに大きい程度のものである。約半分が確認され、長軸は推定で0.42m、短軸は0.38mを測る。検出面からの深さは0.28m(標高0.63m)である。墓域内には土器が口縁部を斜め下に向けて、約70度の角度で据えられていた。土器の口縁部は掘り込みの底面から約10cm上にあるため、棺を設置する前に置土がなされていたものと考えられる(4・5層)。棺に用いられた土器は複合口縁の甕で、蓋は確認されなかった。棺内の土は<5層>に類似することから、棺上部が破壊された後に流入したものと思われる。

棺に使用された土器は古墳時代前期前半のものである。

**土器棺4** (図16・17、図版4・26)

BI58区で確認された。<5層>掘削中に完形の甕の底部が確認された。甕は口縁部を下にした状態で、単独で出土した。その後の精査では明瞭な掘り込みは検出できなかったが、この位置は<7層>が窪地状になっているところで、そこに置かれたものと思われる。土器の設置面の標高は0.87mである。掘り込みが検出されなかったことから遺構としての判断は難しいが、土器棺2・3のように口縁部を下にした土器が単独で墓域にいられる例もあることから土器棺であると判断した。土器の周囲には<5c層>・<5d層>が堆積しているため、中世の土地改変の際に露出したものが、そのままの状態に残された可能性もある。

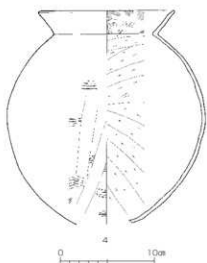


図13 土器棺2出土遺物(縮尺1/4)

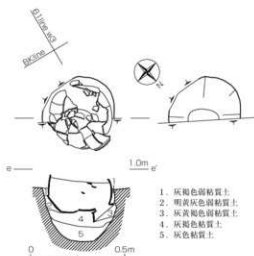


図14 土器棺3平・断面(縮尺1/20)

1. 灰褐色面粘質土
2. 明黄灰色面粘質土
3. 灰黄褐色面粘質土
4. 灰褐色粘質土
5. 灰色粘質土

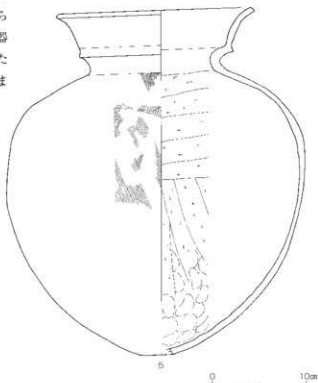


図15 土器棺3出土遺物(縮尺1/4)

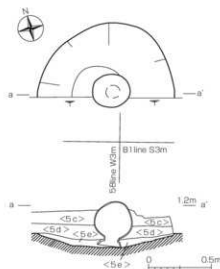


図16 土器棺4平・断面 (縮尺1/30)

土器は二重口縁の壺で、古墳時代前期前半のもので、形態的には土器棺3と類似している。

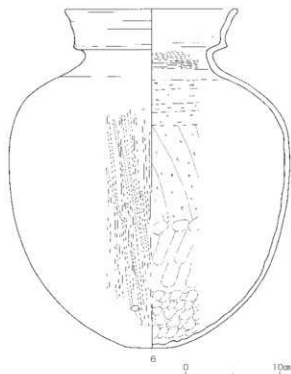


図17 土器棺4出土遺物 (縮尺1/4)

#### c. 土器溜まり (図18・19、図版4・26)

BE67区周辺では弥生土器が<8層>中から、狭い範囲で集中して出土した。この位置は北側に展開する微高地から南へむかって地形が下がっていくところであり、緩い斜面上に土器が廃棄された状況であると理解できる。

土器の分布には大きく5つのまとまりがみられる。A群では最も多く、標高0.713~0.886mの間にまとまる。完形に復元される個体はない。B群は標高0.736~0.876m、C群は0.706~0.780m、D群は0.64~0.706m、E群は0.64~0.744mの間に土器が包含されており、南側に向けて標高が下がっていく。これは地形の傾斜に沿ったものである。出土状態はA群と同様な状況を示す。破片はA群とC群、A群とD群、B群とC群の間で接合関係がみられる。1個体の破片が離れた場所で出土していることは、北側の微高地側からの廃棄状況を示していると考えられる。

出土した土器には弥生時代後期中葉~末までのものがある。注目されるのは、これらの土器の外面に剥離状の欠損部分がみられることである。図19に掲載した土器10点のうち6点に剥離状の欠損が確認できた。図19-8は層状に剥離した破片が接合しており、未掲載遺物の中には接合した破片で厚さが大きく異なるものも含まれていた。これらは土器焼成時における失敗品である可能性がある。

#### d. 焼土集中

##### 焼土集中1 (図20、図版4)

BD・BE65区に位置する。<9層>掘削中に焼土の面的な広がりが確認された。検出面の標高は0.7m前後

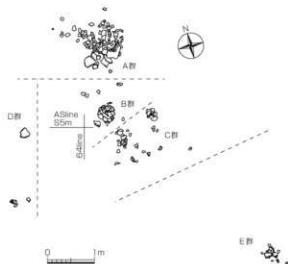


図18 土器溜まり遺物出土状況 (縮尺1/80)



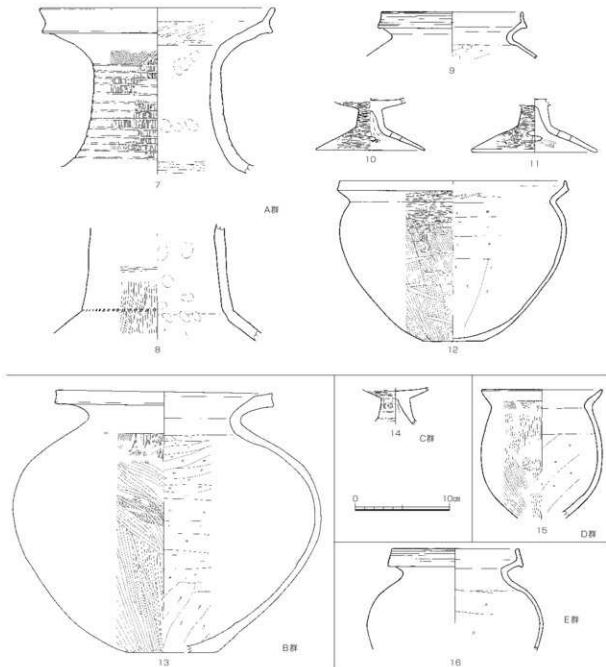


図19 土器溜まり出土遺物 (縮尺1/4)

である。焼土の分布範囲は東西3.5m、南北2.2mで、東は調査区外まで広がりをみせる。南側は視乱により失われているため、端部を確認することはできなかった。

焼土が出土した場所は、立ち上がりの緩やかな浅い窪地状の地形になっており、深さは約0.1～0.2m、底面の標高は最下部で0.507mを測る。焼土の分布には粗密があり、西端に特に集中している。焼土の大きさは1cm以下のものから5cm以上のものであり、不揃いである。また色調も乳白色、橙色、暗黄色、紅色などがあり、1個体の中で変色のみられるものもあった。このように焼土は被熱程度の異なるものが混在しており、被熱行為後の残滓が窺察されたと考えられる。ただし、炭化物はわずかに確認される程度である。



図20 焼土集中1平・断面 (縮尺1/50)

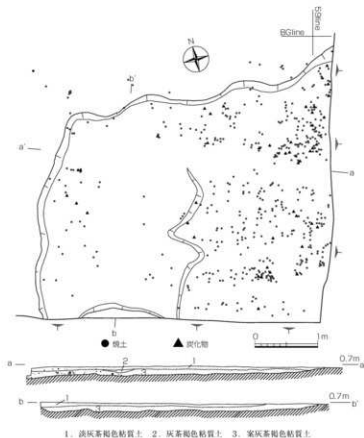


図21 焼土集中2平・断面 (縮尺1/60)

窪地状地形に堆積した埋土は含有物、色調から3つに分けることができる。1層は淡黄灰褐色弱粘質土で、焼土の含有は少ない。2層は淡灰褐色弱粘質土で、焼土を密に含む。また灰色粘質土をブロック状に含む。3層は淡黄灰色弱粘質土で、焼土の含有は最も少ない。

焼土の廃棄時期については土器がまったく出土していないため、細かく絞り込むことはできない。上下の土層との関係からみると、<10層>は弥生時代中期後半、<8層>は土器溜まりの形成期で弥生時代後期中葉以降であり、両者の移行期が<9層>となる。焼土を含有する層は<9層>に覆われており、埋土の質・色調は<10層>に類似することから、弥生時代中期後半～後期であると考えられる。

#### 焼土集中2 (図21)

調査区南東部のB158区で確認された。<9層>掘削後に焼土の分布が確認された。検出面は<10層>上面で、標高は0.55m前後である。焼土の分布は東側が調査区外にまで広がっており、南側も一部端部が確認されたが、ほとんどが攪乱によって失われている。分布範囲は調査区内の最大で南北4.1m、東西4.6mを測る。

焼土の出土範囲は深さ約0.15mの浅い窪地状の地形を呈しており、底の最下部は標高0.474mである。焼土はそこに堆積した土に含まれている。窪地状地形の平面形は曲線部分が多く不整形で、底面は起伏が多い。また立ち上がりも不明瞭であり、なだらかに落ち込んだ状況である。このことから窪地状の地形は人工的なものではないと考えられる。

焼土は散在的に分布するものの、東平により多い傾向がみられる。焼土の大きさはほとんどが1cm未満であり、色調は紅色、橙色、淡黄色などが確認され、1

個体で橙色から淡黄色へ変色するものもみられる。廃棄状況としては焼土集中1と同様な状況が想定される。焼土の他にはわずかに炭化物があり、含有率は焼土集中1と比べるとわずかに高い。

窪地状地形の埋土は3つに分けられる。1層は淡灰茶褐色弱粘質土で、焼土を含有する量は多くない。窪地状地形の全体を覆っている。2層は暗灰茶褐色粘質土で、灰白色砂が含有される。焼土が最も多く含まれる層で、東端付近では特に径0.1m程度のまとまりも確認される。3層は灰茶褐色弱粘質土で焼土は含まれるが、1層よりも量が少ない。

土層の堆積状況から焼土の廃棄時期は、弥生時代中期後半～後期におさまる可能性が考えられる。

### 第3節 奈良時代の遺構・遺物

本地点では奈良時代後半の遺構・遺物が確認された(図22)。遺構としては井戸1基、土坑1基、溝1条が挙げられる。これらはBE62～67区でみられ、この範囲は<6層>が良好に残存しているところにあたる。BGライン以南は中世段階の削平により当該期の遺構が消失した可能性はあるが、少なくとも井戸のような深さのある遺構は形成されていないと思われる。また遺物の分布も遺構が確認された範囲に集中する。このように主要な遺構の分布は限定されたものであった可能性が高い。

#### a. 井戸

井戸1 (図23～28、図版5～7・27・31～34)

BE62区、調査区中央部の北端で確認された。検出面は<6層>で、上面には薄く<5層>が堆積している。南半分は建物基礎による攪乱で上部が失われている。検出面の標高は最高所で約1.5mである。底面の標高は-0.5

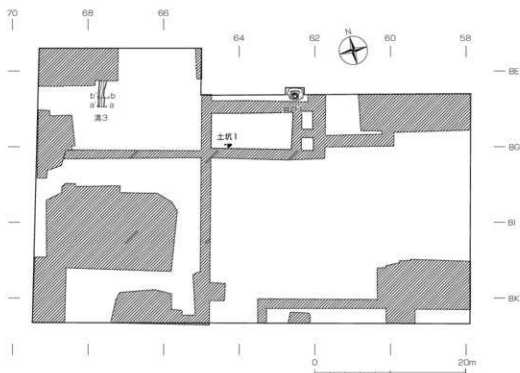
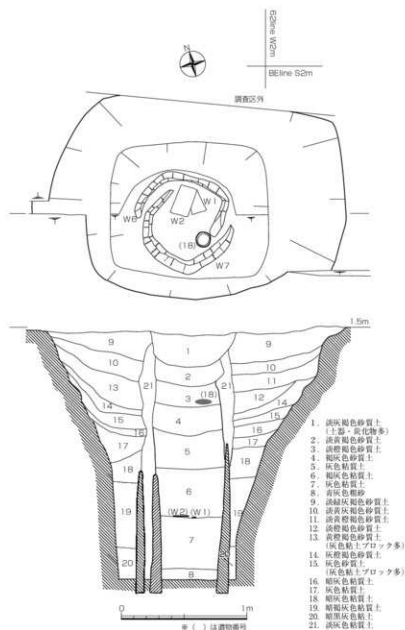


図22 奈良時代の遺構配置 (縮尺1/500)



うに倉庫が3点出土した(図27)。7層は暗灰色粘質土で、含有物をほとんど含まない。7層直上では枠内北側で2点の板材が出土した。これらは調査後の洗浄の際に墨書きが確認され、絵馬であることが明らかとなった。まず絵馬1(牛)(図25)が長軸を南北方向に向けて置かれ、北側が一部重なるようにして絵馬2(狼狗曳)(図26)が検出された。いずれもほぼ水平な状態で、標高は絵馬2の上面で約-0.02mを測る。絵馬を置いた後は、混じりのほとんどない褐灰色粘質土(6層)で埋められている。さらにその上部には灰色粘質土(5層)、褐色砂質土(4層)が堆積する。両層は土器片や炭化物を含むもので、5層では棒状の炭化材や有機物もみられた。4層上面では完形の丹塗土師器杯が正位置に置かれた状態で出土した。杯は井戸枠内中心から南東方向に寄った位置に置かれたもので、底面の標高は約0.89mである。杯を覆うように3層、さらに2層が堆積する。両層は土器片をほとんど含まないが、枠内最上部の1層では土器片や炭化物、灰色粘質土ブロックの含有が顕著である。枠

mで、上面からの深さは約2.0mとなる。

検出面の平面形は隅丸方形、もしくは多角形状を呈し、残存状態の良い東西方向で2.37mを測る。標高0.5m付近よりも下は、1.1m×1.25mの方形、最下部は径約0.8mの円形に掘り込まれる。円形の掘り込みは中心よりも南側に寄っており、ここに井戸枠が設置されている。井戸枠は丸太を半截して内部を削り貫いたものが組み合わされたもので、北側の材を枠1(図28-W6)、南側の材を枠2(図28-W7)とする。両者は合わせ口部分が0.2~0.3m程度が重なるように設置されており、井戸の内径は東西0.5m、南北0.65mを測る。枠2の外側には板材が1枚沿うように設置されており、補強材の可能性がある。

埋土は井戸枠内を8層(1~8層)、枠外を12層(9~20層)に分層した。枠内の埋土は使用時~使用後の埋戻しを示すものであり、枠外は掘削後の枠の設置における裏込めの土である。枠内では最下層にあたる8層(青灰色粗砂層)が使用停止以前に溜まった土と考えられ、井戸枠の小破片が散見された。また木片や砂利と混在すよ

外は暗灰色系の粘質土（18～20層）で埋められている。11～13層は東西で堆積状況が異なっており、東側では混じりの少ない砂質土（11・12層）、西側では灰色粘質土ブロックを顕著に含む砂質土（13層）が確認される。

出土遺物には土器（図24）、木製品（図25～28）がある。出土土器のうち、25は7層出土の土師質の鍋、18は4層上面の完形の丹塗り土師器、26は4層出土の須恵器である。他の土器はすべて1層からの出土である。また主要な木製品は絵馬2点、斎串3点、列貫式井戸枠2点（3片・4片に破断）、杭1点、板材1点が挙げられる。中でも井戸枠内の底で出土した斎串、7層上面に置かれた2点の絵馬が注目される。斎串はいずれも薄い板状の木材で、両端を山形に加工している。2点の絵馬には異なる図柄が描かれている。

絵馬1（図25）は牛が描かれたものである（絵が描かれている面を表面、反対側を裏面とする。絵馬2についても同様に記す）。板の大きさは横21.8cm、縦12.5cmで、厚さは0.5～0.8cmを測る。樹種はヒノキで、板目材が使用されている。小口面にはほとんどの部分に表裏両面からの切断痕が残存している。表面には左右の端部付近に縦方向の割付線が確認される。表面の左辺は湾曲しており、この部分は直線的に加工しようとしていたと考えられる。左辺の割付線は図柄の端部から約3cmの位置に引かれており、右辺の割付線も尻尾から約3cm離れている。裏面には不規則な浅い線状の痕跡が顕著であるが、表面ではほとんど確認されない。また上辺中央には横0.2cm、縦0.4cmの孔が穿たれている。孔は全体的に角がなっている状態が保たれており、紐などを通して使用したような磨滅痕跡はほぼ認められない。板材の中央には頭を左側に向けた牛が描かれている。墨で描かれており、全体像を窺い知ることができる。頭部は角や耳、鼻先など牛の特徴が写実的に描かれている。頭頂部や耳の周りには湾曲する線が確認でき、これは帯で構成された頭飾りの表現であると考えられる。また鼻先には環状の白色化した部分があり、鼻ぐりのようにもみえる。胴体は輪郭が墨で描かれているが、その内部は木の地色とは異なり白色を呈している。頭部と前脚を結ぶ部分は墨の線が波状を呈しているのに対し、白色部分はその外側にまでおよんでいる。胴部側面には緩やかな曲線が描かれており、ここから背中までの間はやや赤色を帯びている。この部分は着色されていた可能性があり、背中にかけられた布を表現したものである。また曲線部分には5つの環状の飾りが取りついている。背中から前脚の上部にかけては二本の曲線が描かれており、これは背中からかけられた布をおさえる帯であろう。このように頭部・胴部は帯や布などで飾られていたと考えられる。尻尾の部分は

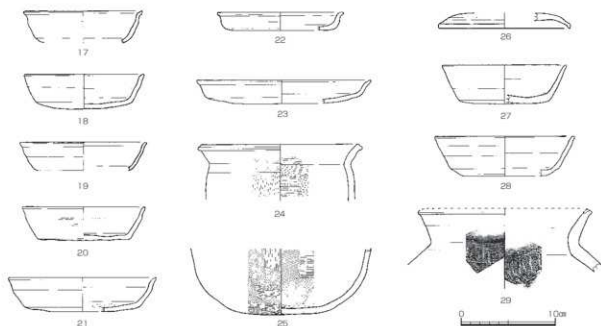


図24 井戸1出土土器（縮尺1/4）

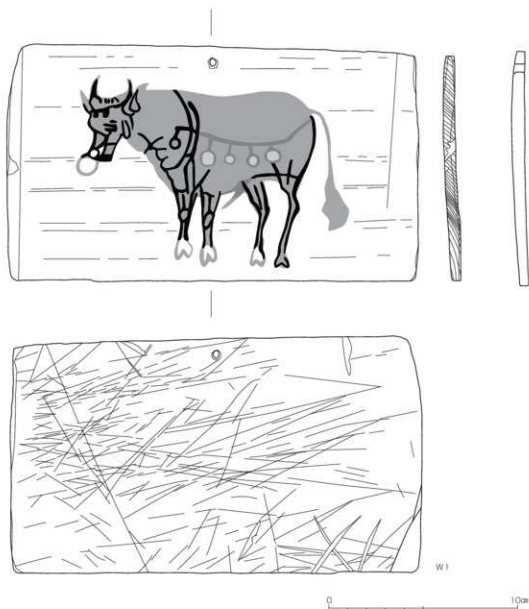


図25 井戸1出土木製品①(絵馬1:牛)(縮尺1/2)

白色化が明瞭で、墨以外の材料で彩色して表現されていた可能性もある。脚部は前脚と後脚で描き方が異なっている。前脚は関節部分を円で表現し直線のなのに対して、後脚は関節部分が後方に屈折するように描かれている。また脚部には先端が二股に分かれた蹄が描かれている。これは偶蹄類である牛の蹄を上から見た状態であり、他の部分が側面から見た状態で描かれているのは対照的である。後脚の付け根付近には斜め下方向に延びる白色部分が確認され、雄の陰部を表現したものとされる。

絵馬2(図26)は馬とそれを曳く狼が描かれたものである。板の大きさは横23.4cm、縦12.1cm、厚さ0.6~0.8cmである。樹種はヒノキで、板目材が使用されている。小口面には切断痕跡が確認されるが、左右で痕跡が異なっている。右辺は切断面が平坦で、表面側に切断を中断した痕跡があることから、こちら側を上向きにした状態で切断されたと考えられる。一方、左辺の痕跡は複雑である。表面の下端と裏面には割付線が残っているが、両者は位置が異なっている。切断面との関係でみると、下端から3.5cmまでは割付線に沿って切断されているが、これ

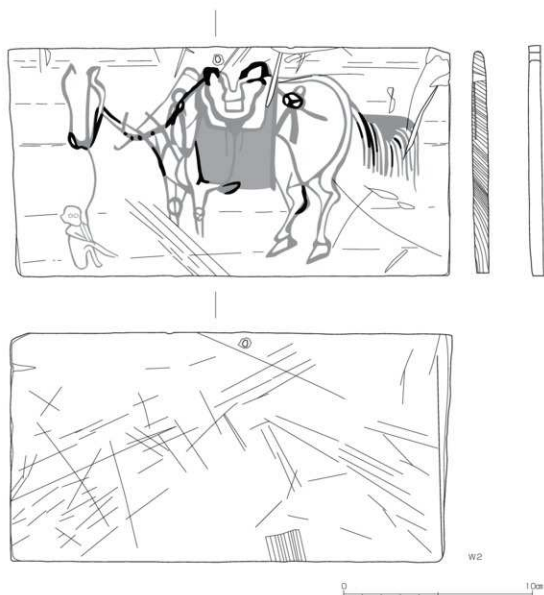


図26 井戸1出土木製品②(絵馬2:猿駒曳)(縮尺1/2)

より上は表面の割付線に沿って切断されているようである。小口面には3段に切断痕が残存している部分があることから、基本的には裏面を上向きにして切断したものと考えられる。切断の際には裏面の割付線から表面の割付線へと位置を途中で変えたものと思われる。切断位置の変更によって左辺と馬の頭部端との間隔は約3cmに保たれている。右辺は尻尾の端部との間隔は1.7cmしかないが、尻尾は端部から1.3~1.4cmの部分が尻に接続する部分とは異なる描き方になっており、本来は右辺から3cmの位置が意識されていたと思われる。裏面には絵馬1ほど明瞭ではないが細かな浅い線状の痕跡があり、表面にも擦痕や傷が多い。上辺中央の孔は横0.2cm、縦0.4cmの楕円形で、孔の角は絵馬

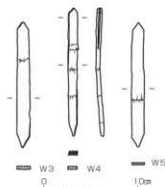


図27 井戸1出土木製品③(縮尺1/4)

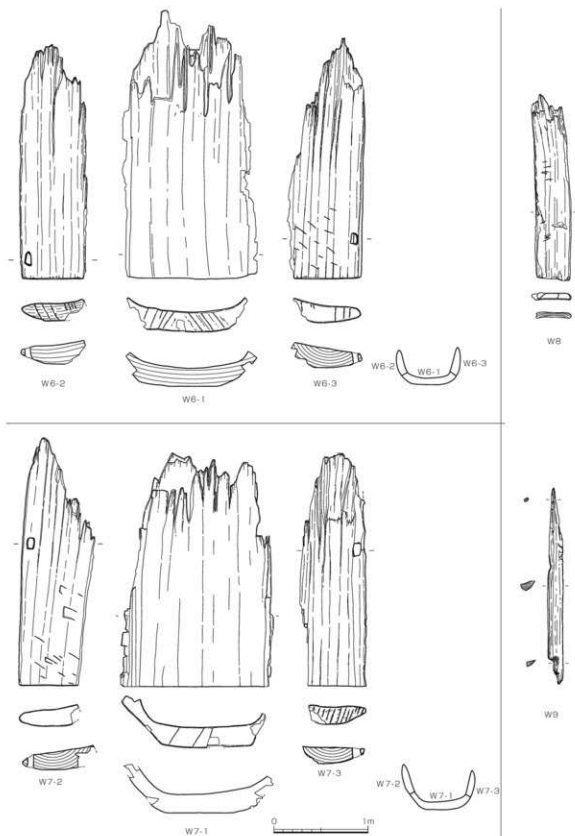


図28 井戸1出土木製品④ (縮尺1/16)



1と同様にはほとんど丸みが生じていない。板材の中央には左向きの馬が描かれている。墨はほとんど残っていないが、墨線が描かれた部分が白色化しており、他よりもわずかに厚くなっていることから、本来の姿をほぼ確認することができた。頭部は耳や面繫が表現されている。耳と鞍の間は墨の痕跡が確認できなかったが、表面にわずかな細線の跡があり、鬃が描かれていたものと思われる。胴部では鞍、障泥、胸繫、尻繫、鎧を確認することができる。鞍は前輪・後輪が確認でき、立体的な構造となっている。胸繫と尻繫には結び目があり、そこから下方に帯が伸びる様子が描かれている。尻繫の結び目には杏葉状のものが描かれている。障泥は鞍から胴体の下端までを覆っており、この部分は白色化していることから彩色されていた可能性がある。尻尾は前述のように尻から斜め下方に派生する部分と、そこから右方向に広がる部分があり、尻尾を強調的に描いたものと思われる。脚部の描き方は牛と共通しており、前脚は膝を円て表現して直線的に、後脚は膝の間節を後方に屈曲させるように描く。蹄は楕形に描かれている。尻から後脚、前脚は牛の絵馬と筆跡がほぼ重なり、馬の耳と牛の角も同様である。本絵馬は馬に加え、狼も描かれている。狼は馬の頭部の下に描かれており、馬の口から下に垂れた紐を両手でつかんでいる。目、耳が確認でき、頭部に占める割合が大きい。背中を少し丸めた状態で、右足を曲げ、左足は伸ばされている。大きく描かれた目や耳、背中を丸める仕草は狼の特徴を色濃く示している。

井戸の埋没時期は枠内出土土器群から8世紀後半と考えられる。

## b. 土坑

### 土坑1 (図29・30、図版7・27)

BG64区に位置する。検出面は<6層>で、標高は1.49mである。底面の標高は1.18mで、深さは約0.3mである。

周囲の攪乱等による破壊のため全体形を明らかにし難いが、掘り込み面の残存部から復元すると径約1.1mの円形であったと考えられる。断面形は皿形を呈し、埋土は3層に分けられる。いずれも砂質土で、1層には炭や焼土が含まれている。遺物は1・2層に含まれているが、特に2層に多い。

出土遺物のほとんどは丹塗り土器で、その他には少量だが土器の鍋もある。丹塗り土器は杯が最も多く、次いで皿が多い。杯には2つの形態がある。一つは器高が3cm前後と比較的浅く、底部と胴部の境が明確な角になっているのもので、もう一つは器高が5cmを超え、胴部から底部への転換点がゆるやかな弧を描くものである。量的には前者が多い。皿には口径26cmに復元できるもの(49)もある点は注目される。また袋部を有する鉄釜も出土している(M1)。

遺構の時期は出土土器から8世紀後半と考えられる。

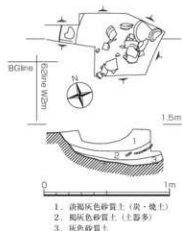


図29 土坑1平・断面  
(縮尺1/30)

1. 赤褐色砂質土(炭・焼土)
2. 暗灰色砂質土(土器多)
3. 灰色砂質土

## c. 溝

### 溝3 (図31、図版7)

BE76区で確認された。68ラインの東1.8mを鹿田座標の南北方向に沿って走行する。検出面は<6層>で、標高は1.27mである。底面の標高は1.03mで、検出面からの深さは0.24mである。溝幅は1.05mを測る。東側の立ち上がり、<5層>形成時に切られている。次節で述べる平安時代以降の遺構はすべて<5層>からの掘り込みであり、本溝はそれ以前に掘削されたものと考えられる。またすでに述べた古墳時代前期前半の遺構はいずれも<7層>からの掘り込みである。本溝は層位的にはそれらの時期の間に形成されたと判断され、周辺の遺構・遺物の様相から本時期に属するものと判断した。断面は皿形で、埋土は淡灰褐色系の砂質土で構成される。

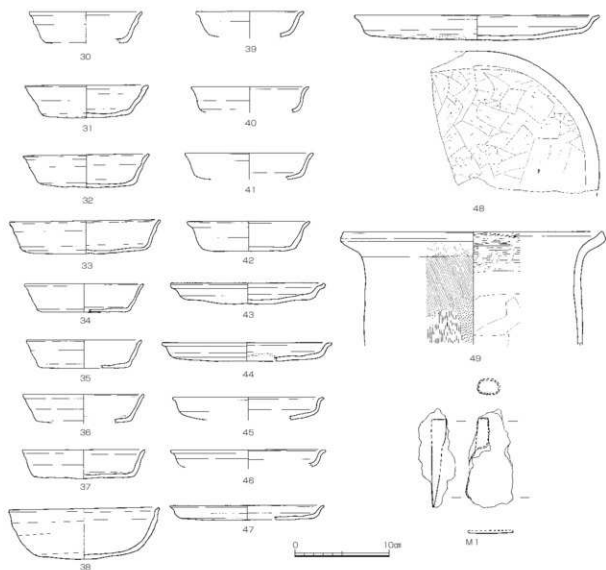


図30 土坑1出土遺物 (縮尺1/4)

出土遺物はわずかだが、弥生時代～古墳時代初頭の土器、丹塗土師器、中世の土師質土器がみられる。切り合い関係から中世の土器は混入と考えらる。

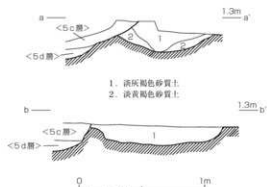


図31 溝3断面 (縮尺1/30)

#### 第4節 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物

本調査区では前段階までと比べ、遺構数、遺物量が各段に多くなる時期である(図32、図版8)。遺構の分布はそれまで希薄だった調査区南側へも広がりをみせ、調査区全体にわたっている。遺構検出面は<5c層>であり、<5層>

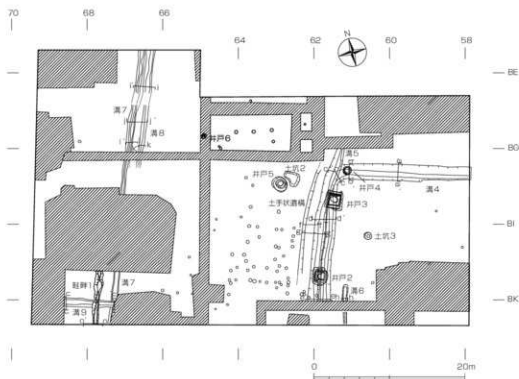


図32 平安時代～鎌倉時代の遺構配置 (縮尺1/500)

中から多くの遺物が出土している。

本時期に属する遺構には井戸5基、土坑2基、溝6条、土手状遺構1条、畦畔1条、ピット多数があり、井戸と溝は切り合い関係にあるものも多い。井戸からは井桁(井戸2)、井戸枠や曲物(井戸3)といった木製品が良好な状態で出土した。BG61～63区、BJ61区に4基が分布し、やや離れたBF64区で1基が確認された。井戸5に近接する位置では土坑2が検出されている。土坑2はL字状を呈しており、井戸5と重複しないような形態となっている。溝は直角に曲がる溝4や、これを切る溝5、2条が平行する溝7・8、溝7を切る溝9などがあり、土地の区画溝と考えられる。また溝4の南北方向と溝5に沿って62ライン付近に構築されている土手状遺構も本時期に属しており、溝と同様に土地区画に関わるものであると考えられる。ピットはほとんどが土手状遺構西側の62ライン～65ライン間に分布している。さらにBJ・BK67区では畦畔も確認されている。本時期の土地利用を考える上で重要であろう。

#### a. 井戸

##### 井戸2 (図33～35、図版9・10・27)

BJ61区で確認された。東側を溝4に、中央を溝5によってきられている。最高所の標高は1.01mで、周囲の土層堆積状況と比較すると<5c層>にあたる。井戸の底面は湧水による崩落で明確にできないが、標高-1.05mまでは掘り方が確認されており、底面もこの付近と想定できる。検出面から底面までの深さは2m前後であったと考えられる。

掘り方は三段構造である。平面形は検出面では方形で、南北2.36m、東西2.05mである。標高0.2m付近で段が形成され、掘り方は一回り小さい方形になる。ここでは南北1.04m、東西1.02mを測る。さらに標高-0.8m付近では平面形を径約0.7mの円形に変えて、底面に至る。

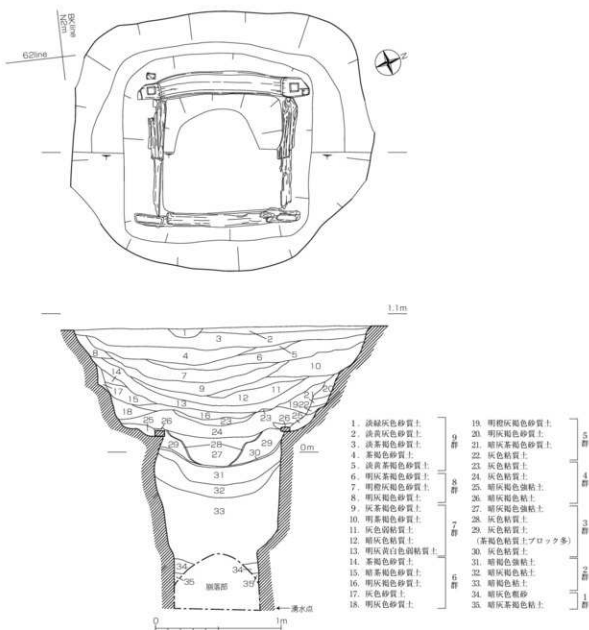


図33 井戸2平・断面 (縮尺1/30)

一段目の平面 (標高0.2m付近) では方形に組み合わされた井桁が確認された。4本の部材で構成されるもので、東辺・西辺は重厚で両端にはぞ穴状やくり込み状の加工が施されている部材であるのに対し、北辺・南辺の部材はそのような加工がなく脆弱であった。南西角部では南辺部材の先端が西辺部材よりも西側で確認されており、前者が先に据え置かれ、その上に後者が設置されたと考えられる。他の角部は北辺・南辺の部材の腐食により組合せ方は不明瞭であったが、本来は北辺・南辺の部材→東辺・西辺の部材の順で設置されたものと思われる。

埋土は35層に分けられ、その特徴から9群にわけることができる。これらは埋没過程における単位を示すものである。1群を34・35層、2群を31~33層、3群を27~30層、4群を23~25層 (26層は井桁の腐植土層)、5群を19~22層、6群を14~18層、7群を9~13層、8群を6~8層、9群を1~5層とする。まず井戸の底面から-0.85m付近までは暗灰色系の粘土や粗砂が確認される (1群)。これは使用期間中に堆積したものと考えられ

る。2群は暗褐色・暗灰褐色の粘土だが、 $-0.25\text{m} \sim -0.1\text{m}$ 付近は強粘土(31層)で、31層と32層の境では灰白色の砂が確認されている。32層堆積後に埋戻しの一つの単位があったことも考えられる。3群では木質層が注目される。3群の下面にあたる30層は厚さ1cm強、28層は1cmに満たない厚さの木質層である。これらに挟まれた29層では土器や炭化物が確認されている。このような状況からは2

群の上面を木製品で覆い、井桁上面近くまで埋戻した後、再度木製品が設置されたことが想定される。さらに28層は中央が大きく下方に落ち込んだ状況であり、最高所の標高は井桁の上面とあっている(標高0.2m付近)。28層の落ち込んだところには暗褐色強粘土(27層)が堆積している。これは井桁上面までの埋戻しが一つの単位となっていることを示している。4群は井桁と井戸内部を厚く覆う灰色系の強粘土で、特に24層は混入物をほとんど含まない。5群は4群の粘土と砂質土が混じる層で、6群は遺物などを含まない砂質土層である。7～9群は井戸の最終的な埋土で、8群には土器や炭が含まれている。

出土遺物には黒色土器の椀、土師質の台付を含む皿、鍋、甕、須恵質の鉢などがある。吉備系土師質土器椀は含まれていない。黒色土器は内面のみ黒色を呈している。皿にはヘラ切りと底部押圧の二者がある。後者は内面に煤が残存している。木器は井桁の部材が4点あり、保存状態の良かった2点(西辺部材:W10、東辺部材:W11)を図化した。残る2点のうち1点は検出時の

著しい傷みにより取り上げられず、もう1点は取り上げ後の乾燥収縮の進行が早く、図化できなかった。W10は特に加工が明瞭である。両側の端から約0.2mが一段低くされており、その中央部に7cm四方の方形の彫り込みがなわれている。またW11も両端から0.26mほどが一段低く加工されている。この部分には15cm×6cm(設置時の北側)、22cm×5cm(同南側)の彫り込みが施されている。両部材に施された端部の加工は、井戸上部に設けられ

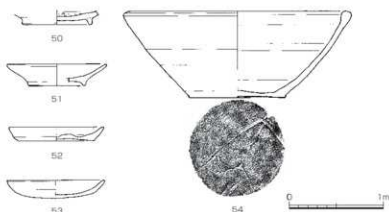


図34 井戸2出土土器(縮尺1/4)

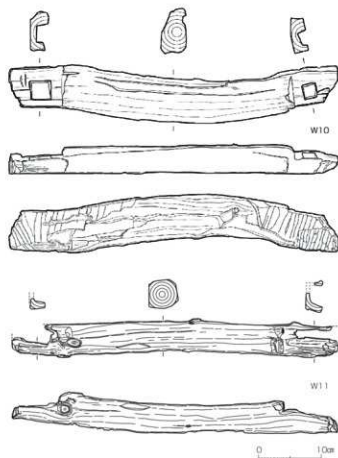


図35 井戸2出土木製品(縮尺1/15)

る構造物の柱などを受けるためのものと考えられることもできる。

本井戸の埋没時期は出土遺物から11世紀初頭頃であると考えられる。

### 井戸3 (図36～40、図版11・12・36)

BH61区に位置する。上部を溝4によって破壊されているが、東辺では掘り方の立ち上がり部分が確認された。検出面は<5 c 層>で、標高は1.067mを測る。井戸内の最下部は標高-1.22mであり、深さは2.28mである。平面形は上面、下面ともに方形で、上面は南北1.18m、東西1.05m、下面は南北0.95m、東西0.89mである。断面形は箱形である。

井戸の内部には方形立板組の井戸枠が設置されている。一辺が約0.8mで、ほぼ正方形である。井戸枠は四隅の柱と、そこに差し込まれた上下二段の棧木、掘り方と棧木の間に入れられた立板で構成されている。隅柱には異なる方向から開けられた二孔のホゾ穴が上下にあり、ここに先端が加工された棧木が差し込まれる。棧木は北辺の上下と南辺の上下が丸木の先端を失るように加工した簡易なものであるのに対し、南辺の下段と西辺・東辺の上下段は角材の先端をほぞ状に加工したものが使用されている。強度の面からいうと後者のほうがしっかりと立板を受けることができると考えられる。立板は各辺で枚数や並べ方が異なっている。北辺は隅柱間に7枚が一行

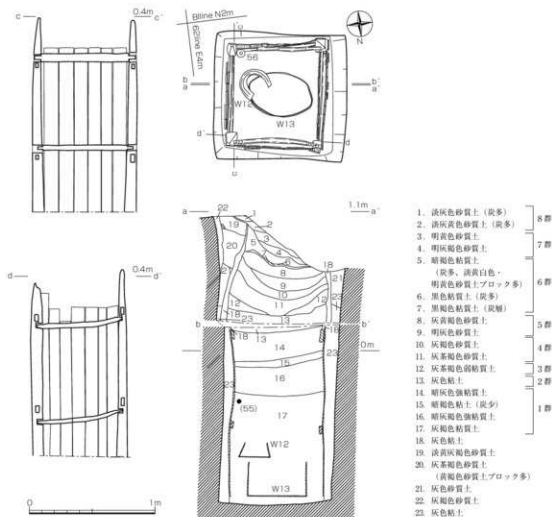


図36 井戸3平・断面 (縮尺1/30)

に並べられ、板の間隔が広がる2ヶ所には列の外側に立板が入られている。南辺と西辺も同様な構造で、南辺は隅柱間の立板が9枚、列外側の立板が3枚、西辺は隅柱間が10枚、列外側の立板が3枚である。西辺と南辺では隅柱を囲むように、外側に1枚ずつの立板が設置されている。東辺は立板の構造が異なっており、隅柱間に6枚が並べられ、列外側にも同数の立板が確認される。二重に立板を並べることで強固な作りになっており、東辺の残木に角材が用いられていることも整合的である。立板の長さは上部が腐食しているため長短があるが、最大のもので125.8cmである。幅は最大11.3cm、最小で5.3cm、厚さは最大で1.8cm、最小で0.2cmを測る。

井戸枠内では標高-0.835m付近で小型の曲物(図37-W12)が確認され、さらにその下部で径48cmを測る大型の曲物(図38)が出土した。大型曲物の下端は井戸枠の設置面とほぼ同じ高さである標高-0.892mで、井戸枠の設置にあわせて枠内中央に置かれたと思われる。小形の曲物は下端が曲物1の上端に近接する高さでの出土であり、井戸廃絶時にその場所に残されていたものと考えられる。

埋土は井戸枠の外側を5層、内側を17層に分けることができる。井戸枠の木材が粘土化している部分は混入物のほとんどない灰色粘土である。枠外の埋土は淡黄灰褐色～灰褐色の砂質土・粘質土が主体となる。枠内の埋土は土質や含有物によって8群にまとめられ、埋没過程を復元することができる。1群を14～17層、2群を13層、3群を12層、4群を10・11層、5群を8・9層、6群を5～7層、7群を3・4層、8群を1・2層とする。井戸の埋没においては、まず標高0.15mまでが暗灰色の粘土を主体とする土で埋められる(1群)。その中でも最下層にあたる17層の上面では南東隅で正位置に置かれた完形の小皿(図40-55)が出土した。埋め戻しの際の儀礼

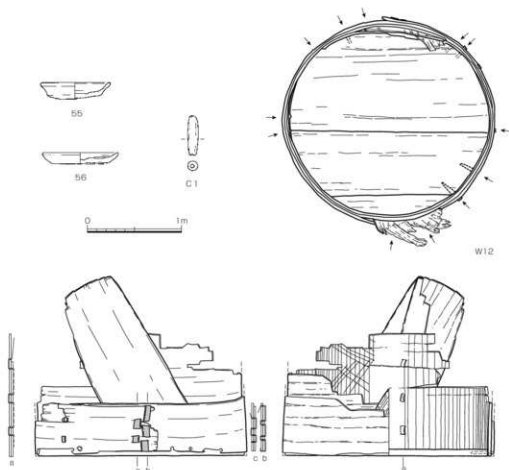


図37 井戸3出土土器・土製品・木製品(縮尺1/4)

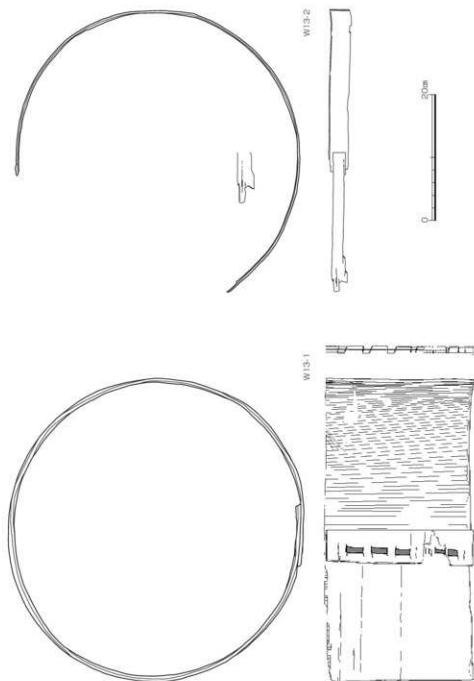


図38 井戸3出土木製品② (縮尺1/6)



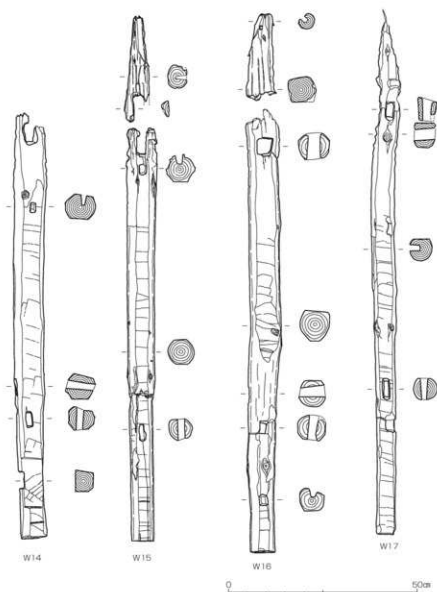


図39 井戸3出土木製品③(縮尺1/10)

的な行為であると考えられる。1群の上面は井戸枠の上段横桟が埋まりきる高さにあたっており、ここまでが一つの単位になっていたものと思われる。この上には混じりのない灰色粘土層(2群:13層)、やや砂を含む灰褐色粘質土(3群:12層)が堆積している。3群は中央がくぼんでおり、そこを埋めるように4群が確認される(10・11層)。4群はマンガンを他層よりも多く含んでいる。これより上部は明黄灰色砂質土を主体とする層と炭層が互層の状態で堆積している。5群(8・9層)・7群(3・4層)が前者に、6群(5～7層)・8群(1・2層)が後者にあたる。6群は混じりのない炭の純層(7層)が最下部で確認されているのに対し、5・6層は含有物が少なからず認められ、5層は特に淡黄白色砂質土ブロックの含有が顕著である。1・2層もわずかながら炭以外の含有物が認められる。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、土師質の杯、皿、鍋、須恵器などがある。吉備系土師質土器碗は内外面にミガキが確認されるが、密に施されたものではない。鍋やカマドは全体に厚く煤が付着している。木器は曲物2

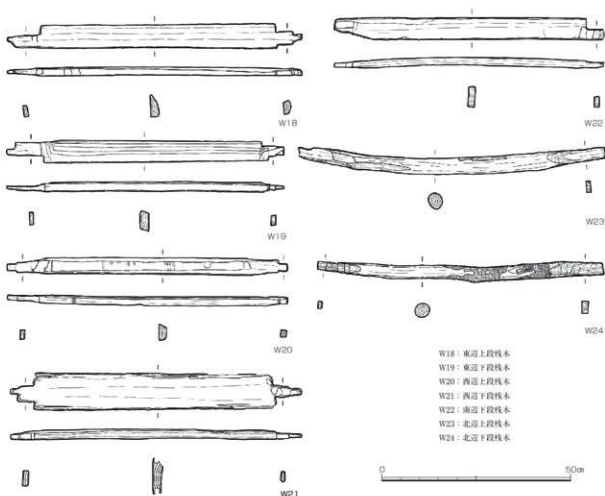


図40 井戸3出土木製品④(縮尺1/10)

点、井戸枠隅柱4点、井戸枠枕木7点を図化した。その他に井戸枠枕木1点(破損により図化不能)、井戸枠側板(薄板)84点(うち、小片を除く74点を樹種同定)、竹破片などが出土している。

本井戸の埋没時期は出土遺物から12世紀末～13世紀初頭であると考えられる。

#### 井戸4 (図41・42、図版13)

BG61区で確認された。上部を溝4によって大きく削平されており、本来の掘削面は明らかではない。検出面の標高は最高所で0.8mを測る。底面は湧水点まで掘削がおよんでおり、標高は-0.83mである。本来の深さは1.65m程度と考えられる。

平面形は検出面、底面ともに円形である。検出面は径1.1m、底面は径0.74mを測る。二段掘り状を呈しており、標高0.1m付近に段が設けられる。段より上はオーバーハングしており、検出面よりも下がった位置のほうが径がやや大きくなっている。段よりも下はほぼ垂直に掘り込まれている。

埋土は15層に分けられるが、その特徴から4群にまとめることができる。1群(13～15層)は暗灰色粘土を主体とするもので、粘性が強い。この上には混じりの多い黒色土層の堆積が認められる(2群:9～12層)。各層は灰色粘質土ブロックや有機物(木材)、土器の入り方に違いがみられるが、いずれも黒色で粘りのある砂質土が主体となる。2群の下面は段から派生しており、埋土の転換点となっている。黒色土層は井戸の埋没に伴う火を用いた行為によって堆積した層と考えられる。黒色土層を覆うように灰色粘質土が確認され(3群:7・8層)、さ

らに灰色粘質土ブロックの含有が顕著な黄灰色粘質土で埋め戻される（4群：1～6層）。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、須恵器の播鉢、土師質の鍋、甕などがある。ほとんどが小破片であり、完形に復元できるような遺物はなかった。吉備系土師質土器碗は底部を欠くが、径が小さく、器高が浅いという特徴をもつ（図42-57）。木器は板材が1点出土している。

本井戸の埋没時期は出土遺物の特徴から13世紀後半と考えられる。

#### 井戸5（図43・44、図版14・28）

BG62区で確認された。検出面はく5c層>で、標高は最高所で1.180mである。底面の標高は-1.112mであり、検出面からの深さは2.292mである。平面形は掘削面、底面ともに円形で、前者は2.12m×1.79mの楕円形、後者は0.64m×0.7mのほぼ正円形である。

掘削中に標高0m以下の大部分が崩落したため、掘り方の形状や断面を掘削面から底面まで通して記録することはできなかった。掘り方の形状は標高0m付近に段をもつ二段掘りである。また標高0.7～0.8mよりも上位は逆ハ字状に開く。埋土は15層に分けられる。12～15層は暗灰色系の粘土で、特に粘性の強い14層はほとんど含有物がなく、他は多少なりとも有機物（木質）が含まれている。10・11

層は灰褐色系の粘質土で、10層は特に灰色粘質土の割合が高い。12層上面では須恵器をはじめとした遺物が水平な状態でまぎって出土しており、ここに埋戻しの一つの単位があったことが考えられる。また崩落した部分からは底部を欠く土師質鍋（図44-62）と口縁部を欠く須恵器の壺（図44-63）が出土している。原位置は11層中であつたと考えられる。出土状況は特殊で、後者の上部に前者が天地逆の状態と被せられて置かれていた可能性が高い。9層は10層を覆う淡灰褐色砂質土である。6～8層の下面は9・10層を挟むような状況呈しており、特に7・8層の埋土は淡灰色系の粘質土で、他の土層とは一線を画す。3～5層は茶褐色系砂質土、1・2層は灰色系の砂質土である。

出土遺物は豊富だが、多くは11層～12層上面で出土している。前述の土師質鍋、須恵器壺（11層）に加え、須恵器の大甕（12層上面）、吉備系土師質土器碗、東播系の須恵器播鉢などがある。吉備系土師質土器碗は内外面にミガキを有する個体があるが、ミガキが内面のみのもみられる。東播系播鉢は口縁部に向かつての湾曲が弱

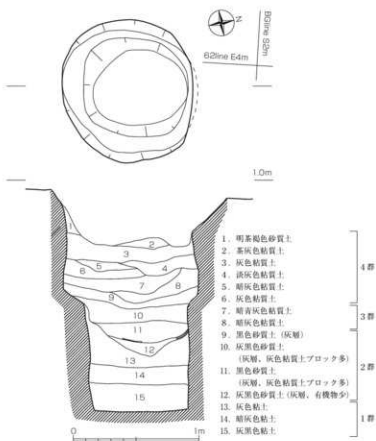


図41 井戸4平・断面（縮尺1/30）

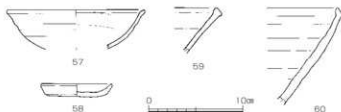


図42 井戸4出土遺物（縮尺1/4）

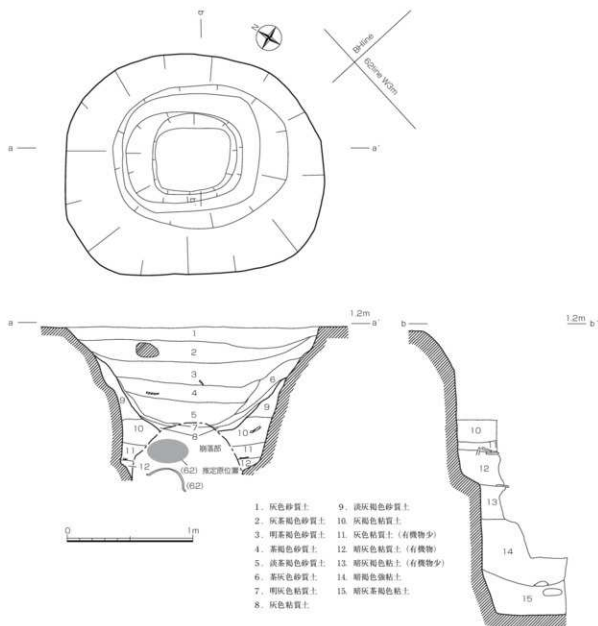


図43 井戸5平・断面 (縮尺1/30)

く直線的になる傾向がみられる。木器は下駄2点を図化した。

本井戸の埋没時期は出土遺物から12世紀中葉に近い時期であると考えられる。

#### 井戸6 (図45・46、図版15・28)

BF64区で確認された。南北方向の攪乱によって上部を破壊されている。検出面の標高は0.622mで、底面の標高は-0.59mである。検出面からの深さは1.212mを測る。平面形は円形で、検出面は1.45m×1.4m、底面は1.15m×1.08mを測り、いずれもほぼ正円形をなす。断面形は箱形で検出面から底面までは垂直に掘り込まれる。

埋土は4層に分けられる。最下層の4層は暗灰色粘土である。3層は暗灰色粘質土で、掘り方内の北寄りでは土師質鍋一個体分が出土した。鍋は3層下面から約10cm上で出土した (図46-68：標高0m付近)。三足鍋だが、

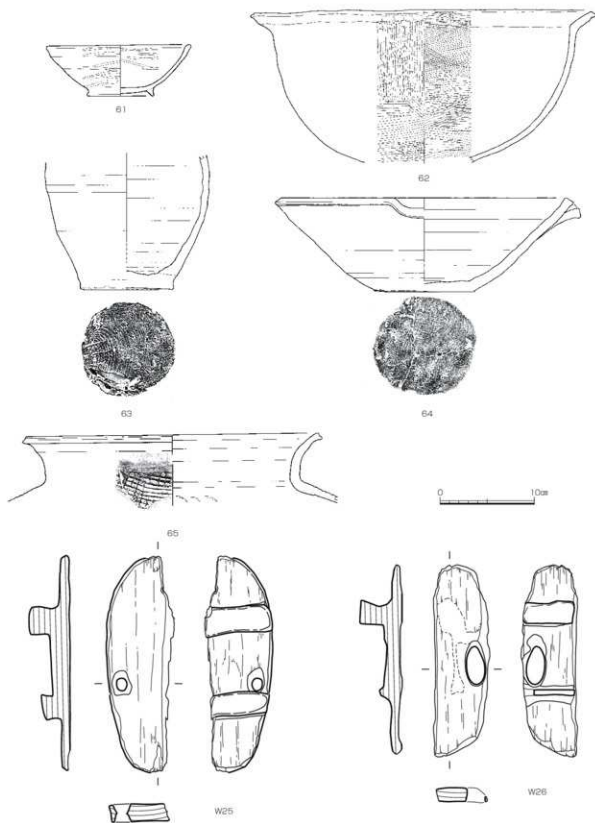


図44 井戸5出土遺物 (縮尺1/4)

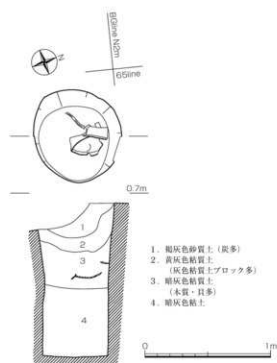


図45 井戸6平・断面 (縮尺1/30)

脚部は一本が欠損している。2層は黄灰色粘質土で黄褐色・灰色粘質土ブロックを顕著に含む。2層では完形の土師質皿(図46-67)が底を斜め上に向けた状態で出土した。1層は褐色灰色砂質土で、炭化物を顕著に含んでいる。

出土遺物は少ない。前述の土師質皿と土師質三足鍋が完形の状態であったが、他は破片がわずかに出土したのみである。三足鍋は口径29.7cm、深さ13.9cmと小型化で、口縁部の断面形態は一般的な「く」字状ではなく、段を有するものである。瓦質鍋の影響を受けていると考えられる。

本井戸の埋没時期は鍋の形態から13世紀後半～末であると考えられる。

## b. 土坑

### 土坑2 (図47・48、図版16・29)

BG62区で確認された。検出面は<5c層>で、標高は1.176m、底面の標高は0.85mである。検出面からの深さは約0.3mと浅い。平面形はL字形に近い不整形なもので、井戸5の北東部分の弧に沿うような形態をなしている。両者に切り合いはないが、何らかの関連があったと考えられる。

断面形は浅い碗形を呈する。埋土は9層に分けられ、特に炭化物の含有状況が目される。土坑底面に接する最下層の8・9層は炭化物などの含有物をほとんど含まない層で、土坑の埋め戻しに伴う第1段階の埋土とも考

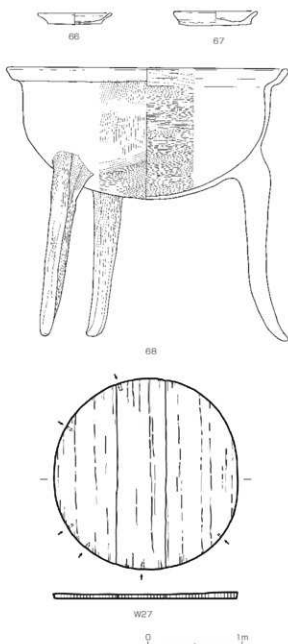
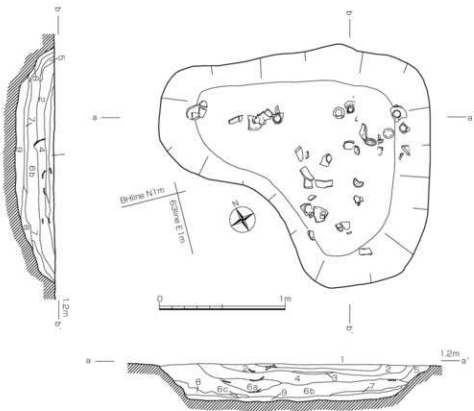


図46 井戸6出土遺物 (縮尺1/4)



- |                   |                        |           |
|-------------------|------------------------|-----------|
| 1. 青灰色砂質土         | 5. 灰色砂質土 (青灰色砂質土ブロック多) | 7. 暗灰色砂質土 |
| 2. 暗青灰色砂質土        | 6 a. 黒褐色砂質土 (炭多)       | 8. 灰色砂質土  |
| 3. 黒色砂質土 (炭多)     | 6 b. 暗灰色砂質土 (炭・土多)     | 9. 茶褐色砂質土 |
| 4. 暗青灰色砂質土 (炭・土多) | 6 c. 灰茶褐色砂質土 (炭多)      |           |

図47 土坑2平・断面 (縮尺1/30)

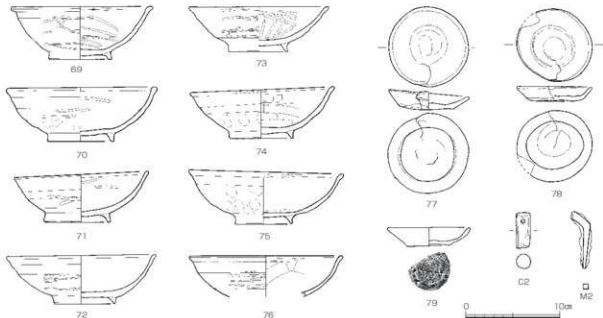


図48 土坑2出土遺物 (縮尺1/4)

えられる。この上部には炭化物を含有する土層が堆積する。7層は炭化物を含む層で粘質土ブロックの含有も8・9層に比べて多い。6層は本土坑で最も多く炭化物を含む層で、粘質土ブロックや灰状の砂質土も顕著に含まれている。東西断面（a-a'断面）西側では特に炭化物が集中する部分が見られ（6a層）、逆に下部には炭化物などの含有物が6層中では比較的少ない部分（6c層）もある。4層は6層と同様に炭化物が多く含まれており、粘質土ブロックや灰状の砂質土の含有も顕著である。完形あるいは一部が欠けたのみ土器は4・6層に含まれるが、特に6層に多い。土坑中央では4層の上部にさらに炭化物の含有が多い3層が堆積している。2層は炭化物の含有がそれ以下よりも少なくなり、1層ではほとんど含まれなくなる。

遺物は4・6層からの出土が顕著で、次いで1・2層でも出土している。炭層には焼土の塊が含まれているが、本土坑内では燃焼作業に関する痕跡は認められないことから、炭層の由来は別の場所における被熱行為にあり、本土坑はその後の片づけ行為に関連するものとも考えることもできるだろう。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、土師質皿、須臾器、甕、土鍾、鉄釘がある。吉備系土師質土器碗は内外面にミガキが施されているものと、内面または外面のミガキが省略されているものが見られ、前者のミガキの密度は低い。皿には粘土の接合痕が明瞭に観察されるものがあり（図48-77・78）、糸切りのものも含まれている（図48-79）。

以上から本土坑の埋没時期は12世紀後半でも中葉に近いと考えられる。

#### 土坑3（図49）

BI60区で確認された。検出面は<5c層>で、標高は1.059mである。底面の標高は0.55mで、検出面からの深さは0.509mである。上面・底面の平面形は円形で、上面は径0.96m、底面は0.31m×0.39mを測る。

断面形は逆台形だが、西側は二段掘り状を呈する。埋土は4層に分けることができる。下半の3・4層は茶褐色系の砂質土、上半の1・2層は灰色系の砂質土で、その差は明瞭である。1～3層には焼土が含まれ、2層からは土器が出土している。

出土遺物には吉備系土師質土器碗や土師質鍋があるが、いずれも

小片で、時期を確認できるものはなかった。

本遺構の時期は明確に難しいが、検出面や出土遺物に近世以降の陶磁器を含まないことから、中世の中でおさまる可能性が高い。

### c. 溝・土手状遺構

#### 溝4・5・土手状遺構

BE59からBH61区にかけて展開する遺構群で、相互に関連性・切合い関係をもって構築・掘削されている。まずこれらと土層との関係や切り合い関係についてまとめ、各遺構の詳細について説明する。

土手状遺構は造成土除去段階ですでに確認されていた。61ライン付近を南北に走る断面台形状の高まりである。東側には方向を同じくする溝5が掘削されている。本溝は<3層>によって覆われていることが確認でき、検出面は<5c層>である。溝5の西側立ち上がりは土手状遺構の東斜面と同一であり、両者は一体のものであった

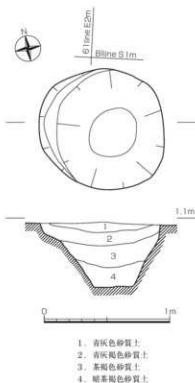


図49 土坑3平・断面（縮尺1/30）



と考えられる。

溝5の東側では溝4が確認された。溝4によって土地は方形に区切られる。その方向軸は鹿田構内座標と一致する。コーナー部分は溝5に切られている。溝4と土手状遺構は切り合っていないため前後関係を明確にし難いが、溝4→溝5という切り合いと溝5と土手状遺構が一体のものであったと考えられることから、これらの遺構

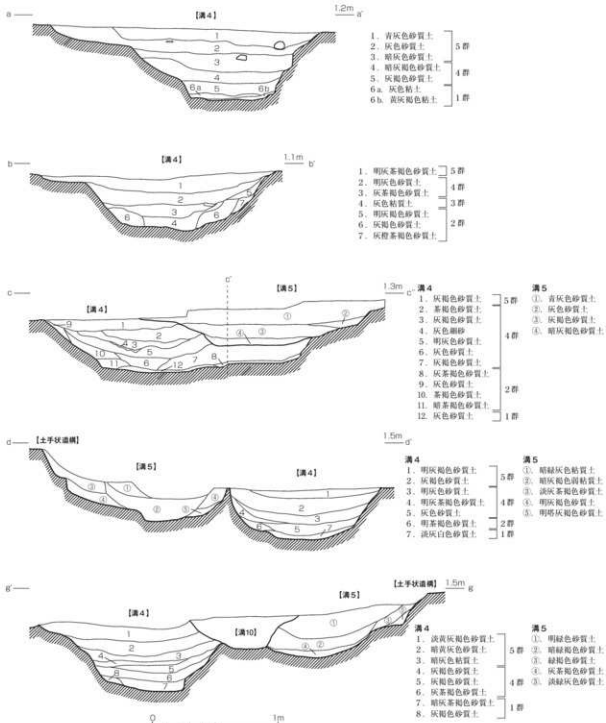


図50 溝4・5断面 (縮尺1/30)

では溝4が最も古く考えられる。

#### 溝4 (図50・51、図版17～19)

BG57～BK61区で検出された。BG61区ではほぼ直角に屈曲する。調査区南壁では61ラインの東3m、屈曲部は61ラインの東3m・BFラインの南3.5m、東壁ではBFラインの南3.5mに位置する。調査区内では南北方向20.2m、東西方向18mを確認した。屈曲部の上半は溝5に切られており失われている。検出面は<5c層>で、平面形をより明確にするために、一部<5d層>まで下げて検出しているところもある。検出面の標高は1.13m、底面の標高は東西方向が0.51～0.56m、南北方向が0.66～0.73mである。屈曲部を境に掘削深度が異なっており、東西方向のほうが10～20cm程度深い。

断面形は逆台形を基本とするが、東西方向の北辺と南北方向の西辺には浅いテラス状の平坦面を有する。特に東西方向で明瞭に確認された。そのため溝幅は東西方向のほうが広がる。溝幅は東西方向が1.86～2.15m、南北方向が1.3m前後である。

埋土は各断面で違いがみられるが、5群に分けることができる。1群は底から約5cm程度堆積した灰色～灰褐色系の土で、東西方向を中心に確認された。2群は底から立ち上がりにかけて認められる灰茶褐色系の砂質土で

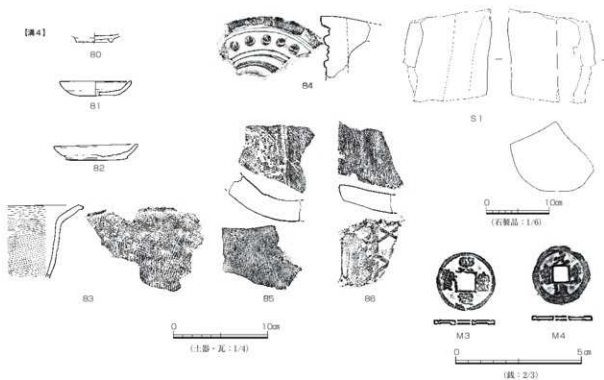


図51 溝4・5出土遺物 (縮尺1/4、1/6、2/3)

ある。3群は灰色粘質土で、a-a'断面を除く東西方向の断面でのみ確認された。4群は灰褐色砂質土、5群は灰色～青灰色を基調とする砂質土であり、両者は全体で共通した堆積状況を示す。東西方向において1・3群の堆積が顕著なのは、掘り方の深さとも関係しているのかもしれない。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、土師質皿、須恵器、瓦、石製品、銅銭2点などがある。特に瓦の出土量は鹿田遺跡で確認されている溝の中でも多く、瓦当が出土している点も注目される。吉備系土師質土器碗は小破片ばかりで、全形をうかがい知ることができる資料を欠く。石製品には被熱した加工礫がある。銅銭は宋銭で、1068年初鋳の熙寧元寶(M3)と、1078年初鋳の元豊通宝(M4)である。

本溝の埋没時期を限定することは難しいが、吉備系土師質土器碗はミガキを有するものはなく、いずれも高台の径が小さく退化したものである。後述の溝5を含めた遺物にも高台が退化した個体がほとんどを占める。

以上のことから本溝の埋没時期は14世紀初頭前後であると考えられる。

#### 溝5 (図50・51、図版17～19)

BG～BK61区で検出された。南端は調査区南壁で62ラインの東0.5mで、BGラインの南1m以北は擾乱により破壊されている。この位置では溝幅が狭まっていくことから、この付近で取束する可能性もある。調査区内では長さ23.5mが確認された。平面的に確認できたほとんどで、上部に溝10が重複する。検出面は<5c層>である。西側の立ち上がりは土手状遺構の東斜面と同一であり、標高は西側で1.486m、東側で1.130mを測る。底面の標高は0.86m～0.95mで、北に向けて傾斜している。土手状遺構上からの深さは0.55m、東側の検出面からの深さは0.3m前後である。

断面形態は椀形を呈するが、土手状遺構側は段掘りになっている。幅はもっとも残りの良いところで1.47mを測る。埋土は各断面で概ね共通しており、下半は灰茶褐色系の砂質土、上半は青灰色～灰褐色系の砂質土である。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、土師質杯・皿などがある。吉備系土師質土器碗の底部は小型化・退化が進んだものである。出土遺物と、溝4を切っているということから、埋没時期は14世紀前葉とすることができる。

#### 土手状遺構 (図50・52、図版17・19)

BG61～BJ62区にかけて検出された。南端は調査区南壁で62ライン西約1m、北端は調査区北壁で61ライン西1mに位置し、わずかに湾曲しながら鹿田構内座標の62ラインをまたぐように走る。検出面の標高は1.5m前後で、下端の幅は最も残りのよいところで1.4mである。下部では<7層>が認められ、標高1mよりも上部がほぼ水平な盛土によって構築されている。盛土は約45度の角度で形成されており、斜面の東西には<2層>・<3b層>・<5a層>が堆積している。各層とも上面の標高は東側のほうが15cmほど高い。

盛土は4層に区分される。1・2層は淡灰褐色系の砂質土、3・4層は灰褐色系の砂質土である。各層から遺物が出土しており、吉備系土師質土器碗、土師質皿、土師質鍋、須恵器がある。吉備系土師質土器碗はいずれも径の浅いものである。

構築時期は、溝4を切る溝5と構造的に同一であると考えられることから、14世紀前葉ごろと考えられる。本遺構は近代まで踏襲される。

#### 溝6 (図53)

BJ・BK61区で確認され

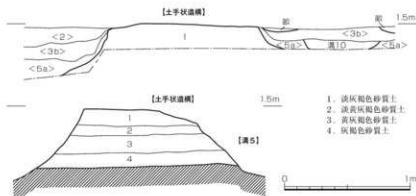
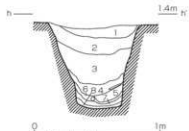


図52 土手状遺構断面 (縮尺1/30)

た。方向は鹿田座標の南北軸に並行しており、61ラインの西4mに位置する。BKラインの北約2mが北端で、そこから南へ5.2mの長さが検出された。検出面は<5c層>で、標高は1.33mである。底面の標高は0.65mで、深さは0.68mである。

断面形は底面から0.2mまでは箱形で、それよりも上部は逆ハ字形に開く。埋土は8層に分けられる。底面付近には2~3cmの厚さで灰茶褐色粘質土が堆積している。その上部の5~7層は灰色~灰茶褐色砂質土だが、6層には炭化物が顕著に含まれる。4層は灰褐色粘質土で、1~3層は青灰色系の砂質土である。底面付近の形状と最下層の粘質土の存在からは、帯水環境であったことも考えられる。



- 1. 灰茶褐色砂質土
- 2. 青灰茶褐色砂質土
- 3. 青灰色砂質土
- 4. 青灰色粘質土
- 5. 基灰色砂質土
- 6. 灰色砂質土(炭多)
- 7. 暗灰茶褐色砂質土
- 8. 灰茶褐色粘質土

図53 溝6断面(縮尺1/30)

出土遺物には吉備系土師質土器碗や壺などがあるが、いずれも小破片である。吉備系土師質土器碗の中には底部が退化したものもみられる。

溝の埋没時期は検出面と出土遺物から13~14世紀と考えられる。

溝7(図54・55、図版19)

BD60~BK67区で確認された、南北方向の溝である。調査区北壁から

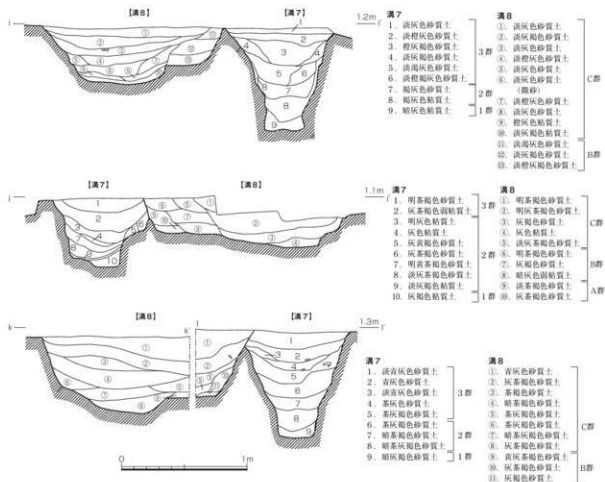


図54 溝7・8断面(縮尺1/30)

南壁までの広い範囲で確認された。後述する溝8に切られている。主軸は鹿田座標の南北ラインからわずかに東へ振っている。北端は66ラインの西2.8m、南端は68ラインの東3mにある。検出面は<5c層>で、標高は最も高いところで1.31mである。底面の標高は0.4～0.5mで、10cm程度の段が2ヶ所確認される。深さは最大で約0.8mである。

断面形は底面から0.2～0.3mまでは箱形で、それより上部は逆ハ字形に開く。埋土は下方から順に暗灰色～褐灰色の粘質土（1群）、灰褐色砂質土（2群）、灰色～緑灰色砂質土（3群）の3群に大別できる。1群の存在と底面付近の形状が箱形である点からは、帯水環境であった可能性が考えられる。

出土遺物は吉備系土師質土器碗、土師質鍋、須恵器が中心で、土師質皿・杯もみられる。吉備系土師質土器碗はミガキは内外面とも施されていないが、高台はそれほど退化しておらず、高さやシャープさを保っている。

溝の埋没時期は検出面と出土遺物から13世紀前半と考えられる。

#### 溝8（図54・55、図版19）

BD～BH66区で確認された南北方向の溝である。主軸は溝7と一致しているが、一部で溝7を切っている。北端は66ラインの西1.4mの位置に中心があり、南端は66ラインの西3.4mである。検出面は<5c層>で、標高は最高所で1.5mを測る。底面の標高は北壁が0.77m、南端付近が0.65mで、南に向かって標高が低くなる。深さは最大で0.73mである。

断面の観察から二度の掘り直しが確認され、東へと移動して掘られている。断面形はいずれも碗形であると考えられる。埋土は3段階に分けられ、土質はやや異なっている。最古段階（A群）は立ち上がり部分しか残存しておらず、淡灰褐色系砂質土の堆積が確認される。古段階（B群）は底面付近に灰色～暗灰色粘質土が堆積しており、帯水環境であったことも考えられる。新段階（C群）は下半が灰褐色系砂質土、上半が灰色～緑灰色砂質土である。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、土師質鍋、須恵器などがある。吉備系土師質土器碗の底部形態は溝7と大差ない。土師質鍋は径が小さく、器高が浅いのが特徴である。オリーブ色を呈する破片も出土している（99）。

埋没時期は溝7と大差ない13世紀前半であると考えられ、短期間の間に埋没と掘削が繰り返されたことを示唆している。

#### 溝9（図56・57、図版20・21・29）

BK67～68区で確認された、東西方向の溝である。溝7を切っている。確認された範囲が狭いため詳細な主軸方向は確認し難いが、BKラインの南0.5m付近を鹿田構内座標の東西方向に並行して走行していたと考えられる。検出面は<7層>上面だが、本来の掘削面は<5層>であったと考えられる。検出面の標高は最高所で0.923mで

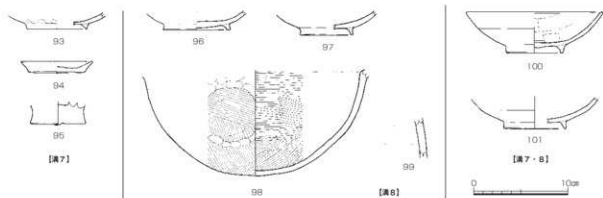


図55 溝7・8出土遺物（縮尺1/4）

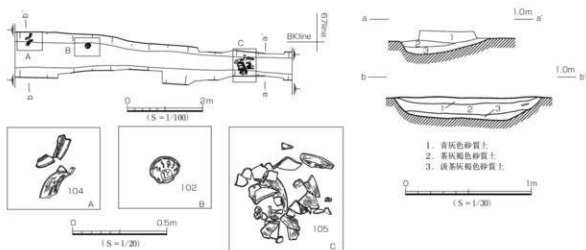


図56 溝9遺物出土状況・断面 (縮尺1/100, 1/20, 1/30)

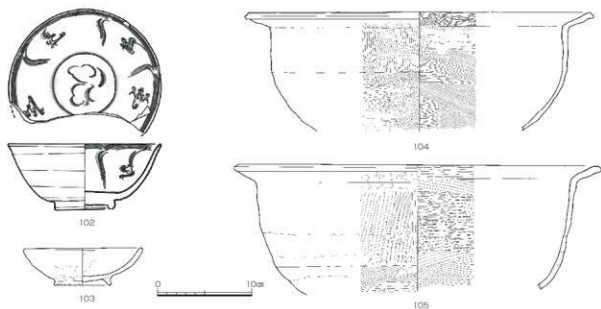


図57 溝9出土遺物 (縮尺1/4)

ある。底面の標高は0.62~0.72mで、西へ傾斜している。検出面からの深さは0.22mである。幅は最大で1.17mを測る。

遺物が3ヶ所に分かれて出土している。東端・西端では鍋が、西端から東へ1.9mの位置では青磁碗が出土した。東端の鍋は底部を欠くのみであり、破砕された状態であった。

断面形は碗形である。埋土は3層に分けられるが、いずれも灰色~灰褐色砂質土である。

出土遺物には吉備系土師質土器碗、土師質鍋、陶磁器がある。吉備系土師質土器碗は碗部が浅く、高台も均整を保っていない。陶磁器は大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4 b類である。

溝の埋没時期は出土遺物から13世紀後半と考えられる。

#### d. 畦畔

##### 畦畔1 (図58、図版21)

BJ・BK67区に位置する。ほぼ鹿田座標の南北ラインに並行しており、68ラインの西1.3mを南北方向に延びる。南壁から北へ7.4mの範囲で確認された。上面の標高は最高所で1.63mを測り、頂部から東西に斜面を有する。斜面には<2層>・<3層>・<5a>・<5c層>が堆積している。

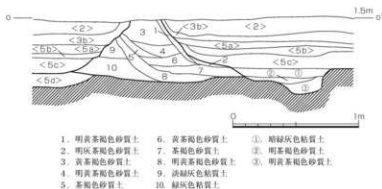


図58 畦畔1断面 (縮尺1/30)

ここで形成過程を考えるために、

南壁の<5層>および<6層>の堆積状況との関係を見てみよう。まず<6層>は畦畔の東端付近で段になっており、段より西側が標高1.1mであるのに対し、これより東側は標高0.95mと低い。段は<5層>形成によるものであり、西側には<5d層>が堆積している。このことから畦畔が作られる前はこの位置が地形の変換点であったことがわかる。そしてこの位置に盛土によって畦畔が形成される。9・10層が第1段階の畦畔であったと考えられ、西側斜面には5～8層が堆積している。後者を耕作土とすると、本来は東側斜面も同様な堆積があったと思われるが、畦畔の作り直しの際に削られて消失したと考えられる。その上部に第2段階の畦畔(3・4層)が作られ、1・2層もこの段階の畦畔を構成するものであろう。そして脇には<5c層>が堆積する。

出土遺物はわずかであるが、<5c層>の堆積がみられることから、13～14世紀に築かれたと考えられる。本畦畔は近代まで踏襲される。

#### e. ビット群 (図32)

<5c層>から<7層>において、79基のビットが検出された。このうち44基は<5d層>での検出であり、<5c層>で検出されたものも2基ある。<7層>以下で検出されたビットからも平安時代後半～鎌倉時代と考えられる吉備系土師質土器や小皿が出土しており、本来の掘りこみ面は<5c層>であった可能性が高い。分布は調査区中央の62～65ライン間に集中しており、ほぼすべてが土手状遺構の西側に位置する。径の平均は0.3m、最大で0.53mを測る。出土遺物には近世以降のものはみられず、井戸5出土遺物と接合関係が確認されたものもある。検出面と出土遺物からは総じて12～13世紀前後に形成されたものと考えられる。分布には規則性は看取されず、建物などを復元するのは困難である。しかし径0.1～0.3m程度の柱痕跡が確認されたビットもあり、屋敷地の区画を示す塚などに関する柱穴であった可能性も考えられる。

## 第5節 近世・近代の遺構・遺物

近世・近代の遺構・遺物は、<3層>～<5b層>で検出した(図64、図版22)。近世の遺構は土坑68基、溝4条、畦畔3条、近代の遺構は東西方向に並ぶ畝である。近世の遺構の多くは、後世の掘削が広範囲におよんでおり、本来の掘削面が失われているものも多いが、基本土層との関係をこの土坑・溝では<5a層>上面から掘削されるものが確認された。

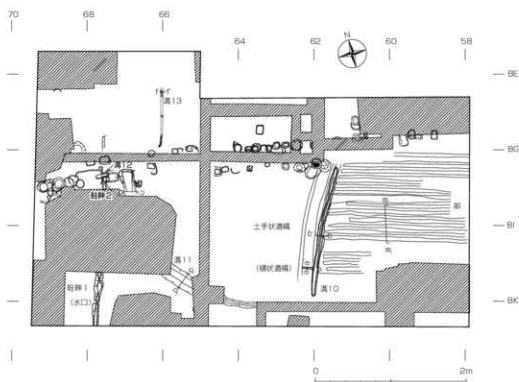


図59 近世～近代の遺構配置 (縮尺1/500)

### 1. 近世

近世に属する遺構のうち、土坑は調査区北半のBFラインに沿って、列状をなす65基の土坑群とやや離れた位置に単独で構築される2基がある。畦畔は、調査区中央東寄りの62ライン沿いで脇溝を伴う南北方向のもの、調査区南西の一角で水口を伴うもの、調査区西半中央のBF67・68区で東西方向のものを確認した。溝は、調査区北西で66ラインに沿う南北方向の溝1条、調査区西半中央～南に湾曲する溝1条がある。

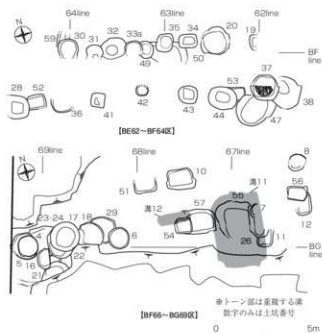


図60 近世の土坑配置 (縮尺1/200)

a. 土坑 (図60～67、表1・2、図版22・23)  
67基を検出した。基本土層との関係をのこす土坑6基(土坑30・33・67・68)はく5a層>上面から掘削されている。

これらの土坑を平面形に基づき、円形(A)／方形(B)に二大別、円形は正円(1)／楕円(2)／不整円(3)に三細別、方形は正方形(1)／長方形(2)に二細別する。

断面形は法面・底面が、直線的／湾曲を指標とし、法面が直線的なものほさらに、直立／傾



斜で分類した。これらの指標に基づき、底面が平らに構築されるものでは箱形(法面直立)・逆台形(法面傾斜)・椀形(法面湾曲)、底面が湾曲するものはU字形(法面直立)・ボウル形(法面傾斜・湾曲)に分類し、法面がオーバーハングし、底面が湾曲する1例については鉢形とした。

#### 分類

##### A1類(土坑4・6・8・15a・17・20・29~32・34・37・40・49)

平面形が正円となるもので、14基があり、土坑7・33a・68も本類である可能性が考えられる。平面規模は直径約0.9~1.6mである。断面形は箱形・逆台形・ボウル形・鉢形がみられるが、箱形・逆台形が多数を占めている。本類のうち、6基で木枠が確認され、また、断面観察でも直立する土層の単位を確認できるもの2例(土坑6・17)がある。こうしたものも本来は木枠を設置していたとみなせば、本調査地点の木枠設置例のほとんどが本類に属する。木枠の設置が土坑の平・断面形と有意な関係にあったことが推測される。

##### A2類(土坑12・16・19・22・44・46~48・64)

平面形が楕円形を呈するもので、9基があり、土坑21・65も本類である可能性が高い。平面規模は長軸長約1~1.8mである。断面形は箱形・逆台形・椀形・ボウル形で、法面や底面が湾曲するものが一定数存在する。木枠を有するものは無い。

##### A3類(土坑5・18・38)

平面形が不整形を呈するもので、3基があり、土坑36も本類である可能性が高い。平面規模は約1.2~1.4mである。断面形は箱形・逆台形・椀形・ボウル形がみられるが、単一の土坑でも直線的な法面と湾曲する法面が混在するものがある。木枠を有するものは無い。

##### B1類(9・14・15b・28・35・41~43・51・54・63)

平面形が正方形を呈するもので、11基があり、土坑61も本類である可能性が高い。平面規模は約0.7~1.3mで、平面形に基づく分類群のなかでは小形の一群である。断面形は箱形・逆台形・椀形・ボウル形を呈する。底面を平らに構築するものが多数を占める。土層断面に直立する土層の単位を有する1基(SK6)では、木枠を有する可能性もある。

##### B2類(土坑10・11・26・27・34・45・50・52・53・55~58・62・66)

平面形が長方形を呈するもので、15基がある。平面規模は約1.0~2.2mで、平面形に基づく分類群のなかでは大形の一群である。断面形は箱形・逆台形・ボウル形・U字形を呈する。逆台形・ボウル形のもの12基で、上方にむかって開く形状のものが多数を占める。木枠を有するものは無い。

**平面形・断面形の相関** A1類では法面を直線的に掘削する箱形・逆台形が16基中14基を占める。法面が湾曲するボウル形の断面形はA2類・B2類で約4~5割を占めている。規模は約1.2~2.2m以上、土坑群の中では中~大規模のもので、木枠の設置は認められない。B1類では底面を平らに構築する箱形・逆台形・椀形が11基中9基を占める。A1類・B1類では、平面形・断面形に高い相関性がある。特にA1類では木枠の設置との関係性を指摘することができ、土坑の平・断面形の差異は機能の違いを反映していると推測される。

**分布** 65基がBFラインに沿って東西に列状に分布し、2基が周辺に単独で散在する。調査区中央から東側までのBFライン沿いにみられる土坑空白域には東西方向の攪乱がある。しかし、周囲で確認した土坑底レベルより攪乱底レベルは高いため、本来この位置には土坑は構築されていなかったと考えられる。攪乱から外れた西側では空隙地を挟む2列が確認されており、東半でも本来は空隙地を挟む2列の土坑群であった可能性が高い。列状に分布する2列の土坑は、列中にも土坑空白域が認められ、いくつかのグループに分けることが可能であり、平面形に基づく分類に従って分布をみると、円形優勢群、方形優勢群に分離される。

列状分布のうち、68ライン以西、62~64ライン間の北側列、60~62ライン間の群、62ライン沿いの南北畦畔北端の一群では円形優勢、66~68ライン間、62~64ライン南側列、58~60ライン間の一群では方形優勢となる。

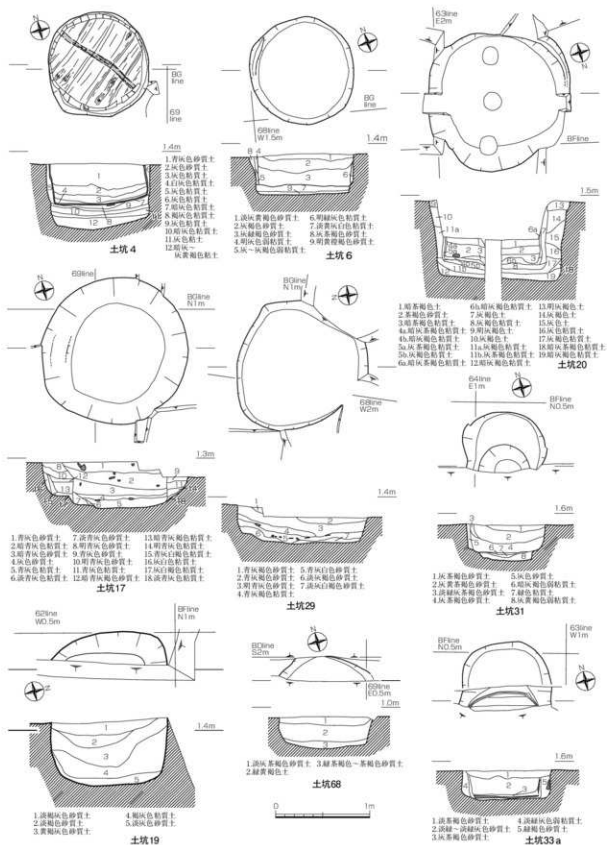


図61 近世の土坑A1類① (縮尺1/40)

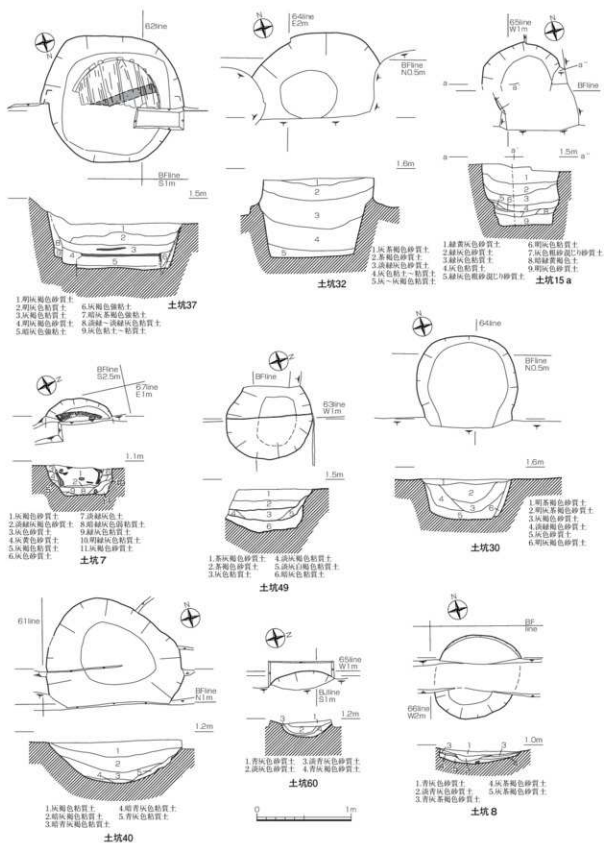


図2 近世の土坑 A 1 類② (縮尺1/40)

調査の記録

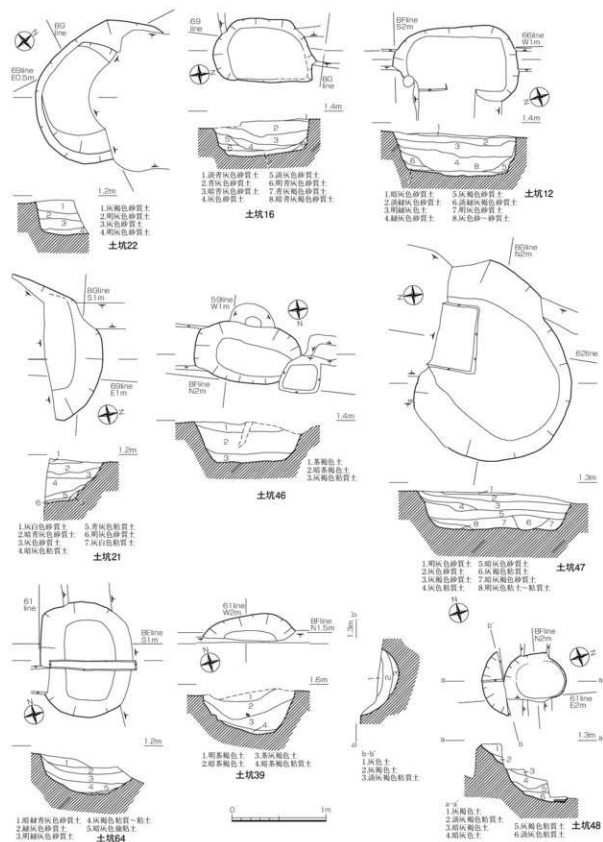


図63 近世の土坑 A 2 類 (縮尺1/40)

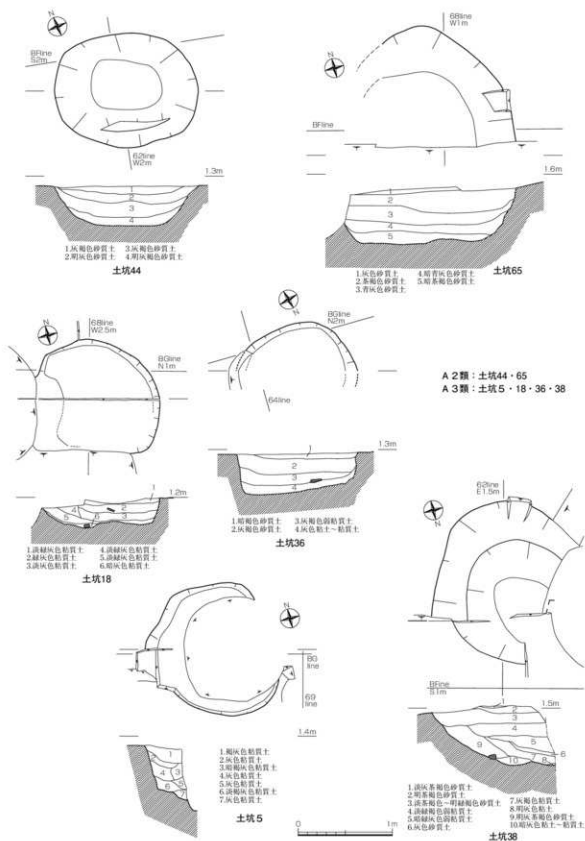


図64 近世の土坑A 2類、A 3類 (縮尺1/40)

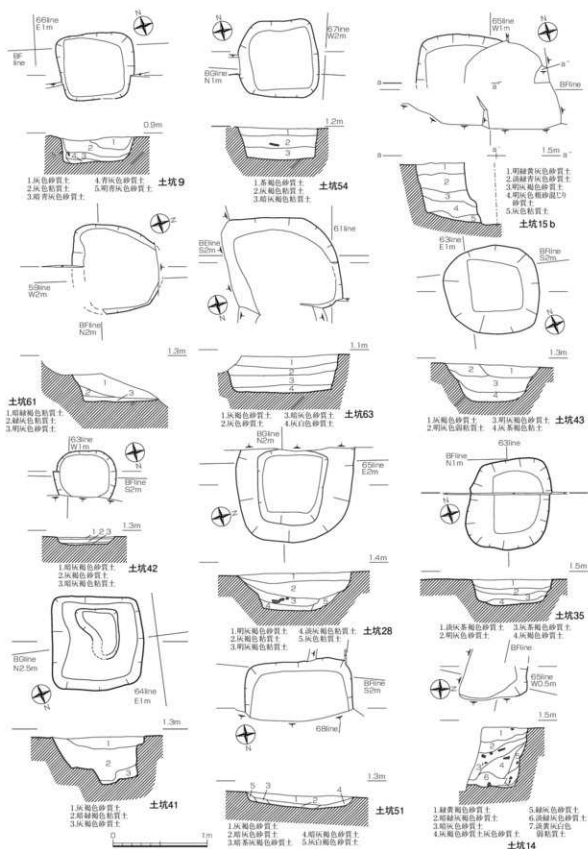


図65 近世の土坑B 1類 (縮尺1/40)

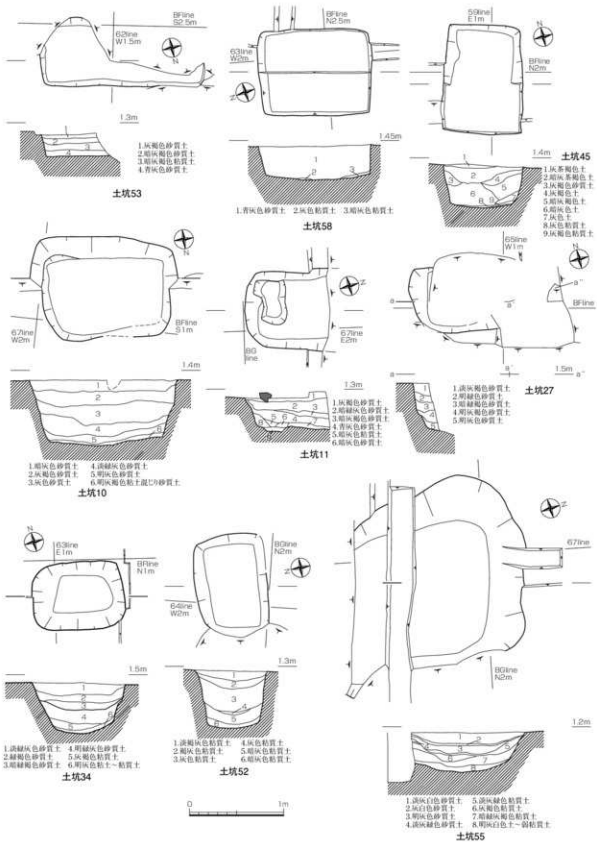


図66 近世の土坑B2類 (縮尺1/40)

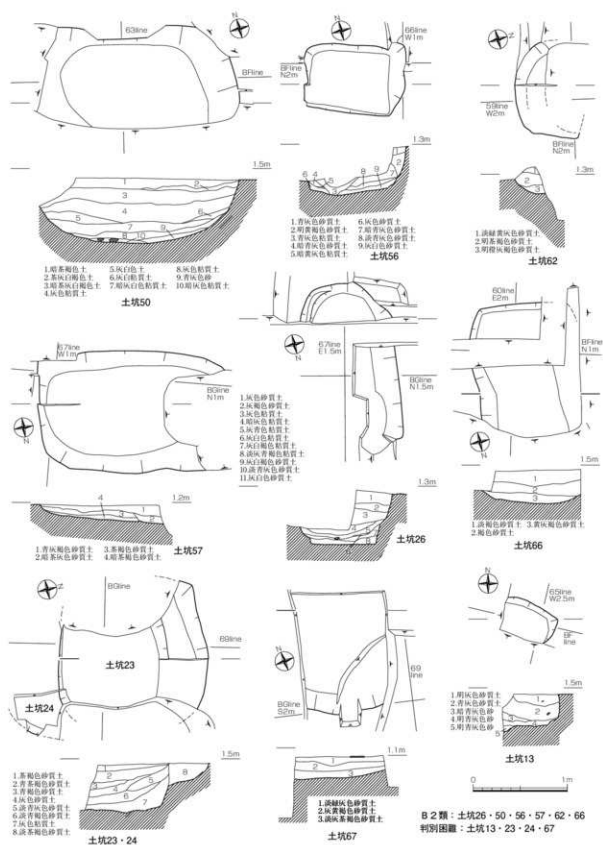


図67 近世の土坑B 2類、その他 (縮尺1/40)



表1 近世の土坑属性表

土坑	平面形		断面形		法面		底面		木枠		断面形	規模 (m)			底面標高 (m)	
	A		B		直線的 直立	凹曲	平	凹曲	段/ 乱れ	有		無	長さ	幅		深さ
	1	2	1	2												
土坑4	●				●		●	●			●	箱形	1.105	1.104	0.702	0.569
土坑5	●				●	●	●	●			●	(ボウル形)	1.415	1.41	0.585	0.724
土坑6	●				●		●	●			●	箱形	1.142	1.1	0.439	0.855
土坑7	●?				●		●	●			●	箱形/逆台形	(0.704)	(0.252)	0.528	0.779
土坑8	●				●		●	●			●	-	0.916	0.889	0.162	0.797
土坑9			●		●		●	●			●?	箱形/逆台形	0.837	0.722	0.285	0.574
土坑10				●	●		●	●			●	逆台形	1.567	1.307	0.695	0.6
土坑11				●	●		●	●			●	(逆台形)	(0.9)	0.875	0.427	0.847
土坑12		●			●		●	●			●	箱形/逆台形	1.326	(0.814)	0.472	0.827
土坑13					●		●	●			●	(箱形?)	(0.616)	(0.386)	0.394	1.039
土坑14				●	●		●	●			●	(逆台形)	(0.726)	(0.318)	0.64	0.788
土坑15a	●				●		●	●			●	二段・逆台形?	(0.822)	(0.733)	0.609	0.767
土坑15b				●	●		●	●			●	(逆台形)	(0.914)	(0.519)	0.634	0.792
土坑16					●		●	●			●	逆台形	1.098	0.681	0.4	0.919
土坑17	●				●		●	●			●	板形	1.554	1.549	0.496	0.766
土坑18					●		●	●			●	ボウル形/逆台形?	(1.32)	(1.213)	0.32	0.88
土坑19					●		●	●			●	じ字形	(0.812)	(0.234)	0.475	1.012
土坑20					●		●	●			●	箱形	1.503	1.461	0.858	0.591
土坑21		●?			●		●	●			●	(逆台形)	(1.563)	(0.964)	0.48	0.678
土坑22		●			●		●	●			●	(箱形)	(1.519)	(1.362)	0.273	0.781
土坑23					●		●	●			●	(二段・箱形/ボウル形)	1.584	(1.110)	0.251	0.928
土坑24												-	(0.531)	-	-	-
土坑25												-	(0.642)	-	(0.466)	(0.734)
土坑26				●	●		●	●			●	(二段・逆台形)	(1.827)	(1.088)	0.579	0.681
土坑27				●	●		●	●			●	(二段・逆台形)	(0.938)	0.693	0.5	0.902
土坑28				●	●		●	●			●	逆台形/ボウル形	1.262	(1.006)	0.409	0.889
土坑29	●				●		●	●			●	箱形/逆台形	1.386	1.386	0.409	0.901
土坑30	●				●		●	●			●	逆台形	1.07	(0.977)	0.434	1.041
土坑31	●				●		●	●			●	二段・箱形	0.898	(0.641)	0.292	1.096
土坑32	●				●		●	●			●	二段・逆台形	(1.359)	(0.915)	0.829	0.637
土坑33a	●?				●		●	●			●	箱形	(0.518)	0.951	-	-
土坑33b					●		●	●			●	箱形	(0.978)	(0.273)	0.313	1.187
土坑34				●	●		●	●			●	ボウル形	0.995	0.737	0.541	0.876
土坑35					●		●	●			●	逆台形	0.981	0.914	0.278	1.136
土坑36			●?		●		●	●			●	箱形/板形	(1.185)	(0.516)	0.448	0.821
土坑37	●				●		●	●			●	逆台形	1.335	(1.337)	0.619	0.74
土坑38				●	●		●	●			●	ボウル形	(1.379)	(1.725)	0.632	0.896
土坑39					●		●	●			●	ボウル形	(0.969)	(0.297)	0.481	1.909
土坑40					●		●	●			●	ボウル形	1.656	(1.144)	0.46	0.655
土坑41	●				●		●	●			●	二段・逆台形/箱形	0.751	0.724	0.281	0.86
土坑42				●	●		●	●			●	(箱形?)	0.67	(0.508)	0.854	1.144
土坑43				●	●		●	●			●	板形	1.017	0.94	0.407	0.826
土坑44				●	●		●	●			●	板形	1.522	1.213	0.429	0.772
土坑45				●	●		●	●			●	逆台形	1.168	0.982	0.467	0.87
土坑46				●	●		●	●			●	逆台形	(1.134)	0.667	0.436	0.95
土坑47				●	●		●	●			●	逆台形	(1.852)	(1.811)	0.416	0.799
土坑48					●		●	●			●	ボウル形	(0.904)	(0.682)	0.618	0.645
土坑49	●				●		●	●			●	鉢形orボウル形	0.915	0.78	0.467	0.935
土坑50					●		●	●			●	ボウル形	(2.147)	(1.099)	0.693	0.708
土坑51				●?	●		●	●			●	-	1.133	0.68	0.179	1.005
土坑52					●		●	●			●	じ字形	(1.102)	0.797	0.614	0.645
土坑53					●		●	●			●	(逆台形)	(1.75)	0.739	0.543	0.947
土坑54				●	●		●	●			●	逆台形/箱形	0.899	0.834	0.547	0.844
土坑55				●	●		●	●			●	ボウル形	(2.302)	(1.93)	0.423	0.716
土坑56					●		●	●			●	ボウル形	(1.074)	0.779	0.516	0.759
土坑57					●		●	●			●	-	(1.985)	1.298	0.2	0.977
土坑58					●		●	●			●	箱形/逆台形	1.221	0.923	0.376	1.032
土坑59					●		●	●			●	-	(0.693)	(0.635)	0.147	1.204
土坑60					●		●	●			●	-	(0.676)	(0.204)	0.184	1.004
土坑61				●?	●		●	●			●	(逆台形)	0.954	(0.916)	0.301	0.809
土坑62					●?		●	●			●	(ボウル形?)	(1.019)	(0.684)	0.285	1.003
土坑63				●	●		●	●			●	逆台形	(1.285)	(1.026)	0.407	0.642
土坑64					●		●	●			●	ボウル形	1.229	(0.982)	0.428	0.685
土坑65	●			●?	●		●	●			●	板形	(1.419)	(1.286)	0.612	0.855
土坑66					●		●	●			●	-	(1.42)	(1.188)	0.364	1.091
土坑67					●		●	●			●	板形	1.989	(1.029)	0.55	0.77
土坑68	●?				●		●	●			●	逆台形/板形	(0.968)	(0.266)	0.34	0.561

表2 近世の土坑平面・断面相関表

断面形	平面形				
	A1	A2	A3	B1	B2
楕形	1・3・17・28・30a	19			
逆台形	27・29・34・60	13・18・44・45		12b・32・49・63・65	7・23・43・51
ボウル形	37・47	46・66	2・35	31	48・53・54・64
U字形					30
楕形		41		39・40	

**切り合い関係** 土坑間の切り合いについて、切り合い関係が認められるのは13組である。平面形の分類に基づき、分類不能→A類もしくはB類の切り合い関係を除いた切り合いパターンをみると、①A類→A類、②B類→A類、③B類→B類が確認された。A類・B類間で確認される切り合い関係は、いずれもA類がB類を切っており、本調査区では、両者は新古の関係にあると推定される。

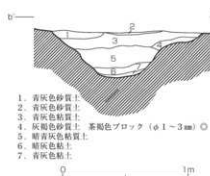


図68 溝10断面 (縮尺1/30)

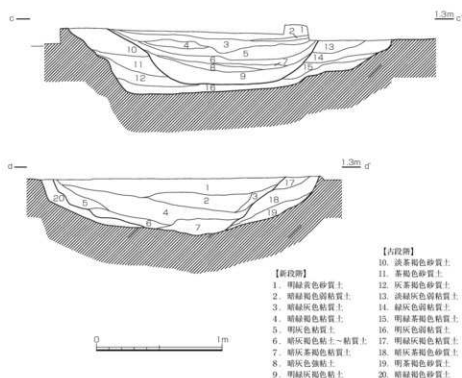


図69 溝11断面 (縮尺1/30)

**出土遺物** 遺物は約3/4にあたる50基から近世陶磁器類が出土した。肥前陶磁を主体とするが、小片が多数を占める。また青銅製の煙管も出土している。土坑の時期は出土遺物・土層から近世に属する。

## b. 溝

### 溝10 (図68、図版23)

BF61～B162区にかけて位置する。南北方向の土手状遺構の東側に並行して掘削される。<5 a 層>で検出した。残存する長さ約17.3m、幅1.18m、深さ0.36m、検出面の標高は1.29mである。底面の標高は北で1.07m、南で1.21mであり、南に向けて傾斜している。断面はボウル形で、東側の掘り方は二段となる。

埋土は7層に分層される。1・2・4層は砂質土、3・5～7層は粘土・粘質土層である。

溝の両端は弧状に湾曲して立ち上がりながら収束するため、通水を目的とした溝ではなく、畦畔への地下水の逸水を目的とした溝と

考えられる。

遺物は近世陶磁器片約20片、近世瓦2片、備前焼約10片のほか、中世土師質土器小片、須恵質土器小片多数を含む。時期は、検出面と出土遺物から近世と考えられる。

#### 溝11 (図69、図版24)

BF66・67区、B165区に位置する。〈5 a層〉で検出した。検出面の標高は調査区中央南北断面で1.28m、B165区で1.21~1.24m、BF66・67区で1.14~1.18m、底面の標高は前者で0.78m、後者で0.72mである。

調査区中央付近の攪乱により各区で検出した溝は分断されており、平面的な接続状況は溝の位置、規模、溝各部の標高、検出面、断面の構造、埋土の特徴を手掛かりに推定した。

各位置の溝で確認された断面形および埋土の特徴を抽出すると、BF66・67区・B165区の断面では溝の中心部に再掘削の痕跡が確認され、溝の構築に新古の段階があったことが共通する。新段階の埋土は最下層に粘土が堆積すること、BF66・67区断面では薄い砂質土層を挟むが、粘土層の上位に厚めの粘質土層、さらに上位にはほぼ全体を覆う砂質土層が一定の厚さで堆積する層序が共通する。

これらの溝を位置、断面構造、埋土の特徴から、同一のものと考え、弧状に走行することとなる。ただしBJ63区では攪乱の中に入って行ってしまいうため、以東の方向は不明とせざるを得ない。

遺物は古段階の埋土から中世の土師質土器小片約30片、新段階の埋土から近世陶磁器小片、近世瓦片(平瓦・丸瓦)、中世の土師質土器小片少量が出土した。古段階の埋土に近世に降る遺物を含まないこと、掘削面の直上に近代に属する〈3層〉が堆積することから、遺構の時期について、〈3層〉以前の近世段階に廃絶されたと考えられる。

#### 溝12 (図70)

BF67区に位置する。〈5 a層〉で検出した。検出面の標高は1.14~1.17mで、底面の標高は東で1.07m、西で1.1mである。土坑57を切り、土坑54に切られる。残存する規模は長さ約1.8m、幅0.6m、深さ0.08mである。断面形は皿形で、埋土は2層に細分される。

遺物は出土していない。時期は近世土坑との切り合い関係から、近世の範疇でとらえられる。

#### 溝13 (図71、図版24)

BD・BE66区に位置する。〈5 a層〉で検出した。北壁では〈4層〉に覆われている。検出面の標高は1.25~1.34m、底面の標高は南で1.18、北で1.21mである。

南北方向に掘削された溝で、検出した長さ約7.7m、幅0.2m、深さ0.12mである。平瓦を差し立て、壁面を擁護する。溝内には側面の瓦に加え、複数枚の瓦を差し入れて空隙を充填している。さらに丸瓦を用いた箇所では、円弧の外側を溝の中心に向け、背合わせで立て並べていた。

断面形は箱形で、埋土は3層に細分される。1層は灰色粘土で、瓦を包含する層である。2層は灰茶褐色粘質土で、側縁に差し並べた瓦の裏込めと考えられる。3層は暗灰茶褐色

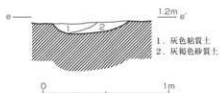


図70 溝12断面 (縮尺1/30)

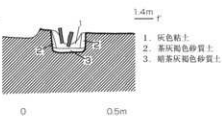
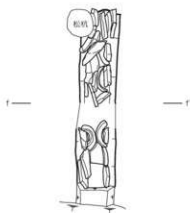


図71 溝13平・断面 (縮尺1/20)

砂質土でブロックを多く含む。底面を整え、瓦を差し立てるための置土と考えられる。箱形の小規模な掘り方内に多量の瓦を差し入れる構造から、暗渠と考えられる。

遺物は溝内に多量に差し込まれた瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦）1箱、近世陶磁器小片約10片が出土した。時期は出土遺物から近世と考えられる。

### c. 土手状遺構（図52・72、図版24）

BF61～BJ62区にかけて位置する。中世段階に作られたものが近代まで踏襲される。

北端を近世土坑群に切られる。東側には畦畔に沿って後述の溝10が掘削される。AU61区では、畦畔上を東西方向に横断する樋状遺構が検出された。

**樋状遺構** BI62区に位置する。南北方向の畦畔を横断して、東西方向に掘削される。検出標高は約1.5m、規模は長さ約1.2m、幅0.18m、断面形は箱形で、深さは約0.1mである。底面の標高は東で1.4m、西で1.39mであり、

東から西にわずかに傾斜する。後述する土手状遺構と並行して掘削された溝10の検出面の標高は約1.3mで、本遺構とは接続しないと考えられる。

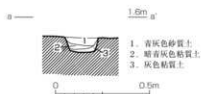


図72 土手状遺構樋状遺構部分断面（縮尺1/20）

埋土は3層に細分される。1層は径3～5cmのブロックを多く含む青灰色砂質土で、人為的な埋め土と考えられる。2層は下面付近に灰色砂が入る暗青灰色粘質土で、流入土と考えられる。3層は木質を含む灰色粘質土で、樋の木質部分が粘土化したものと考えられる。

樋状遺構の延長線上に連続する遺構はないため、北から南に向かって標高を下げる畦畔上面を横断し、畦畔上の雨水等を畦畔脇へ排出する機能を想定しておくたい。

遺物は出土していない。畦畔のかさ上げが<5 a層>堆積以前に遡ること、畦畔の北端が近世土坑（土坑37・38）に切られること以外に遺構の時期を絞り込む材料に乏しく、中世～近世の幅で考えておく必要がある。

### d. 畦畔

畦畔は<3層>で南北方向のもの1条、東西方向のもの1条が検出された。このうち、南北方向の畦畔は中世から近代まで踏襲されており、ここでは近世段階に付加された可能性のある水口について報告する。

#### 畦畔1（図73・69、図版24）

BI・BJ67区に位置する。造成土を除去した段階で畦畔上面を検出した。中世段階から踏襲される。検出された畦畔の長さは約7.5m、幅は約0.7～1.3m、高さは約0.3mを測る。BJライン南約0.3mの位置に水口が設けられる。

**水口** BJ67区に位置する。南北方向の畦畔を切通して形成される東西方向に通水する水口である。規模は南北が上端で約0.5m、下端で約0.15m、東西が下端で約0.9mである。水口底面の標高は東で

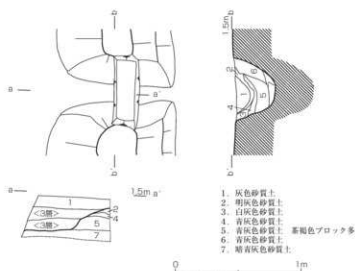


図73 畦畔1 水口平・断面（縮尺1/30）

1.17m、西で1.11mであり、東から西に傾斜する。＜3層＞下面では畦畔西側の田面の方が0.08m下がっていることと合致する。

水口の埋土は7層に分層され、古段階、新段階、最終的な埋め土の3段階に大別される。

南北断面では初期堆積土である7層上に6層が水口の通水部をほぼ埋めるように堆積した(古段階)。その後、水口の機能回復のため、水口の南約2/3において6層を除去する。こうして開通した水口は再びレンズ状に堆積する2～5層によって埋没するが、東西断面ではそれを覆うように耕作土(＜3層＞)がのる。水口埋積土や耕作土の高上げ等により水口は浅く、小規模となり、最終的には1層下面の層理面が水口の役割を果たした(新段階)。最終的に水口を埋める1層はブロックを多く含むため、人為的に埋めた埋土と考えられる。

遺物は2・3層から、束付や灯明皿を含む近世陶磁器が出土している。したがって、2～5層の堆積2段階は近世に属する。1層下面は＜3層＞の層中に該当するレベルであり、水口の廃絶は近世のなかでとらえられる。

#### 畦畔2 (図59)

BF67・68区に位置する。＜2層＞を除去した段階で畦畔の基部を検出した。上部は削平を受けていると考えられる。東西・南北に延びる畦は、交点から北に約0.3m、東に約0.8m、南に約2.3m、西に約3.6m残存し、西端部では南西に鈍角に屈折する。いずれの方角も接続状況は不明である。残存高は0.12mである。畦畔基部の断面形は台形を呈し、＜5層＞を削り出して構築されている。畦畔脇には耕作土である3層が堆積している。

遺物は出土していない。土層より時期は近世に属すると考える。

## 2. 近代

### a. 畝状遺構 (図74、図版24)

近代の遺構は調査区東半、BF～BH58～61・BI60・61区において、東西18～19m、南北13～17mの範囲で確認された東西方向に並ぶ畝である。畝間の掘削が＜3層＞に及んでいたため、同層上面で検出された。畝は検出面で幅約0.2～0.4m、畝間は約0.3～0.6mである。畝間の深さは現状で約6～15cmである。畝間に堆積した土は(A)明灰褐色礫混じり粗砂、(B)茶褐色粘質土・粘土ブロック(こぶし大)多、(C)明灰褐色粘土。

時期は土層から近代に属すると考える。

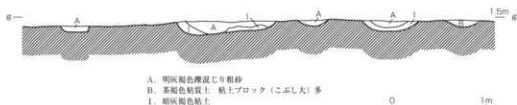


図74 畝状遺構断面 (縮尺1/40)

## 第6節 遺構に伴わない遺物

本調査区で遺構が確認された各時代の遺物について報告する。時代は弥生時代、奈良時代、平安～鎌倉時代で、土器、陶磁器、土製品、石製品、金属器(青銅製品)を取り上げた(図75～77、図版30)。

これらは包含層出土ではあるが、出土状況には注目されるものがある。図76～106～108は弥生時代中期後半～

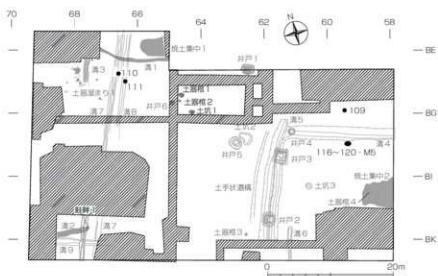


図75 遺構に伴わない遺物の出土位置 (縮尺1/600)

後期のもので、当該期の溝1周辺の9～10層から出土している。図76～109～111は単独で出土したもので、土器溜まり1のような剥離した破片がまとめて廃棄された状況とは異なる。いずれも北側の微高地から廃棄されたものと考えられる。図76～113は奈良時代後半の井戸や土坑が確認されたBE62～BF64区で出土したものである。本調査区

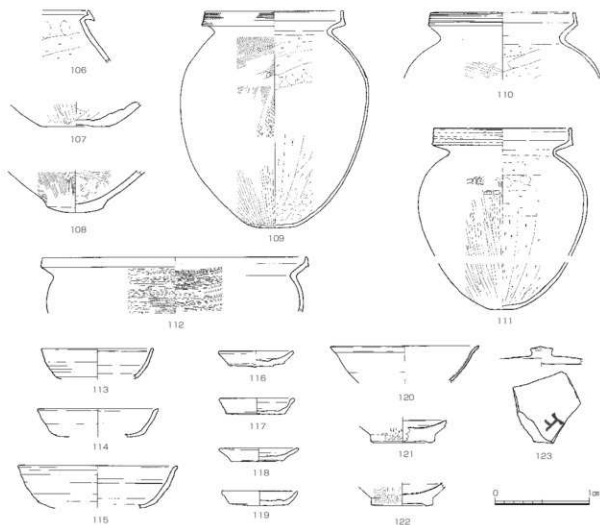


図76 遺構に伴わない遺物① (縮尺1/4)

での奈良時代後半の土器の出土量を見ると、上記の区画が他を圧倒している。<6層>が最も良好に残存していることに起因しているであろうが、この東西では<6層>が残存していてもあまり土器は出土していない。小さなエリアに密集して土器が出土する状況は今後注意していく必要がある。図76-116~119、図77-M5は5c層の掘削中に一括で出土したものである。明確な遺構は確認されなかったが、遺物の組成からすると墓の副葬品であった可能性も考えられる。注目されるのは銅鏡で、鹿田遺跡では初めて出土したものである。取り上げ後、鏡背面に織物の痕跡が確認されたため、現在は土を落としていない状態で保管している。鏡面にも織物が残存している可能性がある。このため各部分の計測値は土が付着した状態のものである。径8.06cm、縁厚0.22cm、縁幅0.3cm、鈕厚0.47cm、内区厚0.16cm、重量322gである。縁の断面形は三角形で、頂部は丸みをもち、やや内側によっている。鈕は橋状で、鈕孔は1mm強と小さい。内区文様はエックス線写真によって確認できた(図版30)。鈕の両側に枝分かれた葉のような文様が配されており、その外側にも花状の文様が確認される。今後、土の除去や保存処理を実施する過程で詳細な報告をおこなう。また黒書土器が2点出土している。図76-123は「上」が墨書されている。

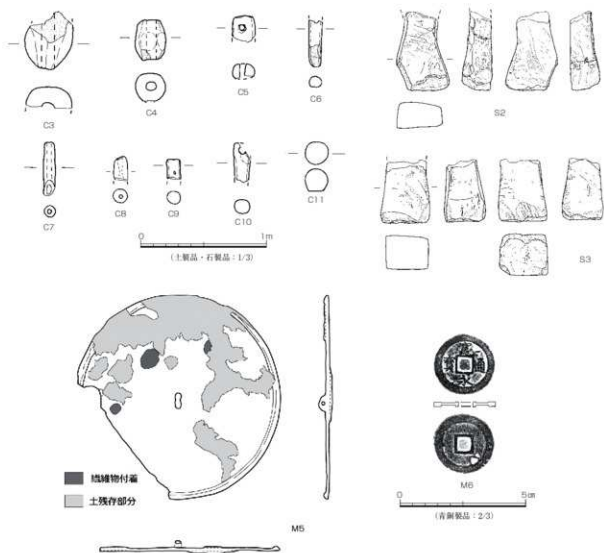


図77 遺構に伴わない遺物②(縮尺1/3・2/3)

## 第5章 結 語

本調査では、これまでの調査で確認例の少なかった奈良時代後半の遺構・遺物が確認され、特に絵馬の出土は鹿田遺跡の評価を考える上で極めて重要な成果となった。各時代の成果をまとめて、結語とする。

### 弥生時代～古墳時代前期前半

4基確認された古墳時代前期前半の土器棺のうち、土器棺1・2は隣り合うように作られており、いずれも他地域系の土器が使用されていた。特に土器棺1の身に用いられた大型の壺は東阿波型とされるもので、胎土には特有の結晶片岩が含まれていた。阿波地域からの搬入品と考えられる。蓋も口縁部を打ち欠いて縦方向に半載した2点の壺を組み合わせたもので、鹿田遺跡の周辺ではほとんどみられない特異な方法である。古墳時代前期前半は鹿田遺跡で他地域系の土器が急増する時期であり、本資料によってその範囲が徳島県域にまで広がることとなった。また蓋の被せ方についても今後他地域の土器棺と比較検討する必要がある。

### 奈良時代後半

井戸1から出土した牛、猿駒曳が描かれた2点の絵馬は、鹿田遺跡の歴史的意義を考える上で欠かすことができないものとなった。絵馬に描かれた図柄としては、前者は日本最古、後者は日本初出土である。2点の絵馬は年輪の観察から極めて近接する部位の木材が使用されたと考えられる。また両者は尻から後脚、前脚、牛の角と馬の耳の筆跡が酷似しており、馬をベースに牛が描かれたものと思われる。このことから2点の製作者は同一であったと考えられる。

絵馬の使用は都から地方へ波及したと考えられており、これまでは平城京をはじめとした畿内や東日本までまわって出土していた。本調査で絵馬が出土したことによって、すでに8世紀代に絵馬の使用が本地域にまで広がっていたことが明らかとなった。都では馬が描かれたものしか出土しておらず、鹿田遺跡の絵馬は特殊である。平城京では絵馬が長屋王邸を囲む溝から出土しており、邸内の井戸からは猿が描かれた土器が出土している。いずれも祭祀行為に用いられたと考えられており、人、猿、馬が密接な関係にあったことが指摘されている(金子1990)。猿駒曳はまさに猿が馬を曳く情景を描いたものであり、そのような動物観についても都から伝わったと考えられる。このように8世紀後半において、当地と都の間で祭祀行為に関する共通性が見られることは、平安時代にその存在が確認される藤原摂関家の殿下渡領である鹿田庄の成立過程を考える上で重要である。

### 平安時代～鎌倉時代以降

井戸が5基検出されたが、井戸2では本遺跡で初めて井桁状の構造物が確認された。平面形態はほぼ正方形を呈しており、それぞれの角部にはさらに上部の構造物を受けるためのほぞ穴および削り込みがみられた。井戸の上部構造を考える上で貴重な資料となった。また本井戸で出土した鉢は胎土分析の結果、備前・相生・東播系のいずれにも属さない胎土であることが明らかとなった。産地同定は今後の課題である。

本時期では14世紀前葉までに掘削・構築されたと考えられる溝5と土手状遺構が土地区画を考える上で重要な成果となった。両者は一体の構造になっており、溝5の埋没後には近世まで機能する溝10が掘削されている。中世に属するピット群の大多数はこれらの西側で確認されており、一方で近代の畝はこれらの東側に展開している。このことは中世以降これらの遺構群が土地利用の境界として機能していたことを示していると考えられる。

以上、本調査の成果をまとめ、各時代において他地域とのつながりを示す遺構・遺物が多いことが注目される。今後はこれらの資料の分析を進め、鹿田遺跡の歴史的な評価にもつなげていきたい。

### 参考文献

- 金子裕之 2014「絵馬と猿の絵皿」『環シナ海文化と古代日本－道教とその周辺』人文書院



## 遺構一覽表

## a. 井戸・土坑・土器箱

遺構名	時期	検出高さ (m)		深さ (m)	上面		底面		断面形
		上面	底面		形状	規模	形状	規模	
井戸1	8世紀後半	1.5	-0.5	2	隅丸方形	2.37×1.54	円形	0.8	逆台形
井戸2	11世紀初頭	1.01	-1.05	2	隅丸方形	2.36×2.05	円形	0.7	Y字形
井戸3	12世紀末 →13世紀初頭	1.067	-1.22	2.28	方形	1.18×1.05	方形	0.95×0.89	箱形
井戸4	13世紀後半	0.8	-0.83	1.65	円形	1.1	円形	0.74	箱形
井戸5	12世紀中葉	1.18	-1.11	2.29	円形	2.12×1.79	円形	0.64×0.7	Y字形
井戸6	13世紀後半～末	0.62	-0.59	1.21	円形	1.45×1.4	円形	1.15×1.08	箱形
土坑1	8世紀後半	1.49	1.18	0.31	円形?	1.1	円形	-	腕形
土坑2	12世紀中葉	1.18	0.85	0.33	逆L字形	1.9×2.15	逆L字形	1.35×1.6	箱形
土坑3	中世	1.06	0.55	0.51	円形	0.96	円形	0.31×0.39	逆台形
土坑4	近世	1.271	0.569	0.702	正円形	1.105×1.104	正円形	1.01×0.66	箱形
土坑5	近世	1.309	0.724	0.585	不正円形	1.415×1.41	不正円形	1.131×1.131	(ボウ丸形)
土坑6	近世	1.294	0.855	0.439	正円形	1.142×1.1	正円形	0.98×1.02	箱形
土坑7	近世	1.107	0.779	0.328	正円形?	0.704×0.252	正円形?	(0.55)×(0.15)	箱形・逆台形?
土坑8	近世	0.959	0.797	0.162	正円形	0.916×0.889	正円形?	(0.46)×(0.18)	-
土坑9	近世	0.859	0.574	0.285	正円形	0.837×0.722	方形	0.63×0.66	箱形・逆台形
土坑10	近世	1.286	0.6	0.696	長方形	1.567×1.107	長方形	1.21×0.81	逆台形
土坑11	近世	1.274	0.847	0.427	長方形?	(0.9)×0.875	長方形	(0.62)×(0.75)	(逆台形)
土坑12	近世	1.299	0.827	0.472	楕円形	1.336×(0.814)	楕円形	1.06×0.55	箱形・逆台形
土坑13	近世	1.433	1.039	0.394	-	(0.616)×(0.386)	-	(0.51)×(0.31)	-
土坑14	近世	1.428	0.788	0.64	方形	(0.726)×(0.318)	方形?	(0.64)×(0.34)	(逆台形)
土坑15a	近世	1.426	0.767	0.659	正円形	(0.822)×(0.733)	正円形	(0.53)×(0.31)	二段・逆台形?
土坑15b	近世	1.426	0.792	0.634	正円形	(0.914)×(0.519)	正円形?	(0.67)×(0.41)	(逆台形)
土坑16	近世	1.319	0.919	0.4	楕円形	1.098×0.681	楕円形	0.81×0.55	逆台形
土坑17	近世	1.262	0.766	0.496	正円形	1.554×1.549	正円形	0.97×1.07	腕形
土坑18	近世	1.2	0.88	0.32	不正円形	(1.32)×(1.212)	不正円形	0.94×(1.12)	ボウ丸形・逆台形?
土坑19	近世	1.407	1.012	0.475	-	(0.812)×(0.234)	-	(0.47)×(0.60)	U字形
土坑20	近世	1.449	0.591	0.858	正円形	1.503×1.461	正円形	1.22×1.16	箱形
土坑21	近世	1.158	0.678	0.48	楕円形?	(1.363)×(0.964)	楕円形?	(0.96)×(0.43)	(逆台形)
土坑22	近世	1.154	0.781	0.373	楕円形	(1.519)×(1.362)	楕円形?	(0.95)×(0.58)	(箱形)
土坑23	近世	1.179	0.928	0.251	-	1.584×(1.10)	-	1.04×(0.74)	(二段・箱形・ボウ丸形)
土坑24	近世	-	-	-	-	(0.534)	-	(0.53)	-
土坑25	近世	(1.2)	(0.734)	(0.466)	-	(0.642)	-	-	-
土坑26	近世	1.26	0.681	0.579	長方形	(1.827)×(1.088)	長方形?	(1.05)×(0.51)	(二段・逆台形)
土坑27	近世	1.402	0.902	0.5	長方形	(0.938)×(0.693)	長方形?	(0.46)×(0.38)	(二段・逆台形)
土坑28	近世	1.298	0.889	0.409	正円形	1.262×(1.006)	正円形	0.63×0.60	逆台形・ボウ丸形
土坑29	近世	1.31	0.901	0.409	正円形	1.396×1.386	正円形	1.31×1.22	箱形・逆台形
土坑30	近世	1.475	1.041	0.434	正円形	1.07×(0.977)	正円形	0.85×(0.91)	逆台形
土坑31	近世	1.488	1.096	0.392	正円形	0.898×(0.641)	正円形	(0.28)×(0.13)	二段・箱形
土坑32	近世	1.496	0.657	0.839	正円形	(1.359)×(0.915)	正円形	0.61×0.52	二段・逆台形
土坑33a	近世	-	-	-	正円形?	(0.18)×(0.93)	正円形?	(0.70)×(0.23)	箱形
土坑33b	近世	1.5	1.187	0.313	-	(0.978)×(0.273)	-	0.79×(0.42)	箱形
土坑34	近世	1.417	0.876	0.541	長方形	0.995×0.737	長方形	0.60×0.40	ボウ丸形
土坑35	近世	1.414	1.136	0.278	正円形	0.981×0.914	正円形	0.66×0.63	逆台形
土坑36	近世	1.269	0.821	0.448	不正円形?	(1.185)×(0.516)	不正円形?	1.05×0.90	箱形・腕形
土坑37	近世	1.359	0.74	0.619	正円形	1.535×(1.327)	正円形	1.15×1.09	逆台形
土坑38	近世	1.528	0.896	0.632	不正円形	(1.379)×(1.725)	不正円形	0.69×0.66	ボウ丸形
土坑39	近世	1.55	1.069	0.481	-	(0.968)×(0.293)	-	(0.57)×(0.12)	ボウ丸形
土坑40	近世	1.115	0.655	0.46	正円形	1.456×(1.164)	正円形	0.80×0.67	ボウ丸形
土坑41	近世	1.211	0.86	0.381	正円形	0.751×0.734	不整形	0.40×0.31	二段・逆台形・箱形
土坑42	近世	1.998	1.144	0.854	正円形	0.67×(0.508)	正円形	0.52×0.45	(腕形?)
土坑43	近世	1.243	0.836	0.407	正円形	1.017×0.94	正円形	0.56×0.54	腕形
土坑44	近世	1.201	0.772	0.429	楕円形	1.522×1.213	楕円形	0.75×0.53	腕形
土坑45	近世	1.337	0.87	0.467	長方形	1.168×0.862	長方形	(0.56)×0.66	逆台形
土坑46	近世	1.286	0.95	0.436	楕円形	(1.134)×(0.667)	楕円形	(0.78)×(0.33)	逆台形
土坑47	近世	1.215	0.799	0.416	楕円形	(1.852)×(1.811)	楕円形	(1.62)×1.14	逆台形
土坑48	近世	1.263	0.645	0.618	楕円形	(0.904)×(0.682)	楕円形	0.52×(0.38)	ボウ丸形
土坑49	近世	1.402	0.935	0.467	正円形	0.951×(0.778)	正円形	0.52×(0.21)	鉢形・ボウ丸形
土坑50	近世	1.401	0.708	0.693	長方形	(2.147)×(1.099)	楕円形?	(1.81)×(0.88)	ボウ丸形

遺構一覧表・遺物観察表

遺構名	時期	横断面高 (m)		深さ (m)	上面		底面		断面形
		上面	底面		形状	規模	形状	規模	
土坑51	近世	1.184	1.005	0.179	正方形	1.153×0.680	正方形	1.08×0.54	-
土坑52	近世	1.259	0.645	0.614	長方形	(1.102)×0.797	長方形	0.89×0.55	U字形
土坑53	近世	1.19	0.947	0.243	長方形	(1.75)×0.739	長方形	(1.67)×0.58	(逆台形)
土坑54	近世	1.191	0.844	0.347	正方形	0.859×0.834	正方形	0.74×0.66	逆台形・箱形
土坑55	近世	1.139	0.716	0.423	長方形	(2.202)×(1.93)	長方形	(1.44)×(1.41)	逆台形
土坑56	近世	1.275	0.759	0.516	長方形	(1.074)×0.779	長方形	0.97×0.62	ボウル形
土坑57	近世	1.177	0.977	0.2	長方形	(1.985)×1.298	長方形	(1.72)×0.95	-
土坑58	近世	1.408	1.032	0.376	長方形	1.221×0.923	長方形	1.1×0.86	箱形・逆台形
土坑59	近世	1.451	1.304	0.147	-	(0.693)×(0.635)	-	(0.49)×(0.39)	-
土坑60	近世	1.188	1.004	0.184	-	(0.676)×(0.304)	-	-	-
土坑61	近世	1.11	0.809	0.301	正方形?	0.954×(0.916)	正方形?	0.86×(0.75)	(逆台形)
土坑62	近世	1.378	1.003	0.385	長方形?	(1.019)×(0.684)	長方形?	(0.32)×(0.21)	(ボウル形?)
土坑63	近世	1.049	0.642	0.407	正方形	(1.285)×(1.026)	正方形	(0.91)×(0.89)	逆台形
土坑64	近世	1.113	0.685	0.428	楕円形	1.229×(0.982)	楕円形	0.84×0.54	ボウル形
土坑65	近世	1.467	0.855	0.612	楕円形?	(1.419)×(1.286)	楕円形?	(1.65)×(0.79)	箱形
土坑66	近世	1.455	1.091	0.364	長方形	(1.43)×(1.188)	長方形	(1.36)×0.75	-
土坑67	近世	1.32	0.77	0.55	-	1.989×(1.029)	-	(1.64)×(0.98)	箱形
土坑68	近世	0.961	0.561	0.34	正円形?	(0.968)×(0.266)	正円形?	(0.84)×(0.26)	逆台形・箱形
土塚柵1	古墳時代前期前半	1.01	0.64	0.37	隅丸方形	0.91×0.74	楕円形	0.74×0.58	箱形
土塚柵2	古墳時代前期前半	1.02	0.8	0.22	円形	0.4	円形	0.25	箱形
土塚柵3	古墳時代前期前半	0.99	0.63	0.36	円形	0.42×0.38	円形	0.15	箱形
土塚柵4	古墳時代前期前半	1.24	0.87	0.37	-	-	-	-	-

b. 焼土集中・土器溜まり

遺構名	時期	横断面高 (m)		深さ (m)	範囲 (m)
		上面	底面		
焼土集中1	弥生時代中期後半～後期	0.7	0.56	0.14	3.5×2.2
焼土集中2	弥生時代中期後半～後期	0.65	0.52	0.13	4.1×4.6
土器溜まり	弥生時代後期中葉～末	0.89	0.64	0.25	5.5×5.9

c. 溝

遺構名	時期	横断面高 (m)		深さ (m)	幅 (m)	断面形	方向
		上面	底面				
溝1	弥生時代中期後半	0.6	0.3	0.3	0.63	箱形	E-W・NW
溝2	弥生時代後期	0.77	0.48	0.29	0.63	箱形	NE-SW
溝3	奈良時代後半	1.27	1.03	0.24	1.05	箱形	N-S
溝4	14世紀初葉	1.13	0.51-0.73	0.4-0.62	1.3・2.15	逆台形・箱形	N-S・E-W
溝5	14世紀前半	1.49	0.86-0.95	0.55	1.47	逆台形・箱形	N-S
溝6	13-14世紀	1.23	0.65	0.68	0.73	逆台形	N-S
溝7	13世紀前半	1.21	0.4-0.5	0.8	0.84	逆台形	N-S
溝8	13世紀前半	1.5	0.65-0.77	0.73	1.5	逆台形	N-S
溝9	13世紀後半	0.923	0.62-0.72	0.22	1.17	箱形	E-W
溝10	近世	1.29	0.93	0.36	1.18	ボウル形	N-S
溝11	近世	1.28	0.72-0.78	0.46	1.8 (2.14 (古))	ボウル形	N-S・E-W
溝12	近世	1.17	1.07-1.1	0.08	0.6	箱形	E-W
溝13	近世	1.34	0.18-1.21	0.12	0.2	箱形	N-S

d. 土手状遺構・畦畔・畝

遺構名	時期	上面高 (m)	F面高 (m)	高さ (m)	幅 (m)	断面形	方向
土手状遺構	14世紀前半	1.5	0.9	0.6	1.4	台形	N-S
畦畔1	13-14世紀	1.63	1	0.63	1.6	台形	N-S
畦畔2	近世	1.43	1.31	0.12	0.5	台形	N-S・E-W
畝	近代	1.46	1.32	0.14	0.2-0.4	台形	E-W

## 遺物観察表

## a. 土器・瓦

図番号	番号	遺構・層位	種類	器種	法量			残存状況	手法他	胎土	色調(内/外)
					口径	底径	器高/厚/寸				
I012	1	土器槽1	土器器	壺	21.6	8.3	64.8	1/1	(内)口縁部-頸部ナデ、頸部オオサエ、(外)口縁部-頸部ナデ、頸部ハケ、胎土の粘晶片が含む。	面砂	淡褐色灰色
	2	土器槽1	土器器	壺	-	9.4	-	1/2	(内)頸部ナデ・指オサエ、頸部ケズリ、(外)ミガキ(頸部付近ハケ)	面砂	淡褐色白色
	3	土器槽1	土器器	壺	-	7.9	-	1/2	(内)頸部上半ケズリ後指オサエ・下半指オサエ(外)上半ハケ後ナデ、下半ミガキ	面砂	淡褐色灰色
	4	土器槽2	土器器	壺	14.4	-	-	1/1	(内)口縁部ハケ、頸部ケズリ(外)タケキのち工具ナデ、下半盛付蓋	面砂	淡褐色
I015	5	土器槽3	土器器	壺	21	3.5	36.5	1/2	(内)口縁部-頸部ナデ、頸部上半ケズリ・下半指オサエ(外)口縁部-頸部ナデ、頸部ハケ	面砂	淡褐色
I017	6	土器槽4	土器器	壺	18.4	4.8	35.9	1/1	(内)口縁部ナデ、頸部ハケ、頸部上半ケズリ・下半指オサエ(外)口縁部-頸部、頸部上半ナデ、頸部ミガキ	面砂	暗褐色
I019	7	土器罎まり	弥生土器	壺	25	-	-	1/1	(内)口縁部ナデ・ミガキ、頸部指オサエナデ(外)口縁部ナデ、頸部前後洗刷、口縁部-頸部のみ残存	面砂	淡褐色白色
	8	土器罎まり	弥生土器	壺	-	-	-	1/4	(内)ナデ・指オサエ(外)ミガキ、頸部部に列点文	面砂	淡褐色灰色
	9	土器罎まり	弥生土器	壺	15	-	-	1/4	(内)口縁部-頸部ヨコナデ、頸部ケズリ(外)ヨコナデ、口縁部内傾凸	面砂	灰褐色
	10	土器罎まり	弥生土器	高杯	-	11.6	-	1/4	(内)ナデ・ハケ(外)唇部ミガキ、脚柱部面取り・ミガキ	面砂	褐色
	11	土器罎まり	弥生土器	高杯	-	13.4	-	1/3	(内)ナデ・ハケ(外)面取り、脚柱部ミガキ、唇部ハケ後ミガキ	面砂	褐色
	12	土器罎まり	弥生土器	鉢	24	6.4	17	1/3	(内)口縁部-頸部ナデ・ミガキ、頸部ケズリ(外)口縁部-頸部ナデ・ミガキ、頸部ハケ後集いミガキ	面砂	淡褐色
	13	土器罎まり	弥生土器	壺	23	9.6	27.6	-	(内)口縁部-頸部ナデ、頸部ケズリ(外)口縁部-頸部ナデ、頸部上半ハケ後ミガキ・下半ミガキ	面砂	淡褐色
	14	土器罎まり	弥生土器	高杯	-	-	-	1/1	(内)杯部ハケ後ミガキ、脚柱部ナデ、(外)ミガキ、脚柱部面取り、脚部-杯部のみ残存	面砂	淡褐色灰色
	15	土器罎まり	弥生土器	壺	12.8	-	-	1/2	(内)口縁部-頸部上半ナデ、頸部下半ケズリ(外)ハケ	面砂	淡褐色
	16	土器罎まり	弥生土器	壺	13.5	-	-	3/4	(内)口縁部-頸部ナデ、頸部ケズリ(外)ナデ、口縁部内傾凸	面砂	淡褐色白色
	17	井戸1	土器器	杯	12.6	10	-	1/4	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り、内外面丹塗り	面砂	褐色~褐色白色
	18	井戸1	土器器	杯	12.7	10.2	3.7	1/1	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り、内外面丹塗り	面砂	褐色
	19	井戸1	土器器	杯	13.4	10	-	1/4	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、内外面丹塗り	面砂	赤褐色~暗赤褐色
	20	井戸1	土器器	杯	13	9.8	3.55	1/3	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、一部ミガキ、底部へう切り後ナデ	面砂	灰褐色
	21	井戸1	土器器	杯	15.6	12	3.6	1/4	(内)ヨコナデ、底面指オサエ・ナデ(外)ヨコナデ、底部はへう切り後ナデ、内外面丹塗り	面砂	赤褐色~暗褐色/赤褐色~灰褐色
	22	井戸1	土器器	杯	13.4	11.6	2.4	1/4	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後ナデ、内外面丹塗り	面砂	赤褐色~淡褐色/赤褐色~淡褐色
23	井戸1	土器器	杯	19	16	2.5	1/2	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、内外面丹塗り	面砂	暗赤褐色~褐色/暗褐色	
24	井戸1	土器器	罎	18.2	-	-	1/8	(内)口縁部ハケ後ヨコナデ、頸部ヨコハケ(外)口縁部ハケ後ヨコナデ、頸部付足指オサエ、頸部タケナデ	面砂	暗褐色~黒褐色/赤褐色~暗赤褐色	
25	井戸1	土器器	罎	-	-	10.1	1/3	(内)頸部ヨコハケ、底部ハケのちナデ・指オサエ(外)ハケ	面砂	灰褐色~暗褐色/暗褐色~黒褐色	
26	井戸1	須恵器	蓋	14	-	-	1/6	(内)ヨコナデ(外)ハラケズリ、下縁はハラケズリ後ヨコナデ	面砂	灰色	
27	井戸1	須恵器	杯	13.2	9.6	4.1	1/4	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部はへう切り後ナデ	面砂	灰~灰褐色	
28	井戸1	須恵器	杯	14.8	11.2	4.2	1/4	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、頸部と底部の境付近へう張り、底部へう切り後ナデ	面砂	灰色	
29	井戸1	須恵器	壺	18.4	-	-	1/8	(内)口縁部ヨコナデ、頸部同心内当具(外)口縁部ヨコナデ、頸部半円形ミガキ	面砂	灰色	
I020	30	土坑1	土器器	杯	12	10.5	-	1/5	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、内外面丹塗り	面砂	黄白~橙褐色
	31	土坑1	土器器	杯	13	9.5	3.45	1/1	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後ナデ、内外面丹塗り	面砂	暗褐色~暗褐色/黄白~赤褐色
	32	土坑1	土器器	杯	13.3	10.3	3.6	1/2	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後ナデ、内外面丹塗り	面砂	淡褐色白色

遺構一覧表・遺物観察表

調査号	番号	遺構・層位	種類	部種	法量			残存状況	手法施	軸土	色調(内/外)	
					口径	底径	器高/厚さ					
1030	33	土坑1	土師器	杯	156	13	3.6	1/5	(内)ヨコナテ、底部一部削オサエ(外)ヨコナテ、内外面丹塗り	微砂	淡灰～暗灰色/淡灰褐色	
	34	土坑1	土師器	杯	126	9.8	3	1/8	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り、内外面丹塗り	微砂	淡橙灰～赤褐色/淡橙灰色	
	35	土坑1	土師器	杯	122	10	3	1/6	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り、内外面丹塗り、外面焼結	微砂	赤褐色～暗褐色/橙灰～赤褐色	
	36	土坑1	土師器	杯	128	10	-	1/6	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り、内外面丹塗り	微砂	橙白色～橙褐色	
	37	土坑1	土師器	杯	13	106	3.1	1/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り後ナテ、内外面丹塗り	微砂	橙白～橙褐色	
	38	土坑1	土師器	杯	159	11.5	5.5	3/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り後ナテ、内外面丹塗り	微砂	橙白～灰褐色	
	39	土坑1	土師器	杯	11.4	8.6	-	1/5	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り、内外面丹塗り	微砂	淡橙白～暗褐色/暗灰褐～橙褐色	
	40	土坑1	土師器	杯	125	10.1	2.7	1/8	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、内外面丹塗り	微砂	淡橙白～赤褐色	
	41	土坑1	土師器	杯	136	11.2	-	1/6	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、内外面丹塗り	微砂	橙褐色～橙褐～暗褐色	
	42	土坑1	土師器	杯	13	9.8	3.2	1/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ切り後ナテ、内外面丹塗り	微砂	橙白～赤褐色	
	43	土坑1	土師器	瓶	16.4	13.4	2.2	1/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り、内外面丹塗り	微砂	黄白～橙褐色	
	44	土坑1	土師器	瓶	18	15.6	2	1/6	(内)ヨコナテ、底面削オサエ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り、内外面丹塗り	微砂	橙褐～暗赤褐色/橙褐～暗褐色	
	45	土坑1	土師器	瓶	8	7.3	-	1/6	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、内外面丹塗り	微砂	淡橙白～赤褐色	
	46	土坑1	土師器	瓶	16.4	-	-	1/10	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、内外面丹塗り	微砂	淡橙白～赤褐色	
	47	土坑1	土師器	瓶	16.3	14.2	1.5	1/6	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り、内外面丹塗り	微砂	橙褐～暗褐色	
	48	土坑1	土師器	瓶	26	22.6	2.6	1/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後削オサエ、内外面丹塗り	微砂	赤褐色～暗褐色/淡橙白～赤褐色	
	49	土坑1	土師器	甕	28.2	-	-	1/6	(内)口縁部、胴部コハテ後ナテ、胴部工具ナテ(外)口縁部ヨコナテ、削オサエ、胴部コハテハケ	粗砂	暗灰褐色/暗赤褐～暗褐色	
	1034	50	井戸2	築土部	枕	-	7.5	-	2/3	(内)ミガキ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後ナテ、高倉貼り付後ナテ	粗砂	暗灰色/淡橙灰色
		51	井戸2	土師器	瓶	10.6	6.1	2.4	1/4-1/6	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ	粗砂	淡褐色
52		井戸2	土師器	瓶	10.1	8	1.5	1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後ナテ	粗砂	淡橙灰色	
53		井戸2	土師器	瓶	10.4	2.4	2	2/3	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部削オサエ	粗砂	灰褐色	
54		井戸2	須恵質土師器	鉢	24.2	10.2	9.2	1/3	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部赤削り	微砂	灰色/暗灰色	
1037	35	井戸3	土師器	瓶	7.6-7.7	5.8	1.3-1.75	1/1	(内)ナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後板目	微砂	黄白色	
	36	井戸3	土師器	瓶	8	5.8-6.0	1.2	1/5	(内)ヨコナテ、底面ナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後ナテ	微砂	橙灰色	
	37	井戸4	土師器	瓶	14.8	-	-	1/7	(内)工具ナテ(外)ヨコナテ	微砂	暗灰色	
	38	井戸4	土師器	瓶	7.5-7.8	6.2-6.5	1.3-1.5	完形	(内)ヨコナテ、底面中央ナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後ナテ	微砂	黄灰色	
1042	39	井戸4	須恵器	甌鉢	-	-	-	-	(内)口縁部ヨコナテ、胴部工具ナテ(外)ヨコナテ	粗砂	灰褐色	
	60	井戸4	須恵器	甌鉢	-	-	-	-	(内)口縁部ヨコナテ、胴部ヨコナテ後ナテ(外)ヨコナテ	粗砂	灰色	
	61	井戸5	土師器	瓶	15.4	7.1	5.4	1/2.3 高倉1/1	(内)ミガキ、ヨコナテ、重ね焼3根(外)ミガキ、ヨコナテ、一部削オサエ	粗砂	淡橙灰色	
1044	62	井戸5	土師器	甕	36.6	-	-	1/1	(内)ヨコハケ、一部削オサエ(外)口縁部ヨコナテ、胴部上半部オサエ後ナテハケ、胴部下半部オサエ後ヨコハケ、煤付着	粗砂	暗褐色	
	63	井戸5	須恵器	壺	-	10	-	1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部赤削り後ナテ	微砂	灰色/暗灰色	
	64	井戸5	須恵器	甌鉢	31.5	10.7	10	1/1.8 底1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部赤削り後ナテ	微砂	灰色	
	65	井戸5	須恵器	甕	32	-	-	1/5	(内)口縁部ヨコナテ、胴部削オサエ後ナテ(外)口縁部ヨコナテ、胴部膝子目切	微砂	灰色	
	66	井戸6	土師器	瓶	7.9	5.6	1.2	1/1.7 底1/3	(内)ヨコナテ、底面ナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後ナテ	微砂	淡橙灰色	
1046	67	井戸6	土師器	瓶	8.9	7.8	1.5	1/1	(内)ヨコナテ、底面ナテ(外)ヨコナテ、底部ヘラ削り後ナテ	微砂	淡黄灰色	
	68	井戸6	土師器	甕	29.9	1.7	2.9	1/1	(内)口縁部ナテ、胴部コハテ、胴部削オサエナテ(外)口縁部ナテ、胴部上半部ナテハケ、胴部下半部ナテハケ、煤付着	粗砂	淡橙褐色	
1048	69	土坑2	土師器	瓶	15.1	6.3-6.5	6.6-6.8	1/1.2 底1/1	(内)ヨコナテ、ミガキ(外)ヨコナテ、ミガキ、底部ヘラ削り後削オサエ	微砂	淡灰褐色	
	70	土坑2	土師器	瓶	16	7.0-7.1	5.5-5.9	1/2.5 底1/1	(内)ヨコナテ、ミガキ(外)ヨコナテ、ミガキ、削オサエ、底部ヘラ削り後削オサエ	微砂	淡灰褐色	
	71	土坑2	土師器	瓶	14.2	6.8-7.0	4.6-5.4	1/1.2 底1/1	(内)ヨコナテ、ミガキ(外)ヨコナテ、ミガキ、底部ヘラ削り後ナテ	微砂	淡灰白色	
	72	土坑2	土師器	瓶	15.8	5.1	6.2-6.4	1/1.3 底1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、ミガキ、底部ヘラ削り後ナテ	微砂	淡橙灰白色	

調査号	番号	遺構・層位	種類	部種	法量			残存状況	手法施		軸土	色調(内/外)
					口径	底径	器高/厚さ					
1048	73	土坑2	土師器	瓶	14.8	6.2~6.3	4.8	Ⅱ/3 底1/1	(内)ミギキ(外)ミギキ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色白色	
	74	土坑2	土師器	瓶	15.1~ 15.3	6.6~6.8	4.8~5.5	2/3	(内)上具ナテ(外)ヨコナテ、指ササエ、ミギキ	微砂	淡灰白色	
	75	土坑2	土師器	瓶	16.5	6.1	5.5	Ⅱ/8 底1/1	(内)ヨコナテ後ミギキ、底面指ササエ(外)ヨコナテ、指ササエ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色灰色	
	76	土坑2	土師器	瓶	16.2	-	-	1/4	(内)上具ナテ後ミギキ(外)ヨコナテ、ヨコナテ後ミギキ	微砂	淡褐色灰色	
	77	土坑2	土師器	瓶	8.2~8.5	5.8~6.0	1.3~2.2	1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り、粘土部分分明瞭	微砂	淡黄灰色	
	78	土坑2	土師器	瓶	7.4~8.1	5.5~6.2	1.5~1.6	1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り後ナテ、粘土部分分明瞭	微砂	淡褐色灰色	
	79	土坑2	須恵器	瓶	8.7~8.8	4.4~4.6	1.8~1.9	Ⅱ/2 底3/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部赤切り	微砂	青灰色	
	80	溝4	土師器	瓶	-	3.9	-	1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り後ナテ、高台の輪郭不整形	微砂	褐色	
	81	溝4	土師器	瓶	7.6	4.2	1.5	Ⅱ/5 底1/4	(内)ナテ(外)ナテ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色	
82	溝4	土師器	瓶	9	6.5	1.6	Ⅱ/2 底2/3	(内)ヨコナテ、ナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り後板目	微砂	淡黄白色		
83	溝4	土師器	鍋	-	-	-	-	(内)ヨコハタ(外)口縁部ヨコハタ・ヨコハタ、胴部タテハ、覆付着	微砂	暗褐色		
84	溝4	瓦	瓦当	6.4	10.5	5.2	-	(内)ナテ(外)ナテ、瓦当面残文5残存	微砂	淡黄白色		
85	溝4	瓦	平瓦	6.4	7.5	2.2	-	(内)上具ナテ(外)春日	微砂	淡褐色白色		
86	溝4	瓦	平瓦	5.8	5.7	2	-	(内)格子目叩き(外)春日	微砂	淡灰褐色		
1051	87	溝4・5	土師器	瓶	-	4.2	-	1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底面指ササエ、重ね焼き肌、微熱か	微砂	暗灰褐色/橙灰-灰褐色	
	88	溝4・5	土師器	瓶	-	4.8	-	1/1	(内)上具ナテ後指ササエ(外)ヨコナテ、底面指ササエ	微砂	淡黄白色	
	89	溝4・5	土師器	瓶	15	9.3	5.5	Ⅱ/10 底2/3	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部板目?	微砂	橙灰色/暗褐色	
	90	溝4・5	土師器	瓶	8.8	6.4	1.25	Ⅱ/10 底1/3	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り後板目	微砂	黄白色	
	91	溝4・5	土師器	瓶	9	6.6	1.4	Ⅱ/5 底1/1	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り	微砂	淡褐色白色	
	92	溝4・5	土師器	鍋	34.2	-	-	1.8	(内)口縁部ヨコナテ、胴部ヨコハタ(外)指ササエ後タテハ、覆付着	微砂	灰褐色~暗灰色/暗灰褐色~黒褐色	
	93	溝7	土師器	瓶	-	6.4	-	1/2	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ	微砂	淡褐色	
	94	溝7	土師器	瓶	7.6	6.1	1.2	1/4	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色褐色	
	95	溝7	土師器	脚台	-	5.9	-	1/1	(内)ナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り	微砂	淡褐色	
1055	96	溝8	土師器	瓶	-	7.2	-	1/7	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色白色	
	97	溝8	土師器	瓶	-	5.6	-	1/6	(内)ヨコナテ、重ね焼き肌(外)ヨコナテ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色白色	
	98	溝8	土師器	鍋	-	3	-	1/1	(内)ヨコハタ(外)ヨコハタ	微砂	灰褐色/暗灰色	
	99	溝8	蓋輪陶器	-	-	-	-	-	(内)ヨコナテ(外)ヨコナテ	微砂	暗オリーブ色/オリーブ色	
	100	溝7・8	土師器	瓶	14.4	6.0~6.2	4.4	3/4	(内)上具ナテ(外)ヨコナテ	微砂	淡褐色白色	
	101	溝7・8	土師器	瓶	-	6.7	-	1/3	(内)上具ナテ、重ね焼き肌(外)ヨコナテ、底部へう切り後ナテ	微砂	淡褐色褐色	
1057	102	溝9	青磁	瓶	16.2	6.4	7	Ⅱ/4 底1/1	(内)蓋輪(外)蓋輪、高台内-蓋部磨削、	粗粒	灰色(輪)緑灰色	
	103	溝9	土師器	瓶	12.7	6	3.9~4.0	1/1	(内)上具ナテ(外)ヨコナテ、指ササエ	微砂	黄白色	
	104	溝9	土師器	鍋	37	-	-	1/3	(内)ヨコハタ(外)口縁部ヨコハタ、口縁下手-胴部上手指ササエ後タテハ、胴部下指ササエ後ミギキ後ヨコハタ、覆付着	微砂	暗褐色~暗褐色/暗褐色~黒褐色	
105	溝9	土師器	鍋	39	-	-	1/1	(内)ヨコハタ(外)口縁部ヨコハタ、口縁下手指ササエ後ヨコハタ、覆付着	微砂	暗灰褐色/暗褐色~黒褐色		
1076	106	10層	弥生土器	壺	14.8	5.2	2.3	1/2	(内)口縁部ヨコナテ、胴部上半ココ方向ケズリ、下半ココ方向ケズリ、下半-底面指ササエ(外)口縁部-胴部ヨコナテ、口縁部凹縁(外)、胴部上半ヨココ方向ケズリ、下半ヨココ方向ケズリ	微砂	暗褐色/淡褐色	
	107	9層	弥生土器	壺	15.4	-	-	2/5	(内)口縁部ヨコナテ、胴部上半ココ方向ケズリ、(外)口縁部-胴部ヨコナテ、口縁部凹縁7条、胴部上半ヨココ方向ケズリ	微砂	淡褐色	
	108	10層	弥生土器	鉢?	14.7	-	-	1/2	(内)口縁部ヨコナテ、胴部上半ココ方向ケズリ、指ササエ、胴部下手ココ方向ケズリ、下半-底面指ササエ(外)口縁部-胴部ヨコナテ、口縁部凹縁7条、胴部上半ココ方向ケズリ	微砂	淡褐色灰色	
	109	8層	弥生土器	壺	-	-	-	-	(内)口縁部ヨコナテ、胴部指ササエ、胴部ケズリ(外)口縁部ヨコナテ、凹縁1条、胴部タテハ、	微砂	橙灰色	

## 遺構一覧表・遺物観察表

図番号	番号	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm)			残存状況	手法施	胎土	色調 (内/外)
					口径	底径	器高/厚さ				
076	110	8層	弥生土器	甕?	-	6	-	1/2	(内)タテハケ後指オサエ(外)タテハケ	微砂	淡黄褐色
	111	8層	弥生土器	鉢?	-	7	-	1/2	(内)ケズリ(外)ミガキ、黒炭	細砂 白色粘土	黒灰・淡黄褐色
	112	8~10層	弥生土器	鉢	28	-	-	1/6	(内)口縁部上手ヨコナデ、口縁部下平・胴部ヨコ方向ミガキ(外)口縁部上手ヨコナデ、口縁部下平ヨコ方向ミガキ、胴部タテハケ後ヨコ方向ミガキ	微砂	淡黄褐色
	113	5~6層	土器器	杯	11.8	9	-	11/8 胴/4	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ	微砂	淡橙白~赤褐色
	114	5~6層	土器器	杯	12.8	9.6	3	1/8	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り、内外面丹塗り	微砂	橙白~赤褐色
	115	6層	土器器	杯	17	-	-	1/6	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、内外面丹塗り	微砂	赤褐~橙白
	116	5c層	土器器	甕	7.9~8.1	6.1~6.4	1.6~1.8	1/1	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後飯目	微砂	淡橙白色
	117	5c層	土器器	甕	7.9~8.1	6.2~6.3	1.5~1.8	1/1	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後飯目	微砂	淡橙白色
	118	5c層	土器器	甕	8.2~8.7	5.6~6.0	1.2~1.5	1/1	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後飯目	微砂	淡橙白色
	119	5c層	土器器	甕	8.0~8.2	6.3	1.6	5/6	(内)ヨコナデ(外)ヨコナデ、底部へう切り後ナデ	微砂	淡橙白色
	120	5c層	青磁	碗	15.8	-	-	1.5	(内)施釉(外)施釉	精緻	淡オリーブ色
	121	5c層	白磁	碗	-	6.8	-	1/1	(内)施釉、貫入あり(外)ケズリ	精緻	淡灰白色
	122	5c層	白磁	碗	-	6.6	-	1/1	(内)施釉(外)ケズリ後施釉、底部に砂	精緻	白色
	123	5層	弥生土器	蓋	-	-	-	-	(内)ヨコナデ、器首上(外)ヨコナデ	微砂	灰白色

## b. 土製品

図番号	番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)			重量 (g)	残存状況	手法施	胎土	色調
				残存長	残存幅	厚さ					
077	C 1	井戸3	土鉢	4.3	1.1	1	3.5	完形	ナデ	細砂	灰褐色
078	C 2	土坑2	土鉢	3.7	1.5	1.5		完形	ナデ	微砂	灰褐色
	C 3	5c層	土鉢	4.5	3.8	1.3	27	欠損	ナデ	細砂	灰白色
077	C 4	5c層	土鉢	3.3	2.5	2.2	18.2	ほぼ完形	ナデ	微砂	淡褐色
	C 5	5a~5b層	土鉢	2	1.8	1.1	4.1	欠損	ナデ	微砂	灰褐色
	C 6	5c層	土鉢	3.7	1	0.8	4.6	欠損	ナデ	微砂	淡褐色
	C 7	5c層	土鉢	4.2	0.9	0.9	3.8	完形	ナデ	微砂	細灰褐色
	C 8	5c層	土鉢	2	1.1	1	2.6	欠損	ナデ、両面穿孔	微砂	淡褐色
	C 9	5c~5d層	土鉢	1.6	1.1	1.1	2.2	欠損	ナデ、穿孔は未貫通	微砂	黄白灰色
	C 10	5c層	土鉢	3.1	1.1	1.1	4.5	欠損	ナデ	微砂	淡褐色
	C 11	5c層	土瓦	1.8	1.8	1.8	5.8	完形	ナデ	微砂	灰褐色

## c. 石製品

図番号	番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)			重量 (g)	残存状況	石材	特徴
				残存長	残存幅	厚さ				
077	S 1	溝4	加工石	14.8	14.2	11.1	2920	欠損	流紋岩	外面は全体が彫突、外面は面を形成しており異なる領域の進行具合を示す
	S 2	溝4	砥石	6.1	3.8	2.0	76.4	欠損	流紋岩	欠損部を除く全面を砥面として使用
	S 3	5c層	砥石	4.9	3.5	2.8	84.2	欠損	流紋岩	小口面以外の面を砥面として使用

## d. 金属器

図番号	番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			重量 (g)	残存状況	特徴
				残存長	残存幅	厚さ			
070	M 1	土坑1	鉄斧	9.5	3.3(袋部5/刃部)	1.7( )	1729	完形	袋部は折り差しによって形成される。刃部以外は厚い面に覆われている。
078	M 2	土坑2	鉄釘	6	1	1	10.8	完形	上端は欠損。上手折曲がる。下方に向けて曲がり、下端は尖る。木質残存。
0751	M 3	溝4	銅鉄	2.3	-	0.15	3.3	完形	無事元質、文字不鮮明
	M 4	溝4	銅鉄	2.3	-	0.15	2.7	完形	元巻遺存、文字不鮮明
077	M 5	5c層	銅鉄	8.1	-	0.5	32.2	一部欠損	鏡背面文様有、繊維物残存。径孔径1mm強。縁は断面に丸みのある三角形。未洗浄。
	M 6	3層	銅鉄	2.5	-	0.2	2.1	完形	底面平滑、文字鮮明

## e. 木製品

( ) は現在額

図番号	番号	遺構・部位	器種	法量 (cm)			樹種	本取り	加工等	
				長さ	幅	厚さ				
1025	W1	井戸1	絶馬(牛)				ヒノキ	板目	孔1ヶ所あり。左右の小口面に表裏からの切断面残存。表面の2ヶ所に縦方向の割付線。裏面には不規則な浅い陥状の痕跡残存。	
1026	W2	井戸1	絶馬(駿駒突)	12.1	23.4	0.6~0.8	ヒノキ	板目	孔1ヶ所あり。左右の小口面に表裏からの切断面残存。表面下端と裏面に縦方向の割付線。表面・裏面に不規則な浅い陥状の痕跡。	
1027	W3	井戸1	漆巾	13.2	1.4	0.3	ヒノキ	板目	薄板の両口を主要部に切り出し、中間部に割れ1箇所	
	W4	井戸1	漆巾	13.5	1.0	0.3	ヒノキ	板目	薄板の両口を主要部に切り出し、中間部に割れ1箇所	
	W5	井戸1	漆巾	13.1	1.3	0.2	ヒノキ	板目	薄板の両口を主要部に切り出し、中間部に割れ1箇所	
1028	W6	井戸1	井戸枠	(1130)	(556)	9.2	モミ属	板目	手割材割り貫き製材。3片に破砕。横断断面は手割六角形と準定。本口より約6~20cm上位の両側縁に方形孔。本口に縦引き溝。内面に手斧痕。	
	W7	井戸1	井戸枠	(998)	(285)	8.4	モミ属	板目	手割材割り貫き製材。4片に破砕。横断断面は手割六角形と準定。本口より約55~63cm上位の両側縁にやや不整形な方形孔。本口に縦引き溝。内面に手斧痕。	
	W8	井戸1	板材	75.9	14.5	2.3	モミ属	板目	本表・本裏：打ち廻り製材材。本端：細い手斧痕連続	
	W9	井戸1	板	79.7	6.3	3.9	モミ属	板目	板目材を分割して成形。先端に手斧痕。	
1035	W10	井戸2	井桁	129.3	13.4	11.5	アカマツ	丸本	両端部上半：断面1/4状に切削。切削部に方形凹み。枝打ち	
	W11	井戸2	井桁	130.7	17.9	11.4	アカマツ	丸本	両端部上半：断面1/4状に切削。切削部に方形凹み。下面：手斧痕	
1037	W12	井戸3	曲物	本体	22.4	21.9	19.0 (全高) /13.0 (板厚)	ヒノキ割 アスナロ属	板目	板板外面：へぎ板面を3取り貫通。板板内面：縦・左上がり・右上がり ナギキ。目釘12孔(うち5で本釘のこる)。斜向き位置に漆本挿入。側 面縦じ
				詰め板				不明		
				裏				ヒノキ割 アスナロ属	不明	
				釘				スギ材 スギ属スギ	-	
				縦じ成				ヤマザクラ orカバノ皮	-	
底板	ヒノキ割 アスナロ属	板目								
1038	W13	井戸3	曲物	本体	48.1	46.7	(238) (高さ)	ヒノキ割 アスナロ属	板目	板板外面：へぎ板面を3取り貫通。板板内面：縦・右上がりナギキ。下 端ナギキがけ。暗茶褐色の漆塗布。板内7段以上後内段で板面縦じ
				裏				ヒノキ割 アスナロ属	不明	
				縦じ成				ヤマザクラ orカバノ皮	-	
1039	W14	井戸3	隅柱	(109.3)	7.0	7.2	モミ属	丸本	対向する2面に手斧切削による平滑面作付。方形の通し納穴3。止まり 納穴1。枝打ち	
	W15	井戸3	隅柱	(28.2)	6.6	5.1	モミ属	丸本	方形納穴穿孔	
	W16	井戸3	隅柱	(23.0)	7.9	6.7	モミ属	丸本	(裏面取り、明確な加工痕確認できず)	
	W17	井戸3	隅柱	(117.4)	8.5	8.1	モミ属	丸本	対向する2面に手斧切削による平滑面作付。方形の通し納穴3。止まり 納穴1。枝打ち。本口崩れ	
	W18	井戸3	枕木	78.0	6.7	2.3	コウヤマキ	板目	両本口：納作付。手斧痕。平滑な仕上げ	
	W19	井戸3	枕木	73.4	6.0	2.4	スギ	板目	両本口：納作付。手斧痕。割削	
1040	W20	井戸3	枕木	77.1	10.0	2.6	スギ	板目	両本口：納作付。手斧痕。割削。傾斜溝状に腐食	
	W21	井戸3	枕木	71.4	5.9	1.8	スギ	板目	両本口：納作付。手斧痕。割削	
	W22	井戸3	枕木	74.1	4.7	2.1	スギ	板目	両本口：納作付。手斧痕。割削	
	W23	井戸3	枕木	81.1	4.2	3.7	モミ属	丸本	肉曲した丸本材。両本口：納作付。枝打ち。割削のこす	
	W24	井戸3	枕木	75.6	4.0	3.9	モミ属	丸本	肉曲した丸本材。両本口：納作付。枝打ち。割削のこす	
1044	W25	井戸5	下駄	(22.8)	(7.2)	4.3	ヒノキ	板目	通面下駄。平面材は前後端を弧状にし、前縁より後縁が狭い。後巻は 後面の前に穿孔。歯は台と同じ幅で作り出し、縦断面は全全台形を呈 する	
	W26	井戸5	下駄	(20.2)	(5.9)	4.5	ヒノキ	板目	通面下駄。平面材は前後端が弧状。後巻は後面の前に穿孔。歯は台と 同じ幅で作り出し、歯面の縦断面は台形。後面は縦く。著しく磨り 減る。台の上面に凹凸。磨り減り痕か	
1046	W27	井戸6	曲物(底板)	20.1	19.4	0.6	ヒノキ	板目	3片に破砕。全て接合。目釘穴6孔。	

